遺書屋

（一通目～九通目）
第二版

湊　覚（みなと　かく）

●目次

遺書屋～あなたの思い～

湊　覚（みなと　かく）

●プロローグ！：『遺書屋』を始めた訳
●一通目・・・初めての『遺書』
●二通目・・・轢逃げ(ひきにげ)
●三通目・・・自殺
●四通目・・・思い出の品
●五通目・・・集団自殺
●六通目・・・虐め(いじめ)
●七通目・・・「死」の条件
●八通目・・・拳銃
●九通目・・・ホームレス
・エピローグ？
・後書き

【文中の記号の説明】

◆＝数日以上が経過

◇＝数時間以上が経過

・・・・・・・・・・＝数分、数十分以上が経過

「・・・」＝会話中などでの、ちょっとの間

（カッコ）＝振り仮名

<カッコ>＝説明、注釈

●プロローグ！・・・『遺書屋』を始めた訳

もう二十九歳。来年は三十路(みそじ)だ。でも、三十路なんて一般には、男には使わないか。
そんなことは、どうでも良いが、このままコンビニでアルバイトをしてて良いんだろうか？
だからって、俺に出来る仕事って、他に一体、何があるんだろう？
肉体労働！　体力的に無理だし、
パソコン！　と言ったって、インターネットで遊んでいるだけだから、コンピュータ会社に就職したって、いや、面接で落ちちゃうだろ～な。
あぁ、そんなことより、今は、眠りてぇ～。
でもなぁ、なんとかしなきゃ。このままじゃぁ、結婚も出来やしね～ぇ！！！
今のコンビニの仕事も、女子高生から声を掛けられるんだったら、まだマシだが、完全に無視されっぱなしだからな。お年寄りから、「ご苦労さん」と言われてもなぁ。せめて、二十歳(はたち)くらいの孫でも、連れてくりゃぁ、やり甲斐もあるのにな。

◆

やっと、遅い朝食を買いに来るお客さん達が帰っていった。
これから、早い昼食を買いに来るお客さん達が来る。
その、ちょっとの間、人が途絶える時間帯がある。俺にとっては、ホッと出来る時間だ。
いつも、早めに朝食を買いに来るお婆さんが、そんな時間に来た。
いつもは柔和なお婆さんが、何か怒っているような顔をしている。
お婆さんは、いつものお弁当を買おうとしていたが時間帯が違うので、もう売り切れていた。
お婆さんは、何も買わずにレジの前にやって来た。
どうしたんだろう？
そして、お婆さんが、
「いつも、ありがとうね」
と話し掛けてきた。
なんのことだか分からずに、ニッコリと微笑(ほほえ)むと、
「何人も、何人も、コンビニの店員を見てきたが、あんただけだよ、笑顔で心から『ありがとうございます』って言ってくれるのは」
と言った。
どうしたんだろう？
俺には、まったく分からなかった。そして、
「ちょっとだけ･･･、ちょっとだけ聞いてくれるかい？」
とすまなそうに、小さな声で話し掛けてきた。
店には他に客もいなかったので、
「なんですか？　他にお客さんもいないし、良いですよ」
と答えていた。
「息子夫婦が、朝早くに来たんだよ。今まで滅多に来たこともないのにね」
「それで、いつもの時間に来なかったんですね。

風邪でも引いたのかと思って、ちょっぴり心配しましたよ」
「息子夫婦が、お金に困っているらしいんだよ。だから、私のところに来たようなんだよ。でもネ、私はネ、年金生活しているんで、蓄(たくわ)えなんかないんだよ。でもネ、『なんとかする』って言っちゃった。
友達もいないし、誰かに聞いて欲しかったもので。ゴメンなさいネ。今日は、何も買わずに、ゴメンなさいネ」
と言って寂(さみ)しそうに、うつむきながら店を出て行った。
お婆さんは、何を俺に言いたかったんだろうか？
誰でも良いから、話しを聞いて欲しかっただけなんだろう。でも、なんで俺みたいな男に話したのかな？
不思議でしょうがなかった。
◆
数日が過ぎた朝、夜勤明けの日には、必ず朝飯用の弁当を買いに来る常連さんが、
「あのお婆ちゃん、自殺しちまったんだってよ。あんた、知ってた？」
と、言われたが、俺は、小首をかしげてしまった。
「ほら、朝早く来るお婆さんだよ。お婆さん。いつも、同じ弁当を買って帰るじゃねえか。あのお婆さんが、死んじまったんだよ」
と言って、弁当を買って帰って行った。
数日前に俺に話し掛けて来たお婆さんだと気がついた。
それから、後から後から、常連のおばさん達が、入れ替わり立ち代りやって来て、自分の仕入れた情報を俺に話して、満足そうに帰って行った。
同じような話しばかりだったが、まとめてみると、息子さんを受取人にして、生命保険に入っていたそうだ。息子のために自殺したと、もっぱらの噂(うわさ)になっているらしい。
息子夫婦は、年取ったお袋さんを死に追い立てるほど、本当に困っていたんだろうか？
常連のおばさん達は、そんな話しはしていなかった。
きっと、あの時のお婆さんは、もっと俺に話したいことがあったんだろう。
もっと、もっと聞いてあげれば良かった。
死んじまったら、もう、何も聞いてあげらんないじゃないか。
お婆さんの話しを、もう少しだけ。ほんの一分でも二分でも、長く聞いてあげられたら、お婆さんは自殺なんてしなかったかも知れないのに。
今さら思い返しても、もう、死んでしまった。
死んだら、もう、何も伝えられないよ･･･お婆さん･･･。
･･･でも『遺書』ってあるよな。
･･･でも『遺書』って、自分の遺産のために書くもんだよな。
･･･いや、そんなんじゃなく･･･
･･･あのお婆ちゃんの話したかった言葉を聞ける方法は、何かないかな？
･･･死んでからでも伝えられる方法が･･･

･･･やっぱり、『遺書』だよな。伝えたい人は、亡くなっっちゃっているんだものな。
『遺書』と違う、本当の自分を伝えられる何かがあれば･･･
遺産や愚痴や、綺麗ごとじゃない、自分のための『遺書』･･･
それが残っていれば･･･、俺が代わってやれたかも知れない。
そうだ！
そんな仕事があっても良いんじゃないだろうか？
今の時代、自殺や病死で亡くなる人もいるいるけど、事故や通り魔に遭(あ)って死んじゃう人もいる。
俺だって、今、コンビニ強盗に入られて、刺されて死んじゃうかも知れない。
人の命(いのち)なんて、あっけなく消えちゃう時代だ。
その人達のためにも、「第二の遺書」があっても良いんじゃないだろうか？
それの受取人が･･･俺でも･･･。
でも法律に触(ふ)れることだけは･･･したくない。
法に触れないことならやってやろう！
相手に見合った費用で、自分の生活ができる範囲で･･･。
なんだか、血が騒(さわ)いで来た！
まずは、自分ができるインターネットに載せてみよう。
「もし、あなたの命が　今　消えてしまったら・・・
　私があなたの思いを叶(かな)えます
　　ただし、法に触れないことが条件です」
よっしゃ～っ！
世のため、人のため、･･･そして、ちょっぴり、俺自身のために。頑張るぞ～っ！

●一通目・・・：初めての『遺書』－１

『お手紙ですみません。
インターネットの好きな友人から、こんな仕事をする人がいるようですよ、と教えてくれました。
私は、今、病院のベッドの中でこれを書いています。
自分でも、そう長くは生きられないと思い、遺言状も書きました。でも、一つだけ心残りがあります。ベッドの中なので、それが出来ない自分が腹立たしくなる時もありますが、生きている内は無理なことだとも思っています。こんな変なことでも、良いでしょうか？　もし良ければ、申し訳ありませんが、病院までご足労願えれば幸(さいわ)いです。
私も、そう長くは生きていられないと思います。
一日も早く来ていただければ、と願うばかりです』
･･･まさか、こんな手紙が俺に届くとは思ってもみなかった。
インターネットに載せてから、なんの反応もなく、二ヶ月が過ぎていた。コンビニには、今も行っている。食うためには、仕事をするしかないからだ。
『遺書屋』などを始めたことも忘れた頃に、この手紙である。
お婆さんが亡くなった時と、今とでは気持ちも変わっていた。
今は、あの時の情熱は消え、前と同じような惰性で生きていた。
どうしたら良いだろうか？
この人の病院に行くべきだろうか？
今のいい加減な生活の方が、俺にとっては楽だ。
でも、俺の人生って、このままで良いんだろうか･･･
考えたって仕方がない！
俺自身が水たまりに投げ込んだ『遺書屋』と言う石だ。
ちゃんと波紋が消えるまで、やらなきゃいけないよな。

◆

今日は休みだ。
一週間に一度の休み。いつもの通り、ゆっくりと、のんびりと家で過ごしたいが、手紙を送ってくれた人は、首を長くして、俺を待っているだろう。
家を出る前に、インターネットで病院までの道のりを調べてみた。あまりの遠さに、気持ちがしぼんでしまった。
そんな遠くまで、俺は何しに行くんだろう･･･
いや、そう思うから心が重くなるんだよな。
天気も良いし、単なる一人旅と思えば良いんだ。いつでも予定が変更可能な一人旅。いやになったら、帰ってくれば良いだけの話しじゃないか。考えるのは、やめよう。気楽な旅なんだから、と自分に言い聞かせ、家を出た。
指定席の予約もしていないので、自由席が一杯で混んでいたら中止にしようと思っていたが、電車はガラガラだった。

何年ぶりだろう、特急電車に乗るなんて･･･。
都会の騒音から徐々に離れて行く。
高いビルから、段々と低いビルへ。
コンクリートやアスファルトの道から、舗装されていない砂利道に。
なんだか、少しずつ、時代が遡(さかのぼ)って行くような。
なんだか、子供に返って行くような。
そんな不思議な気持ちになった。
･････････
アッ、と言う間に目的の駅に着いてしまった。
『時間感覚とは、辛(つら)い時間は長く、楽しい時間は短い』と言われているが、短い時間の時だけ思い出される言葉のようだと思った。
でも、降りた駅は、都会の駅より派手な建物だった。
遠く都会から離れ、昔ながらの駅を想像していのに、誰が建てたんだろう？　きっと、地元の政治家が、都会には負けたくないと思って建て替えたんだろうが、若者の姿がどこにもいない。おじいちゃん、おばあちゃんが、俺のことをジロジロ見てる。
昔の姿を残した駅にすれば、観光客も喜んで来るのにな、って思ってしまった。
改札を出ると、人待ち顔でバスが止まっていた。時刻表を見ると、電車の到着を待っているようだった。
バスの運転手に病院の名前を告げ、このバスで良いのかを確認した。間違えたら、会えなくなってしまう。
運転手さんは、
「これで良いですよ。遠いですから、停留所の近くになったら、声を掛けますから、安心して眠っててください」
と言ってくれた。都会では考えられない優しさだ。
声を掛けやいように、運転手の後ろの席に座った。
俺以外に、年老いた夫婦しか乗っていなかった。
バスが駅前を離れると、すぐに砂利道になった。
ガタン、ガタンと上下運動しながら進んで行く。
都会では、自殺したいのではないかと思えるようなスピードで、バスを運転している人もいるが、このバスの運転手は、ゆっくりと、ゆっくりと、まるでカタツムリの背中に乗っているような気分になってくる。
老夫婦は、三十分も過ぎたあたりで、降りてしまったので、乗客は俺一人になってしまった。
窓の外は、ただ、ただ、野菜畑や果物の木が植えてあるだけの単調な風景が続いていた。
バスに乗って一時間が過ぎたが、景色は、何も変わらなかった。それに、単調な揺(ゆ)れが加わって、眠気に誘われてきた。
上のマブタと下のマブタが仲良くなってなって来た時に、運転手さんが、
「あそこの建物だからね」

と指差した。
　その建物は、小高い山の上にあった。
　まだ、出来たばかりみたいだ。
　淡い水色の建物は、今にも透き通った空の青さに吸い込まれそうな、そんな錯覚をしてしまった。
　バスは、小高い山の下で止まった、
　その建物へは、車で行く道と木立に囲まれた歩いて行くための脇道があった。
　迷わず、脇道を選んだ。
　青々と生(お)い茂る木々に包まれて歩いていると、
　『俺は、何をしに来たのだろう。
　この道を、なんで俺は歩いているんだろう？』
　何もかも忘れている自分がいた。
　･･･このまま帰ろうかな？
　足を止め、大きく息を吸った。
　微風(そよかぜ)に揺れる木々の囁(ささや)きを聞いたような気がした。
　そして、一歩々々、踏みしめながら、俺は登り始めていた。
　　･････････
　おれっ、受付は男の人なんだ。
　なんだか、暗そうな人だな、と思いながら、
　「面会に来たのですが･･･」と言うと、
　「遠いところ、ご苦労様でした。
　この施設は、患者さんにとっては最高だと思うのですが、面会に来る人には、不便で最悪のようです。そのためか、面会に来てくれる人が少なくてね」
　と哀(かな)しそうに言った。
　一度も見たことはないが、姨捨山(おばすてやま)の番人も、こんな人なんだろう、と思ってしまった。
　気を取り直し、病室に向かう前にトイレに入った。
　トイレの鏡で、自分の顔を見た。
　そして、先日見たテレビ・ドラマと同じように、鏡の中の自分を見ながら『よっしゃー！』と声を掛け、両手で頬(ほほ)をひっぱだいた。
　「痛てぇっ！」
あまりの痛さに、目から涙が一筋流れてきた。
　･･･今度からは、テレビの真似なんて、やめようと思った。
　　･････････
　「初めまして、『遺書屋』です。
　手紙を受け取りました。
　もっと早く来たかったんですが、コンビニでバイトをしているもので、来るのが遅くなってしまいました。申し訳ありません」

と声を掛けると、その人は満面に笑みを浮かべて喜んでくれた。俺みたいな、いい加減な男にもかかわらず、すごい喜びようだ。
　そんなに喜んでくれたその人は、話し始めた途端に暗い表情に変わってしまった。何が、この人をこんなに暗く変えてしまったんだろうか？
　夫は、すでに亡くなっていると手紙には書いてあった。
　子供は皆、結婚し、この人にとって、何が心残りだと言うのだろうか。
　でも、この人にとって、大切なことなんだろうな。子供にも話せない何かが･･･。
　「これを預かって欲しいのです。
　そして、･･･私が死んだ後に、読んで欲しいのです」と言った。
　「俺みたいな、あなたとなんの関係もない俺に･･･預けて良いのですか？　あなたと別れた後に読んでしまうかも知れないのですよ。それでも良いのですか？」
　･･･そんなことを言う積もりはなかったのに・・・。
　でも、その人は、
　「それでも･･･良いですよ。
　死ぬ前に、誰かを信じられれば･･･私は幸せです」
と言った。
　「･･･変なことを言って、すみません。私は、『遺書屋』です。あなたが生きている間は、大切に保管しておきます」
　「ありがとう」
と言って、ニッコリと微笑(ほほえ)んでくれた。
　「失礼ですが、あなたが死んだことを、私はどうやって知れば良いのでしょうか？」
　「私が死んだら、友達が知らせてくれることになっています。インターネットで、あなたを調べてくれた人です。知らせが届いたら、これを読んでくださいね」
　「はい」
としか言えなかった。
　俺は、なんという仕事を始めてしまったんだろう。
　･･･こんなことが、俺に続けられるんだろうか？
　軽い、ほんの気まぐれでインターネットに載せてしまったこの仕事を･････
　「これで、やっと安心しました。どうしたら、この気持ちを分かってくれる人がいるだろうか、と心配のしどおしでした･････。
　ありがとうございます。こんな山の中の病院まで、良く来てくれました。遠かったでしょう。大変だったでしょう。
　でも、生きいて良かった。
　本当に、本当に･･･ありがとう。
　これは、あなたへの依頼料です。私が用意出来るお金なんて、たかがしれていますが、よろしくお願いいたします」
　「分かりました。でも、長生きしてくださいね。何か、話しがあれば、飛んで来ますから、連絡くださいね」

「はい。よろしくお願いいたします･････。
あなたの･･･元気なお顔が見れて、ホッとしました･････」
と言って、手を差しのべて来た。
何を言っているか理解できなかったが、あわてて、その手を取った。
暖かい手だった。
孤児院で育った俺には、本当の安らぎを感じさせる手だった。
「そろそろ行かないと、最終バスに乗れなくなってしまうわ」
と言って、握りしめていた手を、そっと離した。
そして、病室を出るまで手を振ってくれた。
そして、窓からも、俺が見えなくなるまで。
･････････
病院からバス停まで、車が通る道を歩いてみた。
･･･味気ない。
なんだか、俺は、あの人に対して、この道と同じような感じで話していたんじゃないだろうか？
もっと、ちゃんと話しをしてあげられれば･･･。
思い出し、自分にうんざりして、泣きたくなった。
もう少し･･･。いや、施設に頼んで泊まっても良かったんじゃなかいだろうか･･･。
振り返って、病院を仰(あお)ぎ見た。
もう、あの人の病室は見えなかった。
心の中で、「また来ますから･･･」と言って、頭を下げた。
◆

　あれから数日してメールが届いた。
　あの人の友達からだった。
　今度の休みになったら、もう一度、行ってみようと思ってい矢先に、友達からのメールだ。
　心臓が、「キュ、キュ」と泣いた。
　目の前に、霞(かすみ)が掛かり、頭の中が真っ白になったような気がした。
　そんな、変な感覚に襲(おそ)われた。
　･･･首を振り、気を取り直し、メールを開いた。
　そして、そこには
「病院で亡くなった」
との悲しい知らせが書かれていた。
　そのまま動けなくなった。
　不安が的中してしまった。
　なんで、あの病院に、泊まらなかったんだ！
　何故、休みを取って、もう一度、行かなかったんだ！
　俺の頭の中を、色んな思いが駆けめぐった。
　　･･････････
　あの人の依頼料のお蔭で、まだ、このアパートに住むことが出来ている。
　でも、あの人に対して、ちゃんと話しが出来ていなかった俺が、ここにいる。
　あの人から渡された『遺書』を開くことにした。
不安だった。
どんなことが書かれているんだろうか？
俺に一体、何を依頼してきたんだろうか？
俺に、その依頼が出来るのだろうか？
不安で不安で、『遺書』を開く手が震えている。
　　･･････････
「投げてしまったサイコロは手元には戻らない」
そんな言葉が頭をよぎった。
　　･･････････
　まだ、手の震えが止まらない。
　でも、あの人のためにも、自分のためにも、これを読まなければいけない。
　それが、『遺書屋』なんだ。
　自分で始めた『遺書屋』なんだ！
　　･･････････
　目を閉じ、大きく深呼吸をした。
　　･･････････
　封筒のはじを折り曲げた。

ていねいに、ていねいに折り曲げた。
ハサミを使う気にはなれなかったからだ。
何度も、何度も、折った。
綺麗に切れると思えるまで折り曲げた。
いざ、切ろうと思うと、肩に力が入り過ぎて、手が震え出した。
‥‥‥‥‥‥
「ビリッ」
‥‥‥‥‥‥\
き、切れてしまった。
もう、後戻りは出来ない。
あの人の顔を、思い浮かべながら･･･、心を込めて･･･
封を切っていった。
‥‥‥‥‥‥
「ビリッ･･･、ビリッ･･･、ビリッ･･･」
手が止まってしまった。
最後の最後で止まってしまった。
い、息が苦しい。
息を止めたまま、封を切っていたようだ。
もう一度、大きく深呼吸をして、
「ビリッ」
切り終えた。
‥‥‥‥‥‥
『遺書屋』としての、初めての仕事だ！
‥‥‥‥‥‥
封筒を広げ、便せんを取り出した･････
広げる手が、また震え出した。
‥‥‥‥‥‥
また、弱気な心が芽生えて来た。
出来れば見たくない。
見ないで、明日のコンビニの仕事を考えれば良いだけだ。
あの人は亡くなった。
誰も文句を言う人はいないだろう。
あの人の死を知らせてくれた人も、俺が読んだか、読まないで捨ててしまったかどうかなんて、分かりっこない。
俺さえ黙っていれば･･･。
そして、明日から、いつもの生活に戻ればすむことだ。
‥‥‥‥‥‥

俺は、何度、同じことをくり返しているのだろう。
俺は、あの人に誓ったのだ！
この仕事をする、と。
　　‥‥‥‥‥‥
目をつぶり、
　大きく息を吸い込み‥‥‥
　そして‥‥‥大きく息を吐いた。
　　‥‥‥‥‥‥
　目を閉じたまま、『遺書』を開いた。
　　‥‥‥‥‥‥
　目を開けよう！
　これから生きて行く自分のために！
　　‥‥‥‥‥‥
　目の前には、綺麗な文字が広がっていた。
　丸みをおびた、優しい文字だった。
　　‥‥‥‥‥‥
　「前略」
　続きを読み始めた。
　　◇
　‥‥お母さん
　手紙には、俺に対する侘(わ)びと、その当時のことが書かれていた。
　自分がさがし求めていた「お袋」が‥‥ここにいた。
　会いに行った時、なんで言ってくれなかったんだ‥‥と思った。
　でも、あの手の温(ぬく)もりは、今でも忘れていない。
　今にして思えば、なんて強い力の人なんだろう、と思った手は、大きくなった自分に対する想いが込められていたのだ。
　そして、
　『いつも、あなたのことを友達に話していました。そして、インターネットで「北斗七星　ホクロ　胸」で検索してくれていたそうです。何件か該当したものが見つかったそうですが、あなたではなかったそうです。そして、先日、『遺書屋』のプロフィールに、「俺の胸には、北斗七星と同じようなホクロがあります」と書かれていたのを見つけたそうです。年齢も「二十九歳」と書かれている人がいますが、あなたの子供ではないですか、と知らせてくれました。友達に興信所に依頼して、あなたの写真を撮って欲しいと頼みました。写真を見た時に、抱きしめてしまいました。
　その目は、お父さんとそっくりでした』
　　‥‥‥‥‥‥
　俺がこの仕事を始めなければ‥‥会えなかった。
　　‥‥‥‥‥‥

『遺書』には、通帳が入っていた。
俺が生まれた、その月から、少しずつ貯(た)められていた。
そして、小さな箱に入って印鑑もあった。
お袋は、片時も俺を忘れていなかったんだ。
ずっと、ずっと･･･俺のそばにいてくれたんだ。
あの手の温もりが、まだ、この手に残っている。
ずっと、引っ掛かっていた、あの言葉、そう、
『貴方の･･･元気なお顔が見れて、ホッとしました･････』
と言う言葉が、やっと理解出来た。
『遺書屋』を始めて良かった、と初めて思えた。
･････････
「お母さん、手紙、いいえ、『遺書』を、ありがとう」

●二通目・・・轢逃げ(ひきにげ)ー１

　コンビニに勤めて、もう七年か。良く続いてるよなぁ。
　最初の頃は、単なる接客業が、時代が大きく変わっちゃた。
　ファクス機、コピー機、映画やライブの予約、デジタルカメラの印刷から、銀行のキャッシュ・ディスペンサー。
　現金以外はお断り、なんて言っていた時代は、とっくの昔に終わってしまい、前払いに、後払い。そんな支払い方法のカードが山ほど出回っている。客は、自分のカードで買えないコンビニは、コンビニじゃないと言って怒り出し、帰っちゃう。
　そんな時代で、店も大変だろうに、店長が『金を出すから、店長の免許を取ったらどうだ』と言って、試験の問題集を渡してくれた。でも俺、『問題集』と聞いただけで、頭が痛くなった。
　でも、ありがたいよな、いい加減な俺なのに、心配してくれているもんな。
　それはそうと、お袋の友達から、お袋が亡くなったと言う知らせのメールは、葬儀が終わってから来た。
　義理の弟達に知られたくないためだろう。ちょっぴり悲しかったが、今さら俺が義兄です、とも言えないしな。
　お袋からもらった通帳のお金は、そのまま手をつけずにいる。きっと、必要になる時が来るだろう。
　さて、今日もコンビニでバイトだ！　頑張らなきゃ！
　　◇
　あぁ～疲れた。今日も客が良く来てくれたな。
　でも、人は来るが、買って帰る量が減って、売り上げが落ちているって、店長が嘆(なげ)いていたよな。それに、他社のコンビニが、近くに出来ちゃったし、お店、大丈夫かな。
　　◆
　また、いつもの変わらない一日が通り過ぎてしまった。
　そんなある日、お袋の友達からメールが届いていた。
　「どうお過ごしですか？　本当なら、あなたのお母さんが亡くなった時に、すぐに知らせてあげなければならなかったのですが、お母さんから『私が死んでも、息子には申し訳ないけれど、一週間たってから知らせて下さいね』と言われていたもので、すぐに知らせてあげられなくてゴメンなさいね。
　私は、お母さんとは小学校の同級生です。二人で良く遊んでいたのですが、小学校を卒業すると同時に、私の親が転勤になってしまい、離ればなれになってしまいました。でも、年賀状だけは欠かさずに出し合っていたのよ。でも、年賀状ではお互いに、綺麗事しか書いていなかったので、お母さんの詳(くわ)しいことは分かりませんでした。それから、互いに結婚した後、偶然に出逢ったのです。二人とも顔を見合わせ、小首をかしげて、見合ってしまいました。遠い記憶の中を捜し求めて、そして、同時に、『あっ！』と大声をあげてしまいました。年賀状のやり取りだけだったので、お互いに小学校の時の面影を頼りに思い出したの。

　それから、月に一度、会うことに決め、少女のように、何度も振り返り、振り返り、手を振りながら分かれました。
　そして、毎月々々、二人で会って、小学校時代の取り留めのない話しばかりしていました。そして、一年が過ぎました。
　そんなある日、お母さんが、『ちょっと、話しを聞いてくれる？』と、思い詰めた顔で話してきました。
　私は、『私で良ければ･･･』と答えました。
　お母さんは『どうも、私、悪い病気にかかってしまったようなの。今まで、誰にも話せなかったのだけど、あなたにだけは聞いて欲しいくて･･･。そして、私のお願いを聞いて』と言って話してくれたのです。
　『実は私には、結婚する前に好きな人がいたの。
　親に話したら、猛反対されてしまって･･･。
　そして、二人で話し合って、駈け落ちしたのよ。
　楽しかったわ。オママゴトみたいだった。
　小さな、小さなアパートだったけれど、楽しかったわ。
　そして、子供が出来たの。男の子よ。
　あの人、凄(すご)く喜んでくれたわ。
　でも、住んでいるところが親に分かってしまうと思って、それまで籍を入れていなかったのよ。
　あの人、「息子のために、俺、明日、籍を入れに行って来るよ」と、ニコニコしながら、照れ臭そうに言ったの。
　でも･････区役所に行く手前の横断歩道で、あの人は交通事故に遭って、あっけなく死んでしまった。
　信じられなかった。
　私は、警察の安置所で横たわるあの人を見ても、涙も出なかったの。
　まったく覚えていなんだけど、私、「ねぇ起きて！　いつまで寝ているの？　さぁ、家に帰りましょう。あの子が待っているわよ」と言っていたみたい。後で警察の人が話してくれたけど、それも覚えてないの。
　あの人が亡くなった後なのに、悲しみは、続けて襲って来たの。
　その事故で、私の住んでいるところが両親に知れてしまった。
　すぐに、両親が私のところに来ました。
　そして、そして･･･。あの子を孤児院に入れてしまい、私は無理やり結婚させられてしまったのよ。
　今になってやっと、主人の御両親も亡くなり、そして主人も見取り、少しだけ自由になったので、興信所に頼んで調べたの。
　何軒も、何軒も。
　でも、あの子のいるところは、分からなかったわ。

　あなたは、インターネットで、世界中の色々なことが調べられる、と言っていたでしょう。
私は、パソコンが使えないので、私の代わりに、あの子のことを調べて欲しいの。あの子の特徴を話すから調べて。お願いね』
と、何度も、何度も、私に頭を下げて、涙を流して言われちゃった。
私、何にも言えなかったわ。
　でも、お母さんの御両親にすれば、あなたは孫なのに、どこの孤児院へ入れたのか、何度聞いても教えてくれなかったそうです。その時は御両親を恨(うら)んだ、と言っていました。でも、御両親が亡くなった時に、御両親を良く知っている人から、その時のことをお聞きしたそうです。
　御両親は人に頼んで、孫のあなたを育ててもらおうとしたのに、その人は、お金とあなたを連れて逃げてしまったそうです。
　でも、邪魔になったあなたを孤児院に捨ててしまった、と言うのが真相みたい、と言っていました。
　御両親は、孫が死んでしまったかも知れない、なんて言えなかったので、『孤児院に入れた』と言ったんでしょうね。
　ご両親は苦しまぎれで言った、『孤児院』であなたは育った。
　あなたには、本当に悪いと思いますが、その時、お父さんの会社が倒産寸前で、従業員の給与を支払うために、私を売るようなことをしたようだ、とも話していました。
　お母さんの『遺書』には、そんなことまでは書かれていなかったでしょうね。これは、私とあなたのお母さんの話ですものね。
　今度、ゆっくりお会いして、お話ししましょうね。
　お母さんが『遺書』を書いたように、私も書いてみました。
　私も死んだ時に、お母さんみたいな安らかな死を迎えたいと思うからです。
　でも、娘の晴れ着を見て、孫と一緒に遊ぶまでは、生きているから安心してくださいね。
　でも、万が一、『遺書』が開かれるようなことがあった時には、よろしくお願いいたします。
　あなたのお母さんが、最後に
　『あなたの娘さんと私の息子が結婚できたら面白いのにね』
と言っていました。
　私も『そうね』と。答えました。
このことは、娘には、内緒にしてくださいね。
　長々と書いてしまいましたが、何かありましたら、よろしくね（ニコ）」
　　・・・・・・・・・・
　お袋も、苦しかったんだ。辛(つら)かったんだ。俺以上に、ずっと、ずっと、苦しくて、苦しくて。毎日、毎日、苦しんでいたんだ。
　長い間、この人がお袋の支えになってくれていたんだな。
　添付されているワープロ文書は、大切に保管しておこう。
　娘さんが結婚して、子供から「おばあちゃん」と言われるまで、読まずに済めば、俺も嬉しい。
　　◆

●二通目・・・轢逃げ(ひきにげ)ー２

おばさんからメールが届いた翌々日に、アルバイトから返って来ると、メールが届いていた。
おばさん以外には、迷惑メールしか届いていない俺のところに、続けてメールが届くなんて･･･。
メールを開いてみた。
おばさんの娘さんからだった。
一昨日(おととい)、おばさんからメールが届いたばかりなのに、何故、娘さんから･･･？
嫌な胸騒ぎがしたので、あわてて開いた。
「母から、
『私が死んだら、この人にメールをしてください。そして、"ONEGAISIMASUNE"と送ってくださいね。』
と書かれたメモがあったのです。私は、貴方(あなた)を知りませんが、メールを送ります。
返信されても読まないかも知れませんが、母が死ぬ前に、私に託したメモなので、メールだけはしました。
（追伸）
母は、交通事故でした。轢逃げです。
もう、私も成人して仕事をしています。母も仕事なんてしなくても良いのに、朝早くから、パートになんか行くから･･･。
貴方は、母とどのような関係ですか？
単なるメール友達とも思えないのですが･･･」
･･････････
こんなメールが届くとは思ってもいなかった。
何を、どう考えて良いか分からない。
お袋が死に、そしておばさんまでもが死んでしまうなんて･･･。
俺は死神なのだろうか？
俺は、このメールになんて返事をすれば良いんだろうか？
娘さんは読まないと言っていたから、返事を書かなくても良いんだろうか？
こんな仕事をインターネットに載せなければ･････。
でも、この仕事をしていなければ、お袋に会うことは、絶対になかっただろう。
俺は始めてしまったのだ！
もう後戻りが出来ない『遺書屋』と言う仕事を･･･。
「サイは投げられた！」
いや、自分でサイコロを投げたんだ！
ちゃんと、そのサイコロの目を見届けるのが、俺の仕事だ！
どこまで出来るか分からないが、やるだけはやらなければ･･･。
･･････････
パスワードは、ここにある。

・・・・・・・・・・

預かっていたワープロ文書をクリックした。

パスワードを打ち込むように、指示が表示された。

娘さんから送られた

"ONEGAISIMASUNE"

を打ち込む。

全てが「＊」で表示されので、正しく打ち込めたか心配だったが、　おばさんからの『遺書』は、簡単に開いた。

・・・・・・・・・・

「私は、死んじゃったのですね。

この文書が、あなたに読まれる日が来てしまったのですね。

人間、遅かれ早かれ、死ぬのは分かっているのですが･･･

私は、どんな死に方をしたのでしょう。

きっと、事故じゃないかと思います。

病気をしたことがない私が、病気で急に死ぬはずはないし、今の自分じゃ自殺はしないし、ましてや殺されてしまうようなことも思いつきません。

階段から落ちてしまったのかしら？

でも、やっぱり交通事故のような気がします。

それも、事故を起こした人が分からない『轢逃げ』じゃないかと思うのです。

死んでしまった私からお願いするのも変ですが、私が死んだ本当の理由をつき止めて、娘に納得してもらって欲しいのです。

調べる費用は、あなたのお母さんが、あなたに残した口座に振り込んであります。

微々たるお金なので、あなたは気がつかなかったかも知れませんが、この範囲で調べて下さいね。

間違えても、あなたのお母さんのお金は使わないでくださいね。

そんなことをされたら、あなたのお母さんに　あの世で会っても、おしゃべりが出来なくなってしまいますからね。

長々とすみません。大切な話しを書かなければいけませんね。

何故、私がそんな気持ちになったのか、私が感じたことをすべて書きます。

と言っても、自分でも良く分からないのです。

ただ、私は毎日、パートに行っていました。

娘が働き出し、

『お母さん、パートはやめちゃいなさいよ。お母さんと二人でなら、贅沢は出来ないけれど、普通の生活だったら出来るくらいのお金がもらえるようになったのだから』

と言われても、夫が亡くなってから二十年も勤めていると、娘の気持ちは分かるのですが、どう

しても身体が仕事場に向かってしまいました。

　パート先と娘のことしかなかった私には、それ以外に殺されるようなことは、何もしていないと思います。
　電車やバスには乗らないですし、買い物先で恨(うら)まれることもなかったと思います。
　蓄(たくわ)えと言えば、娘の花嫁衣裳を買ってやれるかどうかしかありませんし･･･。
　でも、人の心は分かりませんので、絶対とは言えませんね。

　パート先のお店ですが、どう考えても。心当たりがありません。
　私がこの店に勤めてから変わったことと言えば、社長さんが先代から若社長さんに代わったことくらいです。
　自分が変わったことと言えば、耳が悪くなったことくらいかしら。でも、恥ずかしいもので、誰にも気づかれないようにしていましたけど。

　肝心なことを書き忘れていました。

　あなたのお母さんが亡くなってから少したってからです。
　誰かに、じっと見つめられているような感覚に襲われたり、信号待ちをしていたら背中を押されたような気がしたりしたからです。
　すべてが私の思い過ごしかも知れませんが、現に私は、もうこの世にはいないのです。

　娘には、あなたがどのような人かを知らせていません。あなたに辛く当たるかも知れませんが、その時に
　『白熊ちゃんは、あなたの心に生きているのよ』
と言っていただけますか。それで娘は分かってくれると思います。優しい娘です。

　娘にも『遺書』は書いてあります。でも、殺されるかも知れない、なんて書けませんでした。書いてしまったら、あの子は自分で調べ出すでしょう。そんなことになったら、それこそ死ぬに死ねません。
　あの子を守ってくださいね。

　それと、私の死んだ時の顔を見てくださいね。これが、もう一つのお願いです。
　あなたのお母さんのような笑顔ではではないかも知れませんが。

　（追伸）
　あなたが、これを読んでいる顔を想像しました。
　ゴメンなさいね。きっと、悲しい顔をしているでしょうね。
　私の最後のお願いです。

いつもの笑顔でいてくださいね。
あなたが、お母さんのところに訪(たず)ねた時に、コンビニで働いていることを話しましたね。お母さんから、すぐに電話があって、一度、見に行って欲しい、と頼まれたの。次の日に行ってみました。そして、コンビニで働いている姿を、お母さんに知らせたのよ。『どんなお客さんにも、笑顔で対応しているって』。お母さん、電話の向こうで、凄く喜んで･･･、そして、泣いていました。
あなたの笑顔は最高でしたよ。
悲しいけれど、寂(さみ)しいけれど･･･
さようなら」
･････････
おばさんは、あの次の日に、俺のコンビニに来てくれたんだ。
声も掛けてくれれば良かったのに･･･。
◇
久しぶりに銀行に行って、お袋から届いた通帳に記帳してみたら、お袋が死んだ後に振り込まれていた。
お袋に頼まれて、何度も振り込みに行ってくれていたんだろうな。
少しでも、娘さんに残したかったろうに。
自分が死ぬのではないかと思って、死んだら、俺に調べて欲しかったんだろう。
おばさん、今度こそ迷わずに、出来るだけのことはしますから･･･
･････････
おばさんは、なんで殺されてしまったのだろうか？
いや、おばさんの思い過ごしで、単なる交通事故だったんじゃないだろうか？
もう警察では、轢逃げ犯の目星がついているんだろうか？
でも、おばさんは、
『誰かに、じっと見つめられているような感覚に襲われたり、信号待ちをしていたら背中を押されたような気がしたり』って書いてあったよな。
これが殺人だったら･･･
最初から殺す気でいる人間がいたとしたら･･･
証拠を残さないように、十分に考えて行動しているよな。
そうだとすれば、犯人は身近にいるはずだ。
おばさんは、殺されなければならない何かを、聞いたか、見たかしているはずだが、ただ、おばさんの記憶に残っていなかっただけなんだ。
･････････
まずは、おばさんの行動範囲を、娘さんに聞いてみるしか･･･方法はないな。
行動あるのみ！
いくら考えたって、俺の頭じゃ、分かりっこないものな。
◆

●二通目・・・轢逃げ(ひきにげ)－３

　葬儀の日に、俺はコンビニを休んで列席した。
　コンビニの店長は、俺が急に休みを言い出したので心配していた。
　悪いと思ったが、こればかりは日を変えることは出来ないよな。
　　◇
　葬儀場での儀式が終わった。
　おばさんの死化粧された顔は、ちょっと驚いたような表情に見えたが、苦痛に歪(ゆが)んだ顔ではなかった。
　　◇
　夜遅くなってから、娘さんの家を訪ねた。
　古いが、しっかりした二階家だった。
　ご焼香を終え、うつむく娘さんのそばに近寄って、
　「ご愁傷様です。
　･･･こんな時に申し訳ありませんが、私は、おばさんのメール友達です」
と、彼女の耳元で呟(つぶや)いた。
　娘さんは、
　「えっ？」
と言って、俺の顔を見た。
　良く、喪服の女の人は綺麗に見える、と聞いていたが、彼女は、清楚で可愛いく、その目は悲しみに潤(うる)んで、輝いていた。
　そんな不謹慎なことを考えている自分が、嫌になった。
　　･････････
　「貴方が、そうなんですか？」
　「そうです。貴女のお母さんのことを、詳しく聞きたいのですが、時間を取っていただけますか？」
　「えっ？　メル友なのに、貴方は母を知らないのですか？」
　「メル友だから知らないのです。祭壇の写真で、初めてお目に掛かりました。綺麗な、優しいお母さんだったのですね」
　「貴方に送ったあれは、なんだったのですか？　何かのパスワードだったのですか！？」
　「そ、そうだ。貴女のお母さんから、不信感を持たれたら
　『白熊ちゃんは、貴女の心に生きているのよ』
って･･･言ってください、とメールに書いてありました。私には、分からないのですが･･･」
　「･････そうですか･････母が、貴方に･････そんなことをメールで･････」
　「時間を取っていただけますか？　お願いします」
　「分かりました。後一時間もすれば落ち着くと思いますので、待っていてくださいますか！」
　「分かりました。ところで、どこで待っていれば良いでしょうか？」
　「二階に、私の部屋があります。そこで待っていてください！」

「見ず知らずの私みたいな者が、貴女の部屋に一人で入っても良いのですか？」
「母が、貴方を信用したように、私も貴方を信用します！」
「‥‥‥そうですか。案内して頂けますか？」
「二階に上がった、すぐ右の部屋です。まだ、やることが残っていますので、一人で行ってください！」
「わ、分かりました。貴女の部屋でお待ちしています」
◇
変なことになってしまった。
まさか、うら若い娘さんの部屋で一時間も待つことになるとは、思ってもいなかった。
二階に上がり、右側の部屋の襖(ふすま)を開けた。
‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥
当たり前の話だが、女性の部屋だった。
俺の部屋とは、だいぶ違う。
まずは、匂(にお)いが違う。
俺の部屋は、臭(にお)うだからな。
こんな部屋に、俺みたいな男を入れて心配ではないんだろうか？
そんなことを考えながら、俺は畳の部屋の真ん中に寝そべって、天井を見た。
こうでもしなければ、目のやり場に困ってしまうからだ。
それでも心が落ち着かず、目を閉じた。
本当に良い匂いだ。心から安心できる香りに満ちみちていた。
お袋の病室に行った時に鼻をくすぐった、あの匂いと同じだ‥‥と思った。
‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥
「起きてくださいますか？」
えぇ、ここはどこ？　この優しい響は？
『ガバッ』
と起き上がった。
そうか、ここは、おばさんの娘さんの部屋だったんだ。知らず知らず、寝てしまったようだ。心地良い香りに誘われて。
「貴方は、良い人のようですね」
「す、すみません。ね、寝てしまったようです」
「素敵な寝顔でしたよ」
「お、お恥ずかしい。
な、なんだか、心の休まる香りがする部屋だったもんで、寝てしまったたようです。
ど、どれくらい寝ていましたか？」
「貴方が二階に上がって、五分もたっていません。
いくら信用したからと言っても、心配だったから、五分たったら見に来ようと思って、そーっと二階に上がって来たら、寝息が聞こえてきたので、ビックリしました」

「は、はい。私も寝るとは･･･じ、自分でもビックリです。
そ、それに、耳元で囁(ささや)きが聞えた時には、あ、あまりにも、母のような響きだったもので、し、心臓が、止まってしまうかと思ってしまいました」
「驚かして、ごめんなさいね」
「い、いや。寝てしまった私が悪いのですから･･･。
そ、そうだ、もう話を聞いても良いでしょうか？」
「えぇ、親戚の人には、『疲れたので、ちょっと休みます』と言って来ました。親戚の人達は、下でお酒を飲みながら、自分の自慢話しをしていますわ。母のことなんか忘れて･･･」
「そ、そうですか。それでは、まず私が聞きたいことだけ聞いて、良いですしょうか？」
「その前に、貴方と母の関係を教えて頂けますか？　それを聞かなければ、どう答えて良いか分かりません！」
「そ、それは、そうですね。手短に話しますが、私はコンビニでアルバイトをしています。ひょんなことから、インターネットで『遺書』、あっ、本当の『遺書』ではなく、死んでしまった後に、聞いて欲しいようなことを書いた『遺書』です。自分では、『遺書屋』と思っています。その仕事をインターネットに載せたら、貴女のお母さんが、それを探してくれて、俺のお袋に話しをしてくれたそうです。
そして、お袋に会えたんです･･･
あっ、お、俺、孤児院で育ったんで、それまで、お袋を知らなかったんです。
で、でもお袋が悪いんじゃないですから。
おばさんとは、そんな関係です。だから、おば･･･、あ、貴女のお母さんに、会ったことはないんです。
そしたら、おばさんが俺に、メールで『遺書』を送って来ました。
そして、翌々日に、貴女からパスワードが送られて来て、おばさんが亡くなったのを知りました。
･･･おばさんからの
･･･『遺書』を読ませて頂きました」
「母は『遺書』に、なんて書いていたのですか？！」
「は、話さなければいけませんか？」
「話さなければ、私は、何も話しません！」
「そ、それでは困ります。おばさんからも、あ、貴女だけには知らせて欲しくない、と書いてありました。だから話せないんです」
「そうですか。分かりました。でわ私も、話しません！」
「･･･そ、そんな～っ。そ、それでは、お、俺、貴方のお母さんを裏切ることになってしまいます。そ、そして、『遺書屋』としての自分も･･･」
「お帰りください！
そして、二度と私の前に来ないでください！
貴方が『遺書屋』をやっていようが、私には関係ありません！
ただ、貴方は、お母さんの最後の手紙を持っています。でも、私にも、『遺書』を残してくれ

ました。だから、だから、お母さんが、貴方に残した『遺書』なんて･･･、『遺書』なんて･･･。帰ってください！」
　「ま、待ってください。ぼ、僕も、おばさんからの『遺書』が二通目なんです。お袋からのが一通目で･･･
　だ、だから、どうして良いか自分でも分からないんです。
　で、でも、貴女を信じます。信じるから、は、話しますが、お、驚かないでくださいね。そして勝手に行動しないでください。
　おばさんが一番心配していることですから･･･」
　「･･･分かりました。勝手な行動を取りません･･･。
　そ、そんな、疑わしい目で見ないでください。絶対にしません。母に誓います！」
　「実は･･･、おばさんは･･･、
　『殺されるのではないか』
と心配していました。
　そして、何故、殺されなければならないか、を突き止めて欲しいと･･･。
　貴女の『遺書』にそんなことを書いたら、貴女は、自分で調べるでしょう。おばさんは、それを心配して、貴女には知らせないで欲しいと･･･」
　「･･･ありがとう。話してくれて･･･」
　「そ、それほどでも･･･」
　「･･･それでは、母のことを話します。
警察では、単なる轢逃げだと言っています」
　「や、やっぱり。
　でも、おばさんは心配していました。自分が死ぬのではないかと･･･。
　だ、だから、それを確かめるために、私はここに来ました」
　「分かりました。それでは、なんでも聞いてください。
　私の知っていることは、すべてお話しします。何が聞きたいのですか？」
　「き、急に言われても･･･、ウ、ウゥ～ン･･･。さっきまで、聞きたいことだらけだったんだけど･･･。
　お、思い出した。
　コホン、それでは、
　おばさんの行動範囲、と言ったら変ですが、おばさんの友達や、良く行くところを教えてください」
　「母は、そんなに友達はいませんでした。
　ただ一人、ご病気で入院している同級生のところには、良くお見舞いに行っていました」
　「そ、そ、それ、お袋だと思います」
　「そうだったのですか。良く、その人の話をしていました」
　「も、申し訳ありませんが、このことが片付いたら、貴女が知っていることを、教えてください」
　「もちろん。母の大切な友達ですから。

･･･後は、パートに行くだけでした。
下にいる親戚の人達とも、それほど深い付き合いはなかった思います」
「ところで、どこのお店で働いていたんですか？」
「ここから少し離れた、大きな量販店です。
晴れた日には自転車で、雨の日には歩いて行くので、大変だったと思います。
私を一人で育てるために･･･」
と言って下を向いてしまった。
思い出したのだろう、目が潤(うる)んでいた。
「･･･これが、私の知っている母の毎日でした」
「そうすると、お店か、どこかで何かを聞いたか･･･見たか･･･してしまったのかも知れないですね。
でも、おばさんは、きっと自分では、何も聞いても、見てもいなかったんだと思います。
犯人は、きっと勘違いをしたんじゃないかと思います。
それで犯人は、あわてて･････」
「母は、何を聞いたのでしょうか？　何を見たのでしょうか？」
「わ、分かりません。おばさん自身が分かっていなかったのに、私や貴女が分かるはずないです」
「では、どうしたら良いのですか？」
「犯人の気持ちになって考えれば･･･一番良いのかも知れません。自殺は考えなくて良いです。おばさんからの『遺書』にも書いてありましたから。

●二通目・・・轢逃げ(ひきにげ)－４

　サスペンスの本やテレビを良く見るんですが、犯人は大体、
　　①利益を得る人
　　②生きていたら困る人
それ以外は･･･
　　③行きずりの、まったく関係ない人
ですが、関係ない人では考えようがありませんよね。
　①か②で、関係してそうな人を一人ずつ洗い出していくしかないですね。
　まずは、貴方のお母さんが亡くなって、得をする人は･･･
　いませんよね。そ、そんな目で、わ、私を見ないでください。
　そ、それでは、②で決まりですね。
　貴女が考えられる人の名前を言ってみてくれますか？
　お母さんが話していたことを思い出しながら」
　「はい･･･
　あのお店と言えば、まず店長さんです。
　婿養子だと言っていました。オーナーの娘さんと結婚したそうです。だから、奥さんには頭が上がらない、と店長さんがこぼしていたと、母から聞いたことがあります。
　なんでも、若い女の店員が入ると、すぐに、ちょっかいを出すそうで、いつも奥さんに叱(しか)られている、と笑って話していました。
　次は、副店長さん。
　その店が出来た時から勤めているそうです。
　自分がいるから、この店がつぶれないんだ、と陰で良くぼやいていたらしいのです。母が仕事で失敗した時など、怒りながら良く愚痴っていたそうです。
　･･･今まで、母が言ったことなど忘れていました。
　でも思い出せば･･･母も、あのお店で色々とあったのですね。
　もっと、母の話しを聞いてあげれば良かった･･･」
　「そ、そうかも知れませんが、今は、そんなことを考えている暇(ひま)はないと思うんですが･･･」
　「そうですね。
　そう言えば、経理をやっている女の人の話も聞いたことがあります。
　廊下で伝票を拾って、その人に届けたそうです。そしたら『普段は、この店から仕入れていないんだけど、その店の奥さんを知っていて、急に旦那さんが亡くなったので、お香典代わりに仕入れた』と、あわてて言い訳みたいに話し出したそうです。それに、誰かに聞かれたら、そう言ってくれれば良い、とも。
　母は、『なんだか不正をしているのではないかと心配で･･･。もし、経理さんが捕まったら、私も幇助(ほうじょ)の罪か何かで逮捕されるのかしら』と言っていたことがありました。結構、心配性な性格でしたから。

　でも、その経理の女の人、いつもお店で奥さんに小言を言われていたみたい。そうだ、母が買い物から帰って来て『前にも見たんだけど、可愛そうに、あの経理さん、店の外でも奥さんに小言を言われてるいみたい。うつむいて、奥さんの話しを聞いていたわ。いやな奥さんね』と言っていたことがあったわ。
　他の店員の中には･･･特に思い出せるような人は･･･いません。
　元々、人の輪に入るのが得意な人ではなかったですから。
　そうだ、店員さんの中で、一人だけ。
　そう、母が怒って帰って来たことがありました。
　その人は、店のお金を盗んだ、と言われて、いたたまれずに、辞めていったそうです。
　母は、『彼女では絶対ないのに！　彼女は濡れ衣を着せられてしまったのよ！』と、あれほど怒っている母を見たのは初めてでした。理由は、聞きませんでした。今、思うと、ちゃんと聞いてあげれば良かった･･･。
　今、思い出せるのは、それだけです･･･」
　「そうですか。今、貴女が思い出せる、おばさんがお店で関わったと思われる人達は、
①店長さん
②店長の奥さん
③副店長さん
④経理の女の人
⑤濡れ衣かも知れない店員さん
の五人ですね。
　まずは、五人に絞(しぼ)って考えてみましょう。
　ところで、五人の中で運転が出来る人を知っていますか？」
　「車の運転ですか？･･･」
　「えぇ。轢逃げなので･･･」
　「経理の女の人は、目が非常に悪いって母が言っていました。一度、会ったことがありますが、相当に度の強い眼鏡を掛けていましたし･･･。でも、免許証を確認している訳ではないので分かりません。他の人達も･･･」
　「そうですよね。今の時代、免許を持っていない人なんていないかも知れませんよね。
　ところで五人の中で会ったことがあるのは、その経理の女の人だけですか？」
　「いいえ、副店長さんとも会っています。母が亡くなる二週間くらい前です。そう、土曜日だったので、私が休みでした。
　母から『忘れ物を届けて欲しい』と電話があったのでお店に届けに行きました。
　母は、廊下の奥の暗がりで、しゃがんでいました。
　何をしているのだろうと思いながら、遠くから『お母さん』、と呼んだのです。
　そうしたら、柱の陰から副店長さんと経理の女の人がビックリしたように出て来て、私の方を見るのではなく、奥の母を見ました。
　そして、副店長さんが

『そ、そこで何をやっているんだ！』
と母を怒鳴(どな)りました。
その時に、副店長さんと経理の女の人が柱の陰に居たのを初めって知りました。
母は、耳が遠いので
『えぇ？』
と言うと、
副店長は、さらに声を荒立て
『何してんだ！』、
と言ったのです。
母は、ビックリして、おびえた声で、
『こ、ここに、誰かがガムを噛み捨てたようで･･･。それを誰かが踏んで、こびり付いていたのを取っていました』
と答えました。
副店長は急に猫なで声で、
『そ、そうでしたか。そんなことは、掃除をする会社の人が行うから、ほっとけば良いんだよ」
と、母に言いました。
その間、経理の女の人は、私に近づいて来て、
『娘さんだったのですね。お母さん似で綺麗ね。お母さんのご自慢でしょう』とか言っていたような気がしますが、私は母が気がかりで、その後も、なんて言ったか覚えていません」
「き、き、きっと、そ、そ、そ、そ･･･それですよ」
「何がですか？」
「あ。あ、あ、貴女のお母さんが、ひ、轢逃げにあった原因じゃないですか～～！！」
「えっ、そんなことが？？？」
「あ、貴女も、お母さんも、二人の会話を聞いていないんですよね。で、でも、二人にとって、非常に大事な話をしていたとしたら･･･。そ、そして、それを、貴女のお母さんがそばで聞いてしまった、と勘違いしたら･･･。ふ、副店長も、け、経理の人も、貴女のお母さんの耳が悪いのを知らなかったんじゃないんですか？」
「えぇ、多分、知らなかったと思います。母が、『私の耳が悪いことを、店の人に知られたら、『首』になっちゃうから、知られないようにするのも、結構、大変なのよ』、と言っていたことがありました。だから早く、仕事なんか辞めて、ゆっくり家で休んでいれば良いのに、と何度も、何度も言ったのに･･･」
「ふ、二人は、何を話していたんだろう？
ふ、不倫かな？
でも、不倫くらいで人を殺していたら、今の世の中、殺人者だらけになってしまったりして･･･。
で、でも、俺は、やだな。と言っても、俺は独身だったか･･･。
ゴ、ゴメン。俺は、何を言っているんだ･･･
副店長は、その店の最初から働いていた人だよね。その店は、開店して何年くらいになるの

か知ってますか？」
「私が中学に入る頃だったから、十三、四年前くらいかしら？」
「そうすると、店長も副店長も、独身だったんだろうな。
そして、オーナーの娘と結婚したのが店長だった･･･。
副店長からみれば、ひよっとして逆の立場になっていたかも･･･。
経理の女の人は、どうも不正を働いているようだ。
この店を二人で乗っ取ることを考えたら･･･。
それを聞かれたとしたら･･･。
聞かれたと思い込んでしまったら･･･。
そ、そうしたら、二人は何を考えるだろうか･･･。
･･･こ、これは、俺の想像です。
な、なんの証拠もありません！」
「･･･でも、可能性は『ゼロ』ではないわね」
･･････････

「私、会社を辞めて、あの店で働こうかしら？
そうすれば、もっと手掛かりがつかめるかも知れないわ」
「だ、駄目です！
あ、貴方の気持ちは良く分かりますが、自分達が殺した人の娘が店員として入ってくれば、相手は警戒するに決まっています！
･･･お、俺、今のコンビニに長く勤め過ぎました。
お袋が貯めておいてくれたお金もあるし。
俺が、その店に勤めて、何かを見つけ出す方が、余程、良いよ。
そ、そうしましょう！」
「でも、なんで、そこまでするのですか？」
「貴女のお母さんが、俺とお袋とが会えるようにしてくれたからじゃないですか。本当に感謝しています。その人のために、俺が出来る範囲で、行動しようとしているんです。コンビニを辞めたって、その店で働くんだから、収入としては変わりません。
そ、それに、貴女を危険にさらす訳にはいきません！
い、いや、俺は『遺書屋』を始めたんです。
こ、この『遺書屋』の仕事を、ちゃんとやらなきゃいけないんです。
あ、貴女のお母さんに誓ったんです。
や、やらせてください！」
「･･･わ、分かりました、あ、貴方の気持ちが･･･。
よ、よろしく、お願いします」
「は、話しは、
き、決まりましたね。
そ、それではコンビニを辞める手段を、か、考えます」
･･････････
「ははっ、ははははは」
「クスッ、クスクスクス」
「俺達、い、いや、僕達は、何を言っているんでしょうね」
「そうね、母が聞いたら、笑い転げてしまうわね･･･
母が･･･
生きていたら･･･」
「や、やってみましょう！」
「お願いします。貴方にとっての初仕事。よろしく、お願いいたします」
「で、でも店員を募集しているのかな？」
「あの店は、いつも人手不足で困っている、と母は言っていました」
「そ、そうですか。それでは、まずは警察に行って、話しを聞いてみませんか？」
「えぇ、聞いてみたいです」

◆

「すみません。先日、発生した轢逃げについて、話を聞きたいのですが･･･」

「担当の刑事は･･･、丁度、あそこにおりますので、聞いてみてください」

その刑事さんは、定年後に奥さんから離婚を言い渡されてしまったような感じの人だった。

本当にこの人が、ちゃんと調べてくれているんだろうか？

◇

「すみません。先日の轢逃げを担当している刑事さんですか？」

「そうだが･･･。あっ、後ろにいるのは、あの事故の被害者の娘さんだね」

「えぇ、そうです。あの時は、色々とありがとうございました」

「ちゃんと調べているんですがね。なかなか、物証がなくて、調査が難航しているんですよ」

「は、犯人の、か、影も見えないんですか？」

「ところで、あんたは？」

「･･･私の母の遠い親戚です」

「そうですか。遠～い親戚ね。何か分かりましたら、お知らせしますので、申し訳ありませんが、今は話せるほどの材料がないもので･･･。申し訳ない。

そうだ、そちらで何か思い出したり、分かったことがあったら、ここに電話していただけますか？」

と言って、名刺を渡された。まったく、進展がないようだ。彼女もうなだれてしまった。

◆

「すみませんが、この店を辞めさせてもらいます」

「な、何を言い出すんだね、君は！」

「長過ぎたんです。この店に、長くい過ぎたんです、俺」

「ば、馬鹿なことは言わないでくれよ。き、君がいなければ、この店は、どうなるんだ」

「店長がいるじゃないですか。店長さえいれば、もっと、このコンビニは繁盛しますよ。俺みたいな者が長く勤めていたので、ここまでにしかならなかったけど、店長が仕切れば、二倍にも、三倍にも売り上げを伸ばせますよ。長い間、申し訳ありませんでした。足を引っ張り続けて、本当に申し訳ありませんでした。

今月分の給料は、いつもの通りに取りに来ますので、よろしくお願いします。

本当に、長い間、ありがとうございました」

店長は、口をあんぐりと開けて、それ以上、何も言わなかった。言えなかったのかも知れない。

これからは、今まで俺がやっていたことを、誰がやるのかな？

近所の幼稚園や小学校で運動会があれば、お菓子などを多めに並べ、連休の時には天気を気にしながらお弁当の仕入れを増やしたり。そんなことが、若いバイトには無理だろう。すべて店長が一人でやることになるんだろうな。店長が、どこまで出来るか不安は残るが、自分で決めたことだ。店長には悪いと思うが、自分で決めた道を歩かなければ･･･。

俺の人生なんだから･･･。

◆

さて、今日から量販店勤めだ。

今まで、客の振りをして、店長や副店長を見てきたが、これからは、犯人探しのために、情報を集めなけりゃ。

頑張るぞ！

『遺書屋』の初仕事！

‥‥‥‥‥‥

「今日から、ここで働くことになりました。よろしくお願いします。長年、コンビニで働いていたので、接客は得意ですが、こんな大きなところは初めてなので、ちょっと心配ですが、頑張りますので、よろしくお願いいたしま～す！」
と、店長に挨拶した。

店長は、そんな俺を見て、ニコニコしながら頷(うなづ)いただけだった。人の良さそうな感じを受けたが、殺人者じゃないとは言えないよな。

ああ言ったが、店が広い分だけ楽なような気がする。コンビニの場合には、全ての商品を見なければならないが、ここでは自分の担当分を、まず覚えるだけで良いそうだ。広いといっても数日あれば、ある程度のことは分かるだろう。まさか、コンビニで覚えたことが、ここで役立つとは思ってもみなかった。

孤児院の院長さんが

『人を大切に、仕事を大切に、そして真面目に生きることですよ。

何をしても、無駄ということはないからです。

そうやって生きていれば、自分の幸せが見えてくるから不思議ですよ』
と言っていたことを思い出す。

本当に、無駄はないんだな。でも、まだ俺には、幸せがどんなものかまでは見えてこないけど･･･。

◆

この店に来てから、もう一週間が過ぎてしまった。コンビニを辞めるのに一週間かかってしまったから、あれから二週間になる。時々、コンビニの店長がいない時に、店をのぞきに行ったが、なんとかやっているようで安心した。

それにしても、轢逃げ犯は、今だに分かっていない。轢逃げ犯が捕まるのは、事故が起きて一週間が勝負だ、とサスペンスの本で読んだことがある。それ以上過ぎると、証拠を見つけ出すことが困難になるからとも書いてあった。それもそうだよな。雨が降ってしまえば、タイヤの痕(あと)も消えてしまうだろうし。

遺族にとってみれば、忘れることなんて出来ないことだが、警察からみれば、毎日のように事故は起きているから、警察だけをを責めるのは酷(こく)かも知れないな。

捕まってくれれば、俺の仕事も終わるし、彼女も安心できるのに。でも、『遺書屋』は『遺書屋』として、『遺書』を送ってくれたおばさんの願いを叶えられるように頑張ろう。

‥‥‥‥‥‥

まず、この一週間で調べた結果から勝手に判断すると、店長と、その奥さんと、副店長と、経

理の女の人に犯人は絞れた。と言っても、濡れ衣で辞めさせられた女の人だけが犯人の圏外になっただけだよな。
　彼女は、轢逃げがあった当日のアリバイが、ちゃんとあった。旦那さんが体調を崩し、緊急入院したために、付きっ切りで看病していたそうだ。旦那さんは退院できたそうだが、自分をかばってくれたあばさんが亡くなったのを聞いて、凄(すご)いショックを受け、今度は自分が入院してしまったそうだ。
◆

そんな、ある日、経理の女の人が出勤した時に一緒になった。
「おはようございます。結構、繁盛してますね。仕入れが大変でしょう？」
「そうでもないわ。パソコンに在庫が表示されるから、それに合わせて仕入れれば良いだけよ」
「俺、ここに勤める前にコンビニで働いてたんですよ。そん時は、天気によって、仕入れる個数を考えなきゃいけないから、結構、大変だったんですよ」
「ここは、コンビニと違って、生鮮食料品を扱っていないから、その点は楽よ。でも、農家と契約して、生物(なまもの)も扱おうと思っているの。そうじゃなければ、これからは生き残れないと思うのよ」
「そうですね。直接、生産者と取引すれば、途中の費用が省(はぶ)けるし、それこそ新鮮で、無農薬の品が店に並べられるますしね。発想が良いですね」
「消費者のためを考えているだけよ」
「それはそうと、結構、度のきつい眼鏡を掛けていますが、車の運転は大変でしょう」
「免許は持っていないわ。欲しかったんだけど、標識を見るのが大変で、あきらめたの」
「そうだったんですか。僕の知ってる人で、やっぱり、車の免許証がなくって、『自分は自分なのに、免許証がなくて、自分を証明できないんだ。クレジット・カードを作るのも面倒だし、だから、現金でしか物を買わないようにしている』って言ってましたよ」
「そうね。不便ね。パスポートも保険証も持っているのに、車の免許証を持っていないから、その人の気持ちが良く分かるわ」
「いっそ、『車の免許を持っていない』って言う免許証を発行してくれれば良いですね」
「貴方、面白いわね。もし、『車の免許を持っていない』免許証が出来たら、一番で受験してみるわ。
でも、どんな試験問題が出るのかしら？」
「試験問題？　それは、問題を出す方が難しいですね。
ところで、ご結婚は、しているんですか？
あぁ、こんなこと聞いちゃ、いけないですよね」
「別にかまわないわよ。
結婚はしたんだけど、子供が生まれた頃から、主人が変わってしまって･･･。私が、子供のことに関わりぱなしだったのがいけなかったのかも知れないわね･･･。
愛人を作って出て行ってしまったわ」
「お子さんは？」
「小学二年生よ。男の子で、ケガばかりしているわ。
お金を貯めて、大学まで入れてあげるのが、私の夢なのよ。でも、貯まるかしら･･･。
さぁ、今日も忙しくなりそうだから、頑張ってね」
「はい、頑張ります」
･･････････

短い会話だったが、どこにでもいるおばさんに思えた。
まだ、子供が小さいんだな。ここの給料で、大学まで入れるんじゃ、大変だろうな。
職場に向かおうとしたら、後ろから急に
「ねぇ、君」
「は、はいっ？」と振り返ったら、副店長さんだった。
「どうだね、仕事は覚えられたかね」
「えぇ、なんとか」
「今、経理の人と話しをしていたが、給料に不満でもあるの？」
と聞いてきた。きっと、盗み見していたんだろう。聞えていなかったようだ。
「いぇ、繁盛しているようなので、仕入れが大変だろうなと思って。俺、ここに来る前は、コンビニで働いていたんで、仕入れの大変さを、ちょっとだけ味わったことがあったもので」
「新人が、そんな心配をする必要はないよ。自分の持ち場を、しっかりと守ってくれれば、この店は安泰(あんたい)だよ、安泰」
「そうですね。品揃(しなぞろ)えもしっかりしているし、店員さんの教育も出来ていますからね」
「店員の教育は、私の仕事だからね。そう言ってくれると嬉しいよ」
「副店長さんは、この店は長いんですか？」
「出来た時からだからね。その時は、私も君より若かったよ」
「そうですか。そんなに長いんですか。色々と大変だったんでしょうね」
「ここまでになるには、それは大変だったよ。店長は、私よりも学年が一つ下でね。店長のお父さんは議員さんで、店長は小学校から偉(えら)そうにしていたよ。家が近かったから、いつも鞄持ちさ。その、お父さんが早くに亡くなって、大学に入る頃には、お金がなくて、結構、大変だったようだ。それが、この店のオーナーの娘さんと結婚して、今じゃ店長さ。
オーナーも娘さんも、目が悪いんじゃないかと思ったよ。私のような男が、そばにいるのにな」と言いながら大きな声で
「わっはっは」と笑った。
「そうなんですか。副店長さんも大変でしたね」
「昔の話しだよ、昔、昔のな。
そろそろ、お客さんが入って来るから、今日も一日、頑張ってくださいよ」
「はい！」
こんな人が、人を殺すかな？
なんだか、見当違いなことをやっているような気がした。
◇
帰りがけに店長が、
「毎日、ご苦労さん。すぐに家に帰るのかね？」
「えぇ、することがないもので･･･」
「うちの店では、新人さんが入ったからって、歓迎会なんてやらないんだ。入れ替わりが激(は

げ)しいからね。どうだね、歓迎会の積もりで、一杯飲むか？　もちろん、酒が飲めればの話しだがね。最近の若者は、酒を飲めない人もいるらしいからな」
「いぇ、喜んで！　お付き合いします。お酒は、嫌いな方じゃないです」
「そうか、そうか。最近は、なかなか一緒に飲みに行ってくれる新人がいなくてね。年寄りの愚痴を聞かされると思ってるんだろうな。ところで、何が好きなんだ。中華か？　和食か？
私は、どうもイタ飯が苦手でね」
「私も、イタリア料理は苦手なんですよ。ワインが、どうも･･･」
「そうか、そうか。それじゃ、和食にしよう。日本酒は好きか？」
「えぇ、でも、甘口が苦手(にがて)で･･･」
「気に入った。それじゃ、さっそく行こう！」
嬉しそうな店長の顔。本当は、イタ飯でも中華でも和食でも、お腹(なか)が一杯になればなんでも良かった。でも、店長くらいな年の人でイタ飯が嫌いな人は、和食が好きな人が多いくらいは俺にも分かる。日本酒は辛口(からくち)。一昔前の日本人に多いパターンだ。
日本酒か。何年振りに口にするだろう。それにしても、店長の喜びようは異常だった。よっほど、日本酒が好きなんだな。でも、奥さんが怖くて飲みにも行けないんだろうな、と思った。
･････････
「ここだ、ここ。久しぶりに来たな。なかなか来られなくてね」
「こぢんまりとした、家庭的な、良さそうな店ですね」
店長さんが、暖簾(のれん)を分け、ガラス戸を開けて、
「おーい、久しぶりに来たぞ～っ」
「どうしたのよ、便(たよ)りがないので、死んじゃったと思っていましたよ」
「そんなことを言うなよ。店が忙しくて来られなかっただけじゃないか」
「でも･･･、あら、良い男が後ろにいるから許してあげるわ。カウンターで良いわよね？」
「あぁ。適当にツマミを頼むわ。酒は辛口のにしてくれ」
「はい、はい、分かってますわよ」
「どうだ、良い店だろう。毎日でも来たいんだが、なかなか、これが」
と言って小指を立てた。
良い店長だと思った。
フッと、コンビニの店長を思い出してしまった。どうしているだろうか？　苦しんでいやしないよな。いい加減な人だから、平気だよな。
「孤児院で育ったそうだが、親を恨んでいるのか？」
しょっぱなから、聞いてきた。嘘だろう！
「恨んでいました、二十歳（はたち)までは。でも、この年になれば自分の生活だから、あまり関係ないですね」
「そうか、そうか。まぁ、ぐっと空(あ)けちまえ･･･。良い飲みっぷりだな。人間なんて、親が産んだとしても、ずっと親の庇護の元で生活出来ゃしないからな。
まぁ、女房みたく、こんなせせこましい町で、お姫様みたいに生活していた奴もいることは、いるがな。

お前は、まだ独身だったよな。
結婚って不思議だぞ！
おい、女将(おかみ)、酒を頼む。お猪口(ちょこ)じゃなくて、そこのコップをくれ、コップを。うん、ありがとう。
ところで、なんだっけ。
そうだ、そう、結婚だ。
まったく違った人生を歩んできた二人が一緒になる。それも不思議なことだと思うが、歩んできた道も、考え方も、価値観も違う。それが一緒に生活する。長く一緒にいるためには、どちらかが、歩んできた道や、考えや、価値観を変えなければ、生活なんて出来ないんだよ。独身の君には分からねぇだろうが、これからの君に伝えたかったんだよ。
いけねぇ、これが年寄りの愚痴ってもんだったな。
今日は、俺のおごりだ。
飲んだ、飲んだ。何かツマミを頼むか？」
なんだか嬉しそうに、俺に話した。
親父やお袋の知らない俺には、完全には理解できなかったが、気持ちは分かるような気がする。きっと、この店長は、自分の生活のために、自分の大切な『夢』を捨ててしまったんだろうな。そんなことを思っていたら、突然、
「あなた！　ここにいたの！　探し･･･、あら、貴方･･･ひょっとして新人さん？」
「なんだ！　いきなり店に飛び込んで来て！」
「ごめんなさい。また、パートの女の子を誘っているんじゃないかと思って。
でも、良い男じゃない。名前は？　年は？」
「そんなことは、関係ないだろう、お前には！」
「ごめんなさい。そうね、明日、履歴書を見てみるわ。
若いって、すてきね。あなたと違って」
「お、お前と言う奴は！」
「あら、今日は強気ね」
「店長さんの奥さんですか？」
「そうよ」
「初めまして。店長さんが、俺のために歓迎会･･･と言っても俺一人ですが、やってくれていたんです。申し訳ありません」
「貴方が謝(あやま)る必要はないわよ。主人が、ちゃんと連絡してくれれば、心配しなかったのに。ねぇ、あなた」
「急に決まったもので、すみません」
「頑張ってね。期待しちゃうから。でも、格好良いわよ、貴方」
と言って帰って行った。
「すまんな。結婚当時は、優しくて、淑(しと)やかな女だったんだが、年を取ると･･･」
「でも、心配して、この店まで来てくれたじゃないですか！」
「本当に心配してかな？

あいつは、あいつで･･･。
まぁ、そうしておこう。
そう言えば、この前、副店長さんと話しをしたんですが、同じ小学校だったそうですね。家も、近いと言っていました」
「副店長が？　それじゃ、カバン持ちをさせられたとか、オーナーも娘さんも人を見る目がない、とか言っていただろう。副店長の愚痴だよ。いつも新人が入ると言っているようだ。
悲しい性格だね。オーナーは分かっていたんだろうな、そんな性格を。今となっちゃ、俺は副店長で良かったのに、と思うことが･･･。
やめだ、やめだ、こんな陰気な話しはやめにしよう。
ところで、お前、彼女がいるのか？
おい、女将、酒がないぞ～っ！　ツマミも追加してくれ～っ！　今日は、妻の公認で飲めるんだ。さぁ、さぁ、飲むぞ。明日は定休日だから、ゆっくり飲むぞ！」
◇

　ウグッ･･･ウグッ･･･
　飲み過ぎた。
　気持ちが悪い。
　あれから、何時間もたっていない気がするのに、太陽は、昼を知らせるくらいに昇っていた。
　フッと、携帯電話を見ると、着信があったことを知らせるランプが点滅していた。
　彼女からのメールだった。メールの着信音にも気づかずに、爆睡していたようだ。
　「どんな状況ですか？」と書かれていた。
　あわてて、
　「もう少しで分かると思います。もう少しだけ時間をください」
と、返信した。
　頭が割れそうだ。誰かが頭の中で、ガンガンとドラム缶をたたいている。
　勇気を振りしぼって立ち上が･･･れないので、はいずって洗面台まで行った。洗面台に手を掛け、ようやく立ち上がることが出来た。顔を洗い、歯を磨き、
　『オェッ』
　砂糖もミルクも入れずに、苦いコーヒーを飲み込んだ。
　『苦っ、ウェッ、オェッ』
　　･･････････
　これまでに、他の店員から聞いたことを思い出してみた。
　「知らなかったんですが、ここで働いていた人が轢逃げにあったんだそうですね」
と興味本位を丸出しに聞いてみた。一週間掛けて、全ての店員に聞き回わった。
　やっぱり副店長と経理の女の人は、関係しているようだ。男の店員は誰も気づいていなかったみたいだが、女の店員さんは、薄々感じていたようだ。はっきりと言うおばさんもいた。
　「ねぇ、聞いてくれる？　あの二人は、絶対に、出来ているよ。何度も、コソコソ話しているのを見たんだよ。あれは、怪(あや)しいよ。ひょっとすると、店の金をちょろまかしているかも知れないね、二人で」
　どうも、このおばさん、副店長が好きなのかも知れない。瞳(ひとみ)の奥が、嫉妬に燃えているように見えたからだ。漫画みたいだが、怖え～と思ってしまった。
　男の店員達は、「店長の奥さん、いつも俺達の前で、経理のおばさんを怒っていたよなぁ。あんなイビられ方をして、良くこの店に残っているよ。ありゃ、パワハラだよ、パワハラ。俺だったら、訴えちゃうけどなぁ。良く、この店に残っているよ。もう若くないから、他の店では雇(やと)ってもらえないと思っているからなんだろうなぁ」、なんて言っていたな。男と女の見方は、こんなにも違うんだ、と思った。
　それ以外は、新聞やテレビで報道していたこと以上の話しは聞けなかった。店長についても、それとなく聞いてみたが、
　・店長はケチ
　・その奥さんはヤキモチ妬(や)きで口うるさい

・副店長は愚痴ばかり
・経理の人は虐められっ子
という感じだった。少なくとも、この四人以外の店員の中に、彼女のお母さんに殺意を持っているような人はいなかった。もし、その店員の中に犯人がいたとすれば、俺は、『遺書屋』を即刻、辞める。人を見る目が、まったくないのだから、あきらめて辞めるっきゃない！
いや、そんなことは、結果が出てから考えよう。
副店長と経理の女の人が、やっぱり本命だろう。二人は何を話していたんだろう？
経理の女の人は、不正を働いているようだ。きっと、子供を大学に入れるためだろう。副店長と共謀して･･･。そして、その話をしている時に、彼女のお母さんがそばにいた。二人は聞かれたと思い、殺した！
これで決まれば、売れない推理小説だが、でも、それが世の中かも知れないな。
もう一度、組み合わせを考えてみよう。
やっぱり、経理の女の人が中心だよな。それ以外の組み合わせは、
・店長と副店長が共謀！　なんのため？　それに、副店長は、小学校時代から、店長を嫌っていた。やっぱ、考えられないよな。
・奥さんと副店長。うぅ～ん、無理だな。奥さんは、若い男だったら俺でも良いって言うんだから、副店長じゃぁね。せめて、店長が死んでいるんなら別だけどな。
・奥さんと店長。こりゃありえないよな。飲みに行った時の二人の会話は完全に冷え切っていたもんな。
・三人の共謀も四人での共謀も組み合わせとしてはあるが、考えられない。
でも、彼女は免許を持っていないことは、本人に聞いて分かっているから、後の三人の誰かが主犯じゃなくて、きっと轢逃げの実行犯だ！　よな。経理の女の人と誰かが共謀して、彼女のお母さんを殺した。きっと、そうだ！
･･････････
組み合わせを整理すると･･･
・経理の女の人＋副店長・・・本命。話しを聞かれたと勘違いして殺した。やっぱり、この組み合わせが一番だよな。
・経理の女の人＋店長・・・対抗。スケベな店長は、経理の女の人にも、ちょっかいを出していた可能性はある。二人の関係は、誰も言っていないが･･･。
・経理の女の人＋店長の奥さん・・・穴馬。イビられていたんだから、関係ないと思うが、組み合わせとして残しておこう。
きっと経理の女の人が、帳簿を誤魔化して作ったお金を、その誰に口止め料として渡していたんだろう。
四人の口座を調べれば、何かが出てくると思うが、俺には調べる手段がない。どうすれば良いだろう･･･
そうか～～！
彼女に電話しなきゃ。

◇
「ねぇ、メールでは、良く分からなかったけど、犯人が分かったの？」
「い、いや、完全じゃないんだけど、絶対に、経理の女の人だよ。この店の売り上げを誤魔化していて、それを着服して、ばれるのが恐くて、それでお母さんを殺してしまった、と思うんだ。でも、運転免許証を持っていないので、共犯者がいるはずなんだ」
「誰だか分かったの？」
「分かりません。でも、貯金通帳を調べれば、きっと分かると思うんです」
「貯金通帳か。貯金通帳ね･･･。私達には、調べられないわね。
あの刑事さんに調べてもらいましょう」
「ま、まさか、あ、あの刑事？
ち、ちゃんと調べてくれるかな？
す、すっごく心配なんですけど･･･」
「貴方は、あの刑事さんが苦手なようね」
◇
「お嬢さんから電話が来たので驚いたが、何か思い出したんですか？」
「犯人が絞れました！」
「えぇぇっ、まさか、轢逃げの犯人をですか？」
「そうです」
「誰なんですか？」
「それを調べて欲しいんです！」
「今でも、調べてますが･･･」
「そうじゃなくて･･･」
「あ、あの･･･」
「また君か。何が言いたいんだ？」
「は、犯人は、経理の女の人だと思います。で、でも、彼女は車の免許がないので、き、きっと共犯者がいると思います。そ、その共犯者を見つけて、逮捕して欲しいんです」
「君は、何を馬鹿なことを言っているんだ！」
「私からもお願いします。共犯者は･･･店長の奥さんだと思います」
「君まで･･･。
･･･分かった。ワシは、何を調べれば良いんだね」
「よ、四人の、貯金通帳を･･･」
「そんなのは、最初に調べたよ。変な出し入れは、なかった！」
「そうでしょうね。すぐにばれるようなことは、しないでしょうね。
四人の身内の通帳は調べましたか？
身内までは調べていませんよね。特に、店長の奥さんの関係者の口座を、徹底的に調べていただけますか？
それに、経理の子供さん名義の通帳も」
「分かったよ。お嬢さんには敵(かな)わないな。まったく･･･。

‥‥でも、まぁ良いか。この事件の主流から外れているワシでも、それくらいなら調べられるから、何か分かったら連絡してやるよ」
「よろしくお願いします」
「お。お願いします」
「お前のために、やるんじゃない！」
「わ、分かっていますよ。そ、それくらい」
「分かってりゃ良いよ、分かってりゃ。
それじゃな」
と言って、出て行った。
‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥
「ゴメン。もう少し、時間があれば‥‥。いや、俺には、時間があっても、ここまでしか出来ない。ゴメン」
「いいえ。やだぁ、頭を上げて。コンビニを辞めてまで、調べてくれて、ありがとう」
「いや、俺にとっての『初仕事』だから。
でも、なんで、店長の奥さんを調べろ、なんて言ったんですか？
どうみても、副店長が共犯者だと思うんだけど‥‥」
「貴方が調べてくれたじゃない。その情報を分析して‥‥。女の勘よ！　女の！」
「そ、そ、そんなもんですか。勘ですか‥‥‥」
「馬鹿ねっ。女の勘で、刑事さんに動いてもらう訳ないじゃないの。それに、思い出したのよ、貴方にも話したでしょう、母が、
『前にも見たんだけど、可愛そうに、あの経理さん、店の外でも奥さんに小言を言われてたみたい。うつむいて、奥さんの話しを聞いていたわ。いやな奥さんね』って。
ひょっとして、単なる小言じゃないんじゃないかって思ったの。私も、色々考えていたのよ。そして、二人の関係が、金銭的なものだったら、と思ったの。だって、経理の女の人は、不正を働いている可能性があるのでしょう。
でも、貴方が言っているように、共犯者は副店長か、店長の可能性の方が高いと思うわ。
でも、私の推理を聞いてくれる？」
「もちろん！}
「なんらかの理由で、奥さんはお金が欲しかったと思うの。それで、経理さんを‥‥」
「凄い推理をするもんですね」
◆

「捕まえたよ。これで、お母さんも安心して天国に行けるだろう」
「ありがとうございました」
「あ、ありがとうございました。何度も、何度も店に来て、店長さんやら従業員の皆さんに聞いて廻ってくれて、ほ、本当に感謝しています」
「お前が勤めているとは思わなかったよ。
まさか、この事件のために、コンビニまで辞めていたとはな。
そこで、こいつが話すんだ、お嬢ちゃんの推理を。
驚いたよ。調べれば、調べるほど、推理通りだってね」
「刑事さんに、話しちゃったの？」
「は、はい」
「まぁ、良いか。
ところで、新聞やテレビで報道されたので大体のことは分かるのですが、もう少し詳しく話していただけますか？」
「内部事情を話すのは、違法だが、これから独り言(ひりごと)を言うので、うるさかったら耳をふさいどいてくれ。
お嬢ちゃんのにらんだ通り、あの店長の奥さんが犯人だったよ。奥さんは、自由に出来る金が欲しかったんだってよ。自分の愛人だと思っている『ホストのお兄ちゃん』のためにな。
お嬢ちゃんの想像は九十％まで当たっていたが、まさか、ホストのお兄ちゃんに金を貢(みつ)いでいたなんて、分かりっこないよな。テレビでも言ってないしな。
お嬢ちゃんが言っていたように、これみよがしに旦那の店長に嫉妬(しっと)したりして、自分の浮気を隠そうとしてたんだ」
そうか、歓迎会の時に、店長さんが、
『本当に心配してかな？　あいつは、あいつで･･･』って言っていたのは、このことだったんだ。店長さんは、知っていたんだ。
「お前は、何をブツブツ言ってるんだ。聞きたくないのか？」
「す、すみません。つ、続きをお願いします」
「経理の姉ちゃんにつらく当たっていたのも、二人の関係がバレないようにするためだった。
お嬢ちゃんがにらんだ通り、経理の姉ちゃんは、子供を大学に入れるために、少しだけ仕入れを誤魔化して、息子の通帳に貯めていたよ。
あの金額を『雀の涙』って言うんだろうな。毎月々々、少しだけ貯めていたよ。
そうだ、大切な話しを忘れていた。お母さんが、何故、殺されなければならなかったのか。
お嬢ちゃんが言っていたように、副店長と経理の姉ちゃんは、会話を聞かれてしまったと勘違いしたようだ。
二人の会話は、
『お前、金を奥さんに渡していないか？』
『なんで、私が奥さんに渡さなきゃいけないのよ！　あなただって知っているでしょう、あの

奥さんに、どれくらい嫌味を言われているか！』
　『それは知っているが･･･』
　『殺してやりたいくらいよ！
　ねぇ、店長も奥さんも殺して、そして、この店を乗っ取らない？　この店を。ここまで大きくしたのは、あなたでしょう。二人が死んじゃえば、オーナーだって、私達のことを頼りにするしか、ないんじゃないの？』
　『ば、馬鹿、そんなことは口にするな』
と言っているところに、お嬢ちゃんが来て、お母さんに声を掛けた。副店長もあわてたが、それ以上に彼女はあわてたんだろうな。お母さんに、店長さんと奥さんを殺して欲しい、って言ったことを聞かれてしまった、と思ってしまった。彼女は、すぐに店長の奥さんに電話をして、『奥さんが店のお金を着服していることを知られてしまいました』、と嘘をついたそうだ。
　･･･何、彼女と奥さんの関係が分からないって？
　奥さんは、おやじさんの金を盗んで遊んでいたらしいんだが、それがバレちまって、ホストの兄ちゃんに貢ぐ金欲しさに、経理のお姉ちゃんに『店をクビになりたくなかったら、帳簿を誤魔化して、私にお金を回しなさい』と脅したそうだ。経理の姉ちゃんは、てっきり、自分が不正していることも知っていて、脅していると思ったそうだ。
　奥さんは横断歩道で、お母さんの背中を押した、と言っていたよ。上手(うま）くいかなかったので、出勤途中のお母さんを狙ったそうだ。完全犯罪なんて、そう簡単に出来ゃしないのにな。
　お金は、オーナーのおやじさんの名義で新たに通帳を作り、そこに振り込んでいた。自分の名義じゃ、旦那の目もあるしな。しかし、『ホストのお兄ちゃん』に貢いだんで、残金ゼロだった。通帳の出入りの金額は、雀と違って『鯨の涙』くらいに多かったよ。
　調べたが、ホストのお兄ちゃんは、この事件には、なんの関係もなかった。
　･･･何、そんな、雀の涙ほどのお金しかもらっていないのに、なんでそこまでするかって？
　何か、勘違いしていないか？
　お姉ちゃん、悪りぃ、私から見ると、子持ちのお姉ちゃんなんで、さっきから姉ちゃんって言っちまったが、彼女は、お母さんの殺人には、まったく関係していなかったよ。
　彼女の罪は？
　それは、店の金を盗んでたんだから、タダじゃすまないよ。
と言いたいが、安心しな。店長は告訴しないそうだ。それに、今まで通りに働いてもらうってさ。それも、給料を上げてだってよ。店長も、女房と言う重しが取れて、ホッとしたんだろう。罪を憎んで、人を憎まず。ちょっとした、大岡裁きだ。
　･･･なに？　副店長は、どこまで知っていたかって？
　あの話しを聞かれ、彼女が殺してしまった、と思ったそうだ。自分は、びびたる不正の黙認の代償として･･･。
　ゆすりだって、れっきとした犯罪だ。
　でも、姉ちゃんは、店長から許(ゆる)されたように、副店長を許すそうだ。副店長には、『次は、ないぞ』と、釘を刺しておいたがな。

・・・はぁ、轢逃げに使った車は、どうしたかって？
　廃車置場から動きそうな車を盗んで、轢逃げした後で、そのまま返したそうだ。廃車屋もなくなったのは知ってたそうだが、翌日には戻っていたので、警察には連絡しなかったそうだ。
　・・・そんなものなのかって？
　叩けばほこりが出ちゃうんだよ。
　別の部署でも内偵していたようだ。新興国に売れそうな車を整備し直して、売り飛ばしていたそうだ。それも、海外には出してはいけない機密機材も付けてな。その車も売る予定だったが、一日、消えてしまったので心配だったんだろう。安全のために小さく圧縮しちまったんだとさ。もちろん、証拠品だから回収したよ。微量だったが、お母さんの血痕が残っていた。
　・・・えぇ、アリバイ？　独り言をしゃべっているんだぜ、あまり質問すんなよな。
　事件が発生してた時に、アリバイを聞いたさ。裏も取っているはずだ。でもな、事故として調べたんであって、殺人だと思って調べ直せば、アリバイなんて崩せるものなんだ、って初めて知ったよ。推理小説の世界の話しだとばかり思っていたが、やれば出来るんだな、なんて、初めて分かったりなんかしちゃって・・・。
　オホン、今のは、聞かなかったことにしてくれ。
　定年前に、『仕事をした』って感じかな。ありがとよ、連絡してくれて。
　それじゃな」
と言って帰って行った。
　事件、いや、俺にとっての、『遺書屋』としての初仕事が終わった。
　　◇
　「ありがとう」
　「い、いや、君が解決したようなもんじゃないですか」
　「これで母も、やっと天国に行けるわ。そして、貴方のお母さんとお話しているわね、きっと。
　でも、どんな話しをしているのかしら？」
　「そ、それは、ぼ、僕達二人が、けっ・・・・・」
　「なぁに？　聞えないじゃないの」
　「ぼ、僕達二人を、けっ、結構、心配してたりして」
　「そうかもね。
　終わったね、初仕事。
　量販店で、仕事を続けるの？」
　「い、いや、こんな気持ちで続けられないよ」
　「これから、どうするの？」
　「もちろん、『遺書屋』を続けるさ」
　「食べて行けるの？」
　「どうかな・・・。無理だよな。
　またコンビニで、もう一度、働かせてもらえるかな？」
　「私に聞かないでよ、そんなこと。

それより、なんだか、『遺書屋』が好きになっちゃったみたいなんだけど、私を雇(やと)ってくれる？」
「ま、ま、ま、待ってくれよ。お、お、俺自身が、どうなるかも知れないのに･･････」
◆
彼女と別れ、ひとりになったら、お袋からの手紙が頭をよぎった。
『ゴメンなさい。
こんな形でしか会えないなんて、貴方は怒っているでしょうよね。
何故、名乗ってくれなかったのだと、きっと怒っているでしょうね。
ゴメンなさい。
本当は、貴方に会うことが怖かったのです。
貴方は、「何故、俺を捨てたんだ」と言うでしょう。
「何故、探さなかったんだ」と言うでしょう。
私は一生懸命、貴方を探しました、と言っても、信じてくれましたか？
信じられる訳がないですよね。
そんなことを勝手に思い描いてしまい、こんな形でしか、貴方に会うことができなかったのです。
本当に、ゴメンなさい。
でも、会った時に、貴方の名前を呼んでしまうのではないかと、私には自信がありませんでした。何もかも忘れて、貴方の名前が呼べたら･･･』
お袋からの手紙は、まだ続いていた。
俺は、仕合(しあ)わせな男かも知れない。
彼女のお母さんは、彼女に、ちゃんと･･･話せなかった。
彼女は、今、どんな気持ちでいるんだろう。悲しくて、悲しくて、切なくて、切なくて･･･。その気持ちを、どこにぶつければ良いかも、分からないんじゃないんだろうか。
俺は、お袋の温(ぬく)もりを知らずに育った。
彼女は、お母さんの温もりの中で育った。
でも、俺は、彼女よりも･･･仕合わせだ、と思う。
『遺書』と言う手紙の中でしかないが･･･手の温もりの記憶しかないが･･･、彼女よりも仕合せを感じている自分がいる。
彼女の悲しみを、切なさを、優しく、俺は包んでやれるだろうか･･･
そして、彼女のお母さんから頼まれた、もう一つのことも思い出させた。
そして、今なら、ちゃんと答えられる。
「あなたのお顔は、綺麗で、優しい顔をしていましたよ･･･
安心してください･･･」と。

●三通目・・・自殺ー１

テレビのサスペンス・ドラマみたいな事件が終わった。
彼女のお母さんが俺に宛てた『遺書』で、こんな事件になるとは思ってもみなかった。
でも、良くコンビニに戻れたよな。それに、店長が、あんなに喜んでくれるとは思ってもみなかった。仕入れが下手(へた)な店長だけど、
でも、久しぶりのコンビニは、あまりにも客が少なかった。
店員は暗く覇気がなく、売れそうもない品がデンと正面にかまえ、売れ筋と思われる商品が、影に隠れていた。
これでは、客足は離れてしまうよ。
まずは、商品の並べ替えから始めなきゃいけないな。ほんの三週間ばかり離れていただけで、これだけ感じが違ってしまう。コンビニも、ちゃんと生きているんだな。
これからも、コンビニでバイトをしながら『遺書屋』を続けようと思った。

◆

あれから一週間が過ぎた。コンビニも活気を取り戻して来たようだ。お弁当のロスも減ってきた。
それにしても、彼女、どうしたんだろう？　あれから電話も掛かって来ない。
どうしたんだろう？？？
用事もないのに、俺から電話をするのも変だし。どうしよう？
でも、電話くらいなら･･･。でも、なんて電話すれば良いいんだろう？
『元気？』･･･も変だな。
『お茶でもしない？』･･･それじゃ、ナンパになってしまう。
どうしよう。どうしよう。

◆

十日目に、やっと彼女から手紙が届いた。
大喜びで、手紙を開いた。
しかし、そこには、
「もう、死にたくなりました。私が死んだら、同封した手紙を読んでください。あまり友達がいないので、私が死んだとしても誰も知らせてくれないかも知れませんが、お願いします」
と書かれていた。
俺は、あわててしまった。
こんな手紙を、彼女からもらうなんて･･･。
すぐに彼女の携帯に電話をかけた。
受話器からは、
『この電話は、電源が切られているか、電波の届かないところにあります』
との、冷たい女性の声が聞えてくるだけだった。何度も掛け直したが、受話器から聞える声は同じだった。
彼女の会社に電話をすると、

「先日、会社を辞めました」
との、これまた冷たい返事だった。理由を聞いても、『一身上の都合により』と、ありきたりな返事しか聞けなかった。
彼女の家に、すっ飛んで行った。
その家の外に、
『売家』
と書かれた立て札があり、主(ぬし)をなくした家は、寂(さみ)しそうに建っていた。
連絡先の不動産屋さんの電話番号が書かれていたので、急いで電話を掛けてみた。
「あの～っ、売り家の娘さんと連絡を取りたいのですが･･･」
「あぁ、あの売り家ね。お嬢さんからは、連絡先を教えない約束になっているんですよ。その分のお金も受け取っているので、申し訳ありませんが教えられないのですよ。私も商売ですから･･･」
「か、彼女は自殺するかも知れないんですよ！」
「そんな風には見えなかったですよ。
どちらにしても、教えられないんだよね。教えてしまったら、プラ、プラ･･･」
「プライバシー？」
「そう、そう、そのプラ、プラ･･･、の侵害になって、捕まってしまうので」
と言われ、電話を切られてしまった。
彼女は、どこに行ってしまったんだ～～っ！　俺を、こんな気持ちにさせて！
どこを、どう歩いたのか覚えていないが、家にたどり着いていた。
机の上には、彼女から来た手紙が、置かれたままになっていた。
･････････
『開けちゃいなさいよ』
と言う声が聞えた。甘い囁(ささや)きだった。
そうだ、今ここで、この手紙を読めば、彼女を死なさずに済むかも知れない。生きていても、『読んだ？』と言われたら、『読まなかった！』と言えば良いじゃないか。封に手を掛け、開けようとした･･･、
『それが、貴方の仕事なのですか？』
と彼女の声が聞えた。後ろを振り向いたが、誰もいない。
そうだ、俺は自分で誓ったんだ！
どんなことがあっても、開けてはいけない！
生きている間は、開けてはいけないんだ！
それが、俺の仕事、『遺書屋』なんだ～っ！
でも、俺は、どうすれば良いんだ！　この封筒を開ければ、彼女が死ぬ前に止められるかも知れない！　でも、彼女と話した時に、『それが、貴方の仕事ですね』、と言われた。どんなことがあっても、開けられない。自分が、これから生きるためにも。彼女のためにも。でも、彼女が自殺してしまったら･･･。

冷静になって、どうすれば良いのか、悪い頭で考えてみた。
彼女の今の居場所を知る方法を。
・・・・・・・・・・
①携帯電話は繋(つな)がらない
②家は「売家」になっている
③会社は辞めていた
④親(した)しい友人はいないようだ
⑤近(ちか)しい親戚もいない
ここから、どうやって彼女を捜し出せれば良いんだ！
彼女のお母さんは、亡くしてしまった。
彼女は、「自分がもっと強く言って、あの店を辞めさせていれば、死なずに済んだのに･･･。私が、あの店に行かなければ･･･」と悔やんでいた。
あんなにも苦しんでいたのに。俺は、手を差し伸べてやることも出来なかった。今、俺に出来ることは･･･。
知る方法を、もう一度、考えて、行動してみよう！
・・・・・・・・・・
①携帯電話が繋がらない　・・・携帯屋さんに確認してみよう。
「すみません。何度、電話しても掛からないのですが、彼女が最後に、どこに電話したか教えていただけますか？」
「申し訳ありませんが、個人情報を教える訳にはいかないのです」
「彼女が自殺してしまうかも知れないのですよ！」
「申し訳ありません。どんなご事情があるか知りませんが、教えられない規則になっているのです」
「分かりました。ありがとうございました」
ひょっとすると、充電されていないのかも知れない。
きっと、携帯電話は持っているだろう。この項目は、「×」ではなく「△」にしておこう。
②家は「売家」になっている　・・・もう一度、不動産屋さんに電話をしよう。
「すみませんが、あの売り家を購入したいのですが、どうすれば良いでしょうか？」
「私のところに来ていただけますか？　手続きをしますから」
「売り主と話しがしたいのですが？」
「すべて、私のところで処理するように言われているので、残念ながら、それは出来ないのですよ」
「ところで、買いたいと私が言ったら、そのことを売り主に知らせるのですよね」
「当たり前じゃないですか。そのために私が仲介してるんですから」
「そうですよね。ところで、その家の中までは見ていないのですが、綺麗ですよね？」
「前に住んでいた人達は、お母さんと娘さんの二人暮らしだったので綺麗ですよ。ご安心ください。築年数は、ちょっと経っていますが、私もビックリしたくらいに、綺麗ですよ」
「なんで、家を売る気になったのでしょうか？」

「お母さんを事故で亡くしてしまい、娘さんが、お母さんの思い出にひたり過ぎてしまう、と言って、泣く泣く売ることにしたそうです」
「そうすると家が売れるまで、その娘さんは、どうやって生活するんでしょうかね？」
「そこまでは、分かりませんよ、私には」
「それは、そうですよね。分かりました。もう一度、妻と相談しますので、買うことが決まりましたら電話します」
「お待ちしております」
独身なのに、また嘘をついてしまったが、それくらいは許してもらえるだろう。
今は、きっと、生きている。
自分が生まれ育った家が売れて、次に住む人が決まるまでは、自殺するとは思えない。でも、今、どうしているか分からいだけだ。
これ以上、調べられないから、「×」だな。
③会社は辞めた　・・・直接、会社に行って聞いてみよう
二駅離れた、駅のそばの大きなビルだった。
ジーパンで来てしまったが、追い出されないだろうか？
警備員が目をそらせた隙(すき)に、ビルに飛び込んで、受付嬢に、
「すみませんが、親戚の者なのですが、彼女に取り次いでもらえますか？」
と声を掛けた。
とっさに、また、嘘を吐いてしまった。俺って、こんなに嘘つきだったとは思わなかった。
「申し訳ありませんが、彼女は退職しました」
「えぇ、退職したんですか？　連絡がなかったので知りませんでした。でも、なんで急に辞めたか聞いていませんか？」
「一身上の都合と聞いていますが･･･」
「困ったな。困った、困った。どうしよう？」
「どうしたんですか？　何をお困りですか？」
「プライベートなことなもので･･･、彼女の親しい人しか知らないと思うのですが･･･。誰か、彼女の友達を知っていますか？」
「･･･多分、この会社では私が一番、彼女と話していたかも知れません。でも、彼女、私にも話さずに辞めてしまったのです。携帯に電話しても繋がらなくて･･･。彼女、お母さんが亡くなってから、私ともあまり話さなくなってしまったのです。心配で、心配で･･･」
「そうですか。ありがとうございます。申し訳ありませんが、彼女から連絡があったら、この電話番号に知らせていただけますか。お願いします」
･･･これも「×」か。
④親しい友人はいない・・・受付嬢が一番に親しかったみたいだな。これも、「×」だな。
⑤近しい親戚もいない・・・葬儀でも、彼女が言っていたものな。これも「×」。
彼女の居場所を調べる手掛かりが見つからない。
不動産屋さんは、彼女の居場所を知っている。と、言うことは、まだ、生きている。
俺には、これ以上、どうすることも出来ない。どうすれば良いんだ･･･。

そうだ、あの刑事さんに電話してみ･･･
『電話ですよ～っ！　無視しますか～っ！　それともダーしますか～っ！』
けたたましい着信音が鳴り響いた。

●三通目・・・自殺－２

　彼女からの電話だと思い、あわてて携帯を握り締めたが、耳に聞こえて来た声は、
　「やぁ、あの時は世話になったな」
あの刑事さんだった。
　「ど、どうしたんですか、急に電話なんかくれちゃって･･･」
　「いやぁ、どうも。
　お前には、電話したくなかったんだけどな。
　ところで、あの時の嬢ちゃんは、行方不明じゃないんかね？」
　「ど、どうして知っているんですか？」
　「それがな、ひょんなことから、居場所が分かったんだよ。
　ウィークリーマンションの大家さん、管理人もしているんだけど、その人から、自殺でもしかねない娘さんが泊まっているんだが、自殺されたら大変なので電話した、と言って来たんだよ」
　「え、えぇ、じ、自殺って、か、彼女がですか？」
　「あぁ」
　「よ、良かった。み、見つかったんですね。
　か、か、彼女に会いたいのですが･･･」
　「会って、どうするんだ。
　お母さんが亡くなったのは自分のせいだ、と思い込んでいる嬢ちゃんに、なんて言ってやるんだね？」
　「わ、分かりません。でも、自殺しようとしてるんでしょう？」
　「あれは、大家の心配し過ぎだ。嬢ちゃんと話した訳じゃないが、遠くから彼女を見る限り、自殺はしないよ。私の勘だけどね。
　今は、そっと見守ってやるのが良いんじゃないのか」
　「じょ、冗談じゃありません。か、彼女から、『遺書』が送られて来たんです」
　「そりゃぁ、お前は『遺書屋』なんだから、『遺書』が届いて当たり前だろう」
　「そ、それは、そうですが･･･
　そ、そんなことより、そのマンションを教えてください！」
　「お前に教えてやろうと思って電話したんだから、教えてやるよ。お前の家から、十分と離れていないマンションだよ。こんなことを話すのは、職務違反だが、これで、この前の借りは返したからな」
　「借りだとか、貸しだとか、思ったこともありません。た、ただ、彼女が心配なだけです！」
　「そう、むきになるな。でも、その気持ちを大切にな。
それじゃな」
と言って、電話が切れてしまった。
　彼女の居場所が分かった。
　今までだったら、どうしようか考えて、時間ばかりが過ぎていただろう。ちょっとだけ変われた俺は、その足で、マンションに行くことにした。

まさか、十分と離れていない、あのマンションに住んでいるとは･･･。
でも、何故こんな近くに？？？
･････････
ウィークリーマンションなので、部屋は狭そうだが、部屋数だけは一杯ありそうだ。刑事さんは、３０４号室と言っていたが、どの部屋だろう？
彼女に直接会って、話しを聞こうと思って来たが、刑事さんも、自殺する雰囲気じゃないと言ってたから、まずは様子(ようす)を見てみよう。
マンションのはす向かいに、洒落(しゃれ)た喫茶店があり、入ってみたら、客は誰もいなかった。
窓際の席に座って、コーヒーを頼んだ。
マンションは、ななめ向かいで、街路樹が邪魔して、ちょっと見づらい。
二十分たったら、何か軽食でも頼もう。彼女のことが心配で食べる気もしないが、店の人が気になるからな。
そして、一時間たったら、もう一度、考えよう。
まずは一時間、この場所で、じっとマンションを見ていよう。でも、ジロジロと外を見ている訳にはいかないな。
人を待っている振りをして、時々、時計を見ながらマンションを見ていれば良いか。でも、目を離したすきに彼女が出入りしたらどうしよう。
･･･そうか、あの壁に掛かっている絵を利用しよう。
まずは、反対側に座って･･･
額(がく)にはまったガラスを鏡に見立てて･･･
もう少し、俺が右側に移動すれば、マンションが･･･
･･･見えた、見えた。人待ち顔で、あの絵を見ていれば、一時間は過ごせそうだ。
･････････
ここへ来る前に近所の八百屋のおじさんに、
「あのマンションに引っ越そうと思うんだけど、評判はどう？」
って聞いてみた。
八百屋のおじさんは、
「一年前に、あのマンションで若い女の人が自殺したんだよ。当時は、ストーカーに殺されたんじゃないかとか、強姦魔に襲われて、それを苦にして自殺したんだとか、勝手な憶測が飛びかっていたよ。それがこの頃じゃ、そんな話しもされなくなったよ。『人の噂も七十五日』とは良く言ったものだ。一時は、男の人が一人か二人しか住んでいなかったようだったが、今じゃ、また、人が住み始めているよ。
そう言えば、自殺があった頃、大家さんがコーヒーを飲みに来て、警察から何度も、『本当に気がつかなかったのか！　自殺するような人は、なんらかの信号を送っているもんだ！』と責め立てられた、と言って相当に落ち込んでいたよ」
と教えてくれた。

「それで、自殺した原因は、分かったんですか？」
と聞いたら、
「そうそう、結局、警察でも分からなかったようで、一時は殺人事件じゃないかって噂もありましたよ」
とも言ってたな。
彼女は、そんな話しを耳にしなかったんただろうか？
それとも、そんなことがあったので、少しは安く借りられたのかな？
でも、自殺した女の人は、なんで死んじゃったんだろう？
警察が調べても、原因が分からなかったみたいだし。でも、ストレスの感じ方なんて人によって違うから、本当の原因なんて、誰にも分からないのかも知れないな。
大家さんは、前に自殺されたんで、今度は早めに警察に連絡したんだろうか？　その気持ちは分かるな。また自殺でもされたら、警察からしぼられて、入居者が本当にいなくなってしまうからな。
でも、俺には、自殺しそうな顔なんて分かるんだろうか？
相当に落ち込んで、目の下に隈(くま)が出来て、やせ細って･･･
彼女は今、そんな感じなんだろうか？
でも、あの刑事さんは、自殺する感じはしなかった、と言っていたよな。それにまだ、家は売れていないから死ぬ訳ないよな。
それにしても、なんで彼女は、俺の家から十分と離れていない、こんなところに住んでいるんだろう？　俺への当てつけかな？　俺が、もっと早く『遺書』を読んでいれば、お母さんが死なずにすんだかも知れないって思って･･･。
そんなことを考えながら、フッと、鏡に使っていた額縁から、窓の外に目を向けた･･･
な、なんと目の前を彼女が通り過ぎるところだった。
目の前を通り過ぎ、信号待ちをし、道路を渡ってマンションに入って行った。
刑事さんが言った通り、その横顔からは、自殺する雰囲気は、まったくと言って良いほど感じられなかった。最後に別れた時よりも、今の方がしっかりした足取りをしていた。
どうして彼女が自殺するように見えたんだろうか？
俺が、前の彼女を知っていたからだろうか？
　　･････････
三階の部屋の窓が開き、彼女の姿が見えた。
えぇっ、黄色いハンカチを干(ほ)し始めた？？？
なんなのだろう？？？
こんな時間に、黄色いハンカチを一枚だけ干すなんて･･･？？？
やっぱり、おかしくなっちゃったんだろうか？？？
あれっ、なんだか、一瞬、手を振ったような･･･？？？
そんなことはないよな。彼女は、俺がここにいることを知らないはずだ。俺の勝手な思い込みだ。思い込みで物事を判断してはいけない、けども･･･？？？
彼女の元気そうな顔を見て安心した。安心したら、なんだか腹がへってきた。

「すみませ～ん。カツカレーの大盛りをお願いできますか～っ？」
「了～解～っ！　カツカレーの大～盛り一丁～っ！」
な、なんだ、この喫茶店は？
彼女のベランダの窓も閉まっちゃったし、カツカレーにしちゃったから時間もかかるし･･･。単なるカレーだけの方が早かったな。
でも、あのマンションに住んでいた女の子は、なんで自殺してしまったんだろう？　警察が調べて分からないことが、俺に分かるはずないか。
でも、あの大家さん、なんで彼女が自殺するように見えたんだろう？　刑事さんも自殺なんてしないよ、って言っていたものな。
そう言えば、八百屋さんが『一時は、一人か二人しか住んでいなかった』って言っていたけど、生活は大丈夫だったのかな？
･････････
もし、亡くなった女の人が噂通り、自殺でなかったら･･･。
もし、大家さんが、お金に困っていない人だったら･･･。
でも、なんで彼女が自殺するように見えたんだろう？
･････････
えぇ、もしかして･･･、噂通りに女の子は殺された？
誰に？
･････････
「すみませ～ん。用事を思い出しました～っ。お金は、ここに置いておきま～す」
「了～解～っ！　カツカレーの大～盛り一丁～っ、私が食べま～す！」
やっぱり、おかしな店だ。
店を出て、ウィークリーマンションに向かった。
･････････
「すみません。空き部屋は、ありますか？」
「えぇ、ありますよ。いつから入居しますか？」
「そうですね。今、親と一緒に住んでいるので、親を説得できたら、すぐにでも住みたいんですが」
「まだ、空き部屋がありますので、あわてなくても平気ですよ」
「そうですか。住んでいる人は、男の人ばかりなんでしょうね」
「いえいえ、駅から遠くないし、大通りを通って帰って来られるので安全なので、女性の方も住んでいますよ」
「そうですね。駅からも近いし、安心ですよね」
「えぇ、安心できるマンションですよ。お安いし」
「でも、なんでそんなに安いんですか？　それが不思議で、ちょっと心配なんですよ」
「親の遺産がね･･･。それで、自分がもうける必要がないもので、安く出来るんですよ。分かって頂けましたか？」
「今時、そんな心掛けの人、見たことも、聞いたこともないですよ。親が許してくれたら、お

願いしますね」
　「お待ちしております」
　　‥‥‥‥‥‥
　やっぱり、金には困っていなかった。
　彼女は、自殺を考えていない。考えていないのにもかかわらず、警察に『自殺』をしようとしている、と電話をした。
　‥‥失敗した！　やっぱり、カツカレーの大盛りを食っておけば良かった！　腹がすき過ぎて、頭まで血が廻らな〜い！
　　◇

●三通目・・・自殺－３

「あんたから電話を受けた時には、また馬鹿な考えを･･･、いや推理をするものだと思ったが、定年まで、やることがないので調べてみたよ。そしたら･･･
ビンゴ～ッ！
お前達といると、ワシは警官なんだ！　って思えてくるから不思議だよ。
お前さんの考えていた通り、大家、そう管理人が女の人を殺していたよ」
「や、やっぱり、か、管理人でしたか」
「殺された女の人が仕事に行っている間に、何度も部屋に忍び込んでいたそうだ。
彼女は、生理痛がひどくて会社を早退して帰って来たら、管理人が部屋の中にいた。
そして、一千万円くれなければ訴える、と脅したそうだ。
生理痛のいらだちもあったんだろうな。ワシには分からんが。
もみ合いになり、突き飛ばしたら、開いていたガラス戸を越えてベランダから落ちてしまった、と言うことだ。
関係ないが、管理人は身寄りが居ないらしいから、あのウィークリーマンションは、どうなるんだろうな」
「じ、事件があった時、管理人のアリバイは調べなかったんですか？」
「調べたさ。ただ、管理人は一人で一階に住んでいて、マンションを管理しているんだから、アリバイは問題視されないよ。指紋だって、管理人のがベタベタとあっても不思議じゃないからな」
「それじゃ、なんで、警察に『自殺しそうな女の人が住んでいる』なんて知らせたんですか？」
「驚くなよ。
管理人は、嬢ちゃんの部屋に忍び込もうと思っていたんだそうだ。それで、事前に警察へ連絡した。そうすれば、また自殺してしまったとしても、言い訳できる、と思ったそうだ。前回は相当に警察からしぼられたらしいからなぁ。
だが、それじゃぁ辻褄(つじつま)が合わないんだよな。
これから調べるんだが、ワシの勘じゃ、あれは完全な殺しだね。事故を装(よそお)った殺人だ。管理人は、賭け事も、酒もタバコやらない、無趣味な男だ。金だけはあるようだがな。
自供しているように、女がいない間に忍び込む癖(くせ)は、そう簡単にゃ直りゃしない。忍び込んだのは、その女性だけじゃないだろう。
駅から近くて安い。その割には、女性が長く住んでいなかったようだ。その癖が影響しているんじゃないかってな。
そして、殺人の味も覚えてしまった、とワシはにらんでいる。
そんな時に、獲物(えもの)になる女が入居して来た。
だから、疑われるのを恐れて、先手を打って警察へ･･･。
物証がないから、ちと大変だが、この線で調べるつもりだ。
おっと、今の独り言(ひとりごと)は、忘れてくれ。

ところで、彼女と会って話したのか？
えぇっ、馬鹿か、あんたは？
あれだけお膳立てをしてやったのに、話しをしていないって？
お前は、本当に、日本人なのか！？
地球人なのか！？
そうです、あんたは宇宙人なのです！　って言ってる場合じゃないだろうが～～っ！
今すぐに、彼女のマンションへ飛んで行け～っ！！！」
◇
ピンポーン･･･
「遅かったですね」
「す、すみません」
「黄色いハンカチ、見てくれましたか？」
「み、見ましたけど、なんなんですか、あれ？」
「そうね、分からないでしょうね。古い映画だから。
じゃあ、ベランダから手を振ったのは？」
「えぇ、ぇ、ぇ、ぇ･･･、あ、あれは本当に、手を振ってくれたんですか？　僕に？」
「何に見えました？」
「手を振っているように･･･」
「良かった」
と言って、ニッコリと微笑(ほほえ)んだ。
「ところで、何故、僕に『遺書』なんか、くれたんですか？」
「ごめんなさい。本当に、ごめんなさい。貴方を試(ため)したのです。貴方の仕事に対する心を･･･」
「そうだったんですか。
それで俺は･････？」
「八十点」
「は、八十点？」
「それは、あまりにも、貴方の行動が遅いので四十点。
仕方がないので、刑事さんに私のことを話したの。
その後の貴方は百点。
たして、二で割って、七十点」
「あれ、八十点じゃ･･･？」
「貴方が『遺書』を読まなかったから、百点を加えて三で割ると、八十点」
「な、何故俺が、『遺書』を読まなかったのを知っているんですか？
読んだら、どうなっていなんですか？」
「それは、『遺書』を読んだら分かるわ」
「わ、分かりました。

出だしが遅くて済みませんでした。どう、貴女に話して良いか分からなかったもので･･･。
でも、これからは、すぐに行動するように頑張るよ。
そうじゃないと、『遺書屋』を続けられませんね」
「そこで、お願いがあります」
「なんですか？
俺に出来ることですか？」
「ねぇ、私も、『遺書屋』を手伝わせて！　お願い！」
「え、えぇ、『遺書屋』をですか？
で、でも、これで生活は出来ませんよ。
わ、分かっているんですか？」
「私も仕事をするから大丈夫よ。
だから、お願い」
「ほ、本当に、貴女と一緒に？」
「えぇそうよ」
「よ、喜んで。
ところで、これからも、ウィークリーマンションに住むの？」
「あれは、貴方の近くに住んで、見つけて欲しかったからです。
そうだ、何故、貴方が来ることが分かったと思う？」
俺は、首を傾(かし)げた。
「会社の受付していた彼女、覚えている？」
俺は、頷(うなづ)いた。
「貴方が、会社を出たとたんに、彼女から電話が来たの。
『やっと来ました。ちょっと遅かったですね』、と。
ところで、一緒に住むところを探さない？
家賃が半分になるから、結構、良いところに住めるわよ」
「じょ、冗談でしょう。
ま、まだ、け、結婚もしていないのに･･･」
「何を勘違いしているの？
寝るところは、別々に決まっているじゃないの！
お互いに干渉しないで、住むだけじゃない。
そして一緒に『遺書屋』をやりましょう。
ねぇ、そうしましょう。善は急げだわ。これから、探しに行きましょう。ねぇ、早く～っ」
「ま、待ってください～～～っ」

◆

今まで住んでいたところから、そんなに離れていないマンションを借りることが出来た。逆に、コンビニまで近くなった。
新しくはないが、百円ショップと彼女の魔法のようなアイデアで、見違えるような部屋に変わった。

変わり映(ば)えのしない、今にも蛆虫(うじむし)がわきそうだった今まで住んでいた部屋は、青春映画の優等生が住むような部屋に変わった。当分は、熟睡出来ないかも知れないな。
そして、彼女のために『白熊ちゃん』を買った。
この家を借りることが決まり、引越しをする前に、彼女の部屋に置いといた。
あんなに喜んでくれるとは･･･。
彼女の目に、涙が浮かんでいた。
･････････
彼女の部屋には、飾りつけが出来た時に、一度だけ入れてもらった。
そこは、前に住んでいた部屋と、そっくり同じようだった。
心休まる部屋だった。
白熊ちゃんは、ベットで寝ていた。
ただ、なじめない物が一つだけあった。
高校野球で使うバットが、立て掛けてあることだ。それも、使い古された、野球が出来そうもないようなバットが。
そのバットは、彼女の手の届く範囲に何本も立て掛けてあった。
彼女は、すました顔で、
「ゴキブリ退治をするのよ。頭の黒いゴキブリをね」
と言った。
それって、やっぱり俺だよな。

●四通目・・・思い出の品ー１

　あれから一週間が過ぎた。
　不思議な同居(どうきょ)生活が始まっていた。残念ながら、同棲(どうせい)生活じゃない。
　悲しい、一字の違い。
　『遺書』は、あれから一通も届いていない。
　刑事さんが、俺達の住むマンションに一度だけ来てくれた。
　「お前達には、もったいないんじゃないか？」
と、開口一番、言われてしまった。
　「引っ越したと言う連絡をもらったんで、のぞきに来たよ。結構、広くて綺麗じゃないか」
　それはそうだろう。彼女好みのリビングになっている、と言ってもテーブルと椅子が置かれた普通の台所兼居間だ。
　でも、彼女の発想はユニークだ。
　子供がいれば喜ぶだろう。
　リビングには、造花だが、緑に満ちあふれている。でも、その中に、本物の花や観葉樹が、さりげなく置かれており、そして、そのまわりには、七人の小人が遊んでいる。
　これって、やっぱり少女趣味？
　そうかも知れない。
　テーブルクロスは、彼女の手作りだ。
　四つのテーブルクロスには、一つが熊、そして犬、猫、ウサギ。
　彼女は親熊に甘える小熊の前。僕は骨をくわえて尻尾を振る子犬の前。刑事さんは月を遠くにながめて帰りたそうなウサギの前に座った。猫は、コタツの横で丸くなって静かに寝ていた。
　座っただけで、童心に返ってしまうほどの出来ばえだ。
　「ワシの干支(えと)は、ウサギなんだ。だから次からも、この可愛いウサギの前に座らせてくれ」
　フッと我(われ)に返り、
　「え、えっ、えぇ、良いんじゃないですか」
　「刑事さんのために作ったのよ」
と彼女は答えた。
　「でも、こんな奴と一緒で大丈夫なのか？」
　「安心してください。私の部屋には、野球のバットが置いてあるので、心配しないでくださいね」
　「バットを？
　でも、それを使うような事件を起こさんでくれよな。
　ところで、『遺書屋』の仕事は、どうなんだ？」
　「あ、あれから、一通も来ないんですよ。でも、アルバイトで生活は出来ているから、安心してください」
　「そうか。『遺書』届いていないのか。そうだろうな。

おぉそうだ、忘れるとこだった。お前達には借りがまだあるから、何かあったら電話しろよ。
それに、これ。
じゃぁな」
と言って帰ってしまった。
刑事さんが座っていた椅子の上には、袋が置かれていた。
袋を開けてみると、子犬の縫いぐるみが出て来た。
あの刑事さんは、俺の好(この)みを知っていたんだろうか、と思ってしまった。
彼女は、
「あら、刑事さんも、粋(いき)なプレゼントを持って来てくれたのね。でも私は、子犬より熊ちゃんの方が好き」
と言った。そして、
「そうだ、そう言えば、まだ私の『遺書』を読んでいないわよね？」
「あ、当たり前じゃないですか。貴女は生きているじゃないですか」
「読んでも良いのよ。たいしたこと書いてないから」
「いえ、『遺書屋』を続ける以上、読みません！」
「それじゃ、当分、読まれることはないわね。
ちょっぴり、残念ね」
「そんなことを言うと、読みたくなっちゃうじゃないですか」
「読んでみれば。面白いわよ」
「ゆ、誘惑しないでください！」
‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥
なんだか俺も『遺書』を書いてみたくなった。
でも、残すような『遺書』なんて･･･何も思いつかないな。
コンビニで働いて、
『遺書屋』をやって、
お袋に会えて、
彼女と一緒に住んで、
今は、幸せそのものだ。
そんな人間は、『遺書』なんて考えないよな。
でも、もし、今、死んじゃったら･･･
･･･彼女への思いが伝わらないじゃないか。
そうか、そのことを『遺書』に書けば良いんじゃないか。
誰だって一つくらいは、『遺書』に書き残して置きたいことってあるんだよな。
ただ、仕合せ過ぎたり、悲し過ぎて、苦し過ぎて、そんなことも考えられなくなっちゃうんだよな。
‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥
「何を考えてるの？」

「い、いや、なんでもない」
「嘘でしょう？
貴方は、私の前では嘘をつけない人なのよ」
「そ、そんな･･･。
実は、自分の『遺書』を書いてみようかな、なんて思ったりして･･･」
「そう、それは良いことだと思うわ。今の世の中、いつ死んでもおかしくないものね。
私も書いてみて分かったわ。
それに、貴方は『遺書屋』なんでしょう。自分で、『遺書』を書いてみなきゃ。
ねぇ、ねぇ、なんて書くの？
早く書いてよ。
そして、そして、教えて」
「だ、駄目ですよ。い、生きているうちに読まれたら、『遺書』じゃなくなってしまうじゃないですか」
「そうね、でも書いたら読んでみたいな･･･
『遺書』を書いた後に、貴方が死ねば･･･」
「な、何を言い出すんですか！」
「冗談よ、冗談に決まっているじゃない」
「で、でも、目は笑っていないんだけど･･･」
　　･････････
まさか、君が好きだなんて、言えないじゃないか。
あぁ、驚いた。
『遺書』には、彼女のことを書くとして、他に書いて置きたいことはないかな？
やり残していることは？
俺、孤児院育ちだから、特に･･･。
そうだ。孤児院にいる時に、タイムカプセルを桜の木の下に埋めて置いたんだ！
あのカプセルは、どうなってしまったんだろう？
もう、二十年も昔のことだから、残っていないかも知れないな。俺が死んだら、そのカプセルを探してもらおう･･･。
･･･俺は、何を考えているんだ。そんなの、今すぐにでも自分で出来ることじゃないか。
そうだ、今日はコンビニのバイトが休みだから、これから孤児院に行ってみよう。ここ何年も行っていないし、どうなっているんだろう？
　　･････････
「ちょっと出かけて来るよ」
「どこへ？」
「ち、ちょっと」
「分かったわ、行ってらっしゃい。夕飯は？」
「それまでには帰って来ます」
「じゃあ、夕飯、作っておくわね。

貴方の好きな、豚の角煮を作っておくわ」
「ありがとう。帰って来るのが楽しみだな。
それじゃぁ、ちょっと、出掛けて来るね」
◇
家から一時間半。そんな遠くもないのに、来る気がしなかった。
孤児院で育ったことなど、忘れてしまいたかったのかも知れない。
駅から孤児院へ行くまでの道のりは、大きく変わっていた。
ここら辺に、駄菓子屋があったような気がするが、今ではマンションに変わっていた。
この路地は、もっと狭かったような気がする。
古い家が取り壊されてしまったからだろうか？
いや、俺が大きくなったからかも知れないな。
久しぶりだな、孤児院。
・・・・・・・・・・
入り口の門は同じだったので、なんだかホッとした。
院内に、足を踏み入れた。
そうだ、あのシーソーだ！
俺は、あのシーソーから落っこちたんだ。
デブが急に向かい側に乗っかって来て、飛んじゃったんだよなぁ。
青い空と白い雲。
背面飛びのスーパーマンになれたと思ったとたん、背中から地面に落っこちた。
痛かったなぁ。
いや、落ちた時には、ビックリしただけだった。
そして、俺は、泣き出した。
実際に、その時は痛みなんて感じてなかったのに。
痛み出したのは、泣きやんだ後だった。
あの時の情景が今になって、鮮明に蘇(よみがえ)ってきた。
不思議だな。
こんな気持ちで、孤児院を見るのは初めてだ。
きっと、『遺書』を書こうと思って見ているからかも知れないな。
同じ物でも、自分の気持ち次第で、こんなにも違って見える。
不思議だな。
空を見上げたら、あの時と同じように、青い空と白い雲が浮かんでいた。
空から、ゆっくりと目線をさげると･･･銅像が目に入った。
あっ、あの銅像に落書きして、こっぴどく怒られた。
なかなか消えなくて、泣く泣く消したっけ。
懐(なつ)かしいなぁ。
あった！　あった！
あの桜だ！

あの木の下に埋めたんだ！
あれ、工事の人がいるぞ。何やっているんだろう？
「すみません。何やっているんですか？」
「あぁ、来週の水曜日に、この木を切るので、下見に来ているんだよ」
「えぇ、切っちゃうんですか？」
「見た目は元気そうな桜だが、可愛そうに、木の中は虫に食われちゃっているんだ。
このままにしておくと、台風や強い風が吹いたら、倒れてしまうかも知れないんだよ。そんなことになったら、子供達がケガするかも知れないからね」
「そうなんですか、切っちゃうんですか」
「あんた、ここの出？」
「そうなんですよ。良く、この桜の木に登って･･･」
「そりゃ、悲しいだろうな。勘弁してくださいよ」
「いぇ、いぇ、貴方が悪い訳じゃないんですから」
そうか、切っちゃうのか。
そうだ。来週の水曜日は休みを取って、見に来よう。そして、カプセルを探してもらおう。俺の思い出のカプセルを･･･。
◇

●四通目・・・思い出の品ー２

「ただいま」
「どうしたの、元気ないじゃないの。家を出る時は、ルンルン気分だったのに。デートで振られたの？」
「い、いや実は･･･」
と言って、カプセルを桜の木の下に埋めたこと。その桜の木が切られてしまうことを話した。
「そうだったの･･･、悲しくなっちゃうね。
そうだ、私も来週の水曜日にお休みを取って、貴方と一緒に見に行くわ。貴方が何を埋めたのかも知りたいし。
でも、何を埋めたか忘れちゃうなんて･･･
でも、その方が楽しみかも知れないわね」
◆
コンビニの店長に事情を話して、休みをもらった。
その時、店長が、
「面白そうだな。うちの店でも、イベントとしてやってみるか。五十年後に掘り出す、と言うのはどうかな？
でも、それまで、店があるかな？」
と、一人で盛り上がって、一人で考えこんでしまった。
そんな話しをしながら、彼女と一緒に孤児院へ向かった。
◇
俺が孤児院にいた時に働いていた人は、もう誰もいなかった。
桜の木の下にカプセルがあることを、孤児院の職員に話したら、一緒に話しを聴いていた工事の人も協力して、取り出してくれることになった。
そして、電動のこぎりで、桜の木は切られた。
涙が頬(ほほ)を伝わって落ちた。
彼女が、そっと黄色いハンカチを渡してくれた。
木の根を取り除く時に、カプセルがないか探しながら掘ってくれた。
でも、･･･見つからなかった。
工事の人は、五メートルも広げて、桜の根の周りを掘ってくれたけれども、見つからなかった。
孤児院の職員も、工事の人も怪訝(けげん)な顔をして俺を見た。
結局、カプセルは見つからなかった。
何故？
何故、見つからないのだろう？
俺は、頭を抱えて座り込んでしまった。
◇
「しっかりしなさいよ！」

彼女に引きずられるようにして、家に帰って来た。
「お、俺のカプセルは、夢だったんだろうか？
テレビの見過ぎで、俺もカプセルを埋めたと思い込んでしまったんだろうか？」
「まずは、これを飲んで、落ち着いて」
ゴクン･････
「ウ、ウゥ。ウェ。な、なんだ、こ、これは？」
「分からなかった。ヴィネガー、お酢よ」
「な、なんで、こ、こんな物を、の、飲ますんだ～っ」
ゴホ、ゴホ
「お酒を飲ませてあげようと思ったんだけど、料理でみんたつかってしまったの。お酢は、アルコールを酢酸発酵(さくさんはっこう)させたものだから。それに、身体にも良いし」
「さ、酒と、ち、違い過ぎます！」
「でも、落ち着いたようね」
「す、少し」
「貴方は、記憶違いなんてしていないわ。きっと、誰かが先に掘り起こしてしまったのよ」
「でも、あんなガラクタ、誰が掘り起こして持って行ったって言うんですか？」
「貴方の物はガラクタだったかも知れないけど、他の人の中には高価な物が入っていたりして」
「でも、子供達の持ち物ですよ。高価な物なんて、持っていないと思うんだが･･･」
「そうかも知れないけど、お金はあっても子供を育てられない人だっていると思うのよ。貴方だったら、どうする？」
「俺は独身だし、金もない」
「馬鹿！
もし自分が、そんな境遇だったらって想像するんじゃない！」
「そ、そうか。
俺は金持ちで、子供を育てられない境遇だったら？
で、でも、俺は子供を捨てません！」
「もう、話しにならないわね。
いいわ。例えば、
貴方は金持ちで、私と会う前に結婚していて、子供いた。
奥さんは亡くなっていて、私は、子供を捨てたら貴方と結婚すると言った。
さぁ、貴方は、どうする？」
「え、えぇ、ざ、残酷な･･･
良く、そんなひどいことを考えられますね！」
「も～うっ、例えばよ、た・と・え・ば」
「わ、分かりましたよ。俺は金持ち。君を取るか、子供を取るか？
･･･俺一人では育てられないし、子供がいたら、君と結婚できない。

金だけはある･･･。
孤児院。自分では、育てられない。だから、孤児院へ。子供がちゃんと生活出来るように、お金･･･、いや、お金では使われてしまうので、お金に変わるもの･･･
ダイヤモンドみたいな貴金属！
小さくて、価値があるもの！
それを、子供と一緒に･･･。
そ、そうか！　ありえる！」
「そうでしょう。
生まれた子供と一緒に、高価な物を身に着けて、孤児院に預ける。
考えられない話しじゃないでしょう？
貴方のお母さんだって、直接、貴方を孤児院に置き去りにした訳ではないけど、もし、そんな立場なら･･･。
ごめんなさい。
貴方のお母さんも、そんなことは考えなかったでしょうね」
「いや、考えられるよ。でも、誰が、そんなことを」
「ねぇ、その頃のことを、何か思い出せないかしら？」
「その頃って、孤児院の皆と遊んでいたこと？」
「違う、違う、孤児院を経営していた人や、そこで働いていた人のことよ」
「俺、まだ、小さかったから、経営なんて･･･。
ま、待てよ、そう言えば、時々、怖いおじさんかな、お兄さんかな、良く分からないけど来てた。でも、怖かったって言うことしか覚えていないよ」
「そう、その調子よ」
「あの時の院長さんは･･･すっごく優しかった。お袋じゃないかと思ってしまった。皆、そう感じたんじゃないかな。皆、お袋を知らないから･･･、あっ、ゴメン」
「良いのよ、それで？」
「副院長さんは、娘さんのような感じだった。院長さんが、年を取っていたので、いつも、支えるような、そんな感じだった」
「危ない人間が出入りしていた。
院長さんは高齢で、娘さんが支えていた。
他の人達で覚えている人はいる？」
「何人かいましたが、今は、誰も居なかった。
そ、そうだ、人じゃないんだけど、あの桜の木の下で、亡霊が出るって噂があったな。それからは、皆、近づかなかったような気がする。･･･でも、それがいつだったか覚えていない。
･･･待てよ、カプセルを埋めた後だったはずだ。だって、亡霊が出る桜の木の下になんて、誰も、カプセルを埋めないよね？」
「そうね。
安心して。貴方のカプセルは出て来そうな気がするわ。
まずは、院長さんを探してみましょう。

貴方は、あそこの出なんだから、電話して、院長さんが今、どこにいるか聞いてみて。
そんな顔をしないで、貴方のカプセルを探すんじゃない」

‥‥‥‥‥‥

「先日は、タイムカプセルを探していただき、ありがとうございました。あの時は、お騒がせして、申し訳ありませんでした。
ところで、二十年前の院長さんは、今、どちらにお住いか知りませんでしょうか？」
「その院長さんなら、もう亡くなりましたよ。その後、娘さんが引き継いだのですが、数年でお辞めになってしまいました。それに引越しされたようで、今、どこに住んでいるかまでは、分かりません。
あっ、ちょっと待ってください、最後に届いた年賀状を持ってきますので･･･」
と言って、最後に住んでいた住所を教えてくれた。
「どうする？　今、住んでいるところが分からないようなんだけど･･･」
「最後に住んでいたところって、ここからそんなに遠くないから、これから行ってみない？」
「行ってみましょう」

‥‥‥‥‥‥

そこは、お世辞でも綺麗なアパートではなかった。
管理人に確認してみたが、引越し先は知らなかった。
「これ以上、私達には調べられそうもないわね。この前、刑事さんが『借り』があるって言ってたじゃない。その『借り』を返してもらいましょう。電話して、呼びつけちゃいましょうよ」
「ま、待ってくださいよ。たかが、カプセルですよ。刑事さんが調べてくれるとは、思えないんですが？」
「良いじゃない。貴方にとって大切な品でしょう。そしたら、私にとっても大切な品じゃない。気にしないったら、気にしない。早く、あの刑事さんの『借り』を解消してあげましょうよ。お互いのために」
「そ、そんなもんなんですか？」
「そんなものよ」

◇

「なんだよ。早速(さっそく)借りを返せってか。それは、あん時は言ったよ、言ったけど･･･。嬢ちゃん、そんな目でワシをにらまないでくれないかな。
分かった、分かったよ。それで、ワシは何をすればいいんだ」
「この人のタイムカプセルを探して欲しいんです」
「なんだと。こいつが埋めたタイムカプセルを探せってか。冗談は、やめてくれよ」
「冗談なんかじゃないわ！　この人の大切な思い出が詰まっているのよ！
『借り』は返してくれないの！？」
「分かった、分かった。そんなに、目くじら立てて怒らなくったって良いだろうが。たかが、そいつのカプセルのために。
分かった、分かった、借りは、ちゃんと返すよ。詳しく話してみな。ちゃんと、聞いてやるから」
「あ、ありがとうございます」
と言って、孤児院での出来事を話した。
「夢や思い過ごしじゃないんだな。本当に埋めたんだな･･･。
そんな目で見るなよ。探してやるよ。院長さんの娘さんの名前と、最後に住んでいた住所が分かっていれば、なんとかなると思うが、
ワシだって仕事をしているんだから、ちょっと時間は掛かると思うが、まぁ、期待して待ってろよ
じゃあな」
と言いながら帰って行った。
◆
数日して、刑事さんが来た。
「院長さんの娘さんの居所が分かったよ」
「さ、流石(さすが)ですね」
「それが警察ってところだ。
娘さんは、仕合せに暮していたから、心配しなくて良いぞ。
それはそうと。ほらよ。これが、お前のカプセルだ」
「ほ、本当にあったんですね。ありがとうございます」
「自分で埋めたんだろうが。あって、当たり前だ！」
「ど、どこにあったんですか？」
「今となっては、事件にするつもりはないが、しいて言えば『窃盗』だな」
「こんなカプセルでも、窃盗になるんですか？
この人には悪いけど、夢に近い物だと思いますが･･･」
「いや、こいつの物じゃないよ。数百万円はするだろうダイヤモンドの指輪だ」
「だ、誰がそんな物を、カプセルに埋めたんですか？」
「お前のことをシーソーで飛ばしたデブんちょだよ。

それでは、説明するか。
事件じゃないから、しやべっても問題にならんだろうかならな。
あの頃の孤児院は、経営難で相当に困っていたらしい。高利貸しからも借りていて、孤児院を閉鎖しなきゃならない状況だったようだ。
そんな時に、タイムカプセルを埋める話しが出たそうだ。
デブんちょは、孤児院に預けられた時に、お守りを持っていたんだが、その中にダイヤモンドが入っていた。親御さんは、金持ちだったんだろうな。でも、子供は育てられなかった。お前も、孤児院育ちなら、なんとなく分かるだろう。
デブんちょは、それが高価な物だとは知らずに、カプセルに入れたんだな。それを、その当時の院長さんが見てしまった。盗むと言うより、借りるつもりで掘り出したそうだ。その時、一つだけ無くなっていると、変に思われると考え、すべてを隠してしまったそうだ。
でも、他のタイムカプセルは大切に保管されていたよ。
すべて返してきたよ。
お前のタイムカプセルが最後だ。
･･･えぇ、デブんちょは、その後、どうしたかって？
それが、孤児院を出て働き出したら、すぐに病気になって、あっけなく死んじゃったそうだ。太り過ぎでかな？
そん時から院長は、自分が死ぬまで、そのデブんちょの墓参りを欠かさなかったそうだよ。
･･･院長が亡くなったのに、何故、分かったって？
院長さんの娘さんが、院長さんが亡くなる前に聞いたそうだ。そして、タイムカプセルを引き継いだ。返そうと思ったが、その勇気がなかったって言っていたよ。お母さんの罪を話すことになってしまうからな。
被疑者死亡。これ以上、警察だって介入は出来ないさ。
お前には、もっと早くに知らせても良かったんだが、先に皆にタイプカプセルを返した方が、お前も安心すると思ってな。
皆、喜んでいたよ。忘れていた人もいたが、多分、孤児院に入っていたことを忘れたかったのかも知れないな。
でも、タイムカプセルを見て･･･泣いていたよ。
そして、柄(がら)にもなく、お礼を言われてしまった。
刑事になって、こんなにも感謝されたのは初めてだ。
ところで、お前は何をタイムカプセルに詰めたんだ。これだけ働いたんだから、ワシにも見せて欲しいんだがな！」
「私も見たい！」
「ぼ、僕も忘れちゃった。
なんだか恥ずかしいけど、お礼に、一緒に開けてみましょうか」
マンガの消しゴムやシール、ビー玉も入っていた。
そして、たたまれた画用紙が出てきた。

「お、思い出した。これは、見たこともないお袋を描いたもんなんです」
「見せて、見せて」
‥‥‥‥‥‥
「このお母さん、私に似ていませんか？」
「絵は下手(へた)だが、嬢ちゃんに似ているな。
良く見ると、そっくりだ！」
「そ、そうですか？」
「お前にとって、理想の女性は嬢ちゃんと言うことだな。
はっはっは」
「ねぇ、これ飾(かざ)っておきましょうよ。そうしましょう」
「や、やめてください。は、恥ずかしい〜っ」
「それじゃな」
◇
自分の部屋に戻った。
お袋の絵を見て、あの時の記憶がすべて蘇(よみがえ)った。
この手紙を見られなくて良かった、と思った。何を書いたのかも、すべて思い出した。
これから、自分の『遺書』を書いてみよう。
彼女への思い。
刑事さんへの感謝。
そして、この手紙は、俺と一緒に焼いてもらおう。
でも、俺の『遺書』は、誰が読むんだろうか‥‥‥‥‥。

●五通目・・・集団自殺ー１

『遺書』が届いた。
お袋、おばさん、彼女、俺。
これが初めての『遺書屋』としてのメールかも知れない。
メールを開いた。そこには、
『日時指定でメールしたので、このメールが届いたと言うことは、俺はもう死んでいると言うことだ。生きていれば、送信時間を変えているからな。
集団自殺なんて、珍(めずら)しくもないが、六人も同時に死ねば、新聞やテレビでも報道されただろう。
パスワードは、俺の年だから、すぐに分かる。少ないとは思うが、これでも、やっと貯めた金だ。自殺する前に振り込んでおいたはずだから、確認してくれ。
本当は、『遺書屋』なんて半信半疑だが、親には、「ゴメン」とだけしか書けなかった。だから、この思いを誰かに残したくて、思い切って信用することにした』
と書かれてあった。すぐに自分のコンビニに行って預金を確認した。
今まで、『遺書』が届いていなかったので、通帳の記帳をしていなかったが、お金は、ちゃんと振り込まれていた。
彼女と一緒に、『遺書』を読もう。
二人にとって、初めての『遺書』を。
その前に、この人の集団自殺の記事を探して、パスワードを調べておかなきゃ。後、三十分くらいで、彼女は仕事から帰ってくるはずだ。
インターネットは、本当に便利だ。『集団自殺』と入力して検索すれば、腐(くさ)るほどパソコンの画面に表示される。今は、情報があふれている時代だ。逆を言えば、その中から『正』を探し出す方が大変だ。間違って『誤』が正しいと思い込んだ時点で、自分の人生が終わってしまうことだってあるだろう。
『集団自殺』だけでは、あまりにも多過ぎて、探し出せなかった。何故だか、今の世の中、集団自殺がブームのようだ。
『集団自殺』と『この人の名前』を入力して検索した。
件数が、絞(しぼ)られて、すぐに分かった。
なになに、
『五人死亡』か。
『遺書』を送って来た人の名前は分かっているから･･･、この人だな。二十四歳か。これでパスワードも分かった。
まだ若いのに、なんで自殺しちゃったんだろう？
生きるということは大変だけど、死んじゃったら、何もなくなってしまうのにな･･･。
◇
「ただいま～っ。あぁ～疲れた。あれ、何やってるの？」
「『遺書』が届いたんだ。見てくれ、この人なんだよ」

「どれどれ、集団自殺したんだ。二十四歳か。まだ若いのにね。
それで、『遺書』は、もう読んだの？」
「君を待っていたんだ。パスワードも分かったし、いつでも読むことが出来るよ」
「ちょっと待って、着替えてくるから」
……
共用で使っているテーブルにパソコンを乗せ、椅子を引き寄せ、　二人で、『遺書』を読み始めた。
『俺は、高校中退だ。
おやじは高卒で会社に入り、自分では納得できない仕事をさせられていたらしい。
だから、酒を飲むと、必ず
「高卒じゃだめだ！　馬鹿な大卒が、幅を利かしている！　仕事も出来ないくせに、俺より何年も後から入った奴が上司になってやがる！　高卒の俺をみくだしやがって。お前は、絶対に大学に行け！　そして、エリートコースを歩むんだ！」
と言って、いつもクダを巻いていやがった。おやじも馬鹿だよな。自分もお袋も頭が悪いのに、俺だけが、頭が良い訳ないじゃないか。そうだろうが。それでも、中学校までは、おやじの言葉に従って頑張った。そして、分不相応な高校に入ってしまった。
そして、そいつらを見て思ったよ。
『馬鹿ばっかりじゃねえか』って。
親が金を持っているから入れたような奴ばっかりだった。
でも、俺は、金がなかった。
おやじは、そんなことも知らずに、俺が、その高校に入れたことを喜んでいたよ。
だが、一年しかもたなかった。
金のある奴は、俺を使いっパシリのようにコき使いやがった。でも、そのお陰で駄賃がもらえた。
みじめだったが、自分の好きなＣＤが買えたんだ。
でも、そのＣＤをおやじが見つけ、「これは、どうしたんだ！　盗んだのか！　そんな子供に育てた覚えはない！」と一方的にわめき散らし、責め立てやがった。
俺は、俺なりに、この高校を卒業しようと思っていたんだ。でもおやじは、俺を信用してくれなかった。
すべてが、いやになっちまった。
春休みに、おやじの財布と、お袋のへそくりから、金を盗んで都会に飛び出した。いや、今、思えば、逃げ出したのかな。
アルバイト募集の貼紙は、そこらじゅうに貼ってあった。
でも、高校中退で、親の承諾(しょうだく)が得られない俺は、どの店もことわられたよ。
でも、怖がらなきゃ、仕事なんて、あるもんだ。
色々とやったよ。
風俗店のチラシを電話ボックスに貼ったり、ボッタクリ・バーの呼び込みもやった。

そして、十八歳になって、やっと、まともな仕事が出来るようになった。二十歳(はたち)になって、おお手を振って、酒も、タバコも飲めるようになった。
そんなある日、おやじの会社が倒産した、とテレビのニュースでやっているのを見ちまったんだ。
それなりの会社だったのに。
おやじは、後一年で定年だったはずなんだ。
退職金も一時金も出せないのではないか、とテレビで言っていた。
会社は、四、五年前から、ガタガタだったらしい。
それを見て、つくづく生きるのがいやになっちまった。
俺も、高校を中退して、いやと言うほど色んな仕事をしたよ。
同級生の何十倍も仕事をやった。
でも、俺、疲れちゃった。
そんな時に、たまたま時間があってネットカフェに入ったんだ。パソコンは、前の人が使っていたままだったんだ。普通は、そんなことないのにな。
画面には、「集団自殺の募集」のサイトが表示されていた。
完全に、はまっちまった。
連日、そのサイトにアクセスしていた。
そして、六人が集まったんだよ。
自殺しようと思う人間は、俺と同じで寂しがり屋ばかりだった。
会社の金を使い込んだ奴。結婚生活に疲れきってしまった奴。整形手術に失敗した奴。借金地獄から抜け出せない奴。会社の上司に虐めめられている奴。そして、俺だ。皆、自殺したい原因は違うんだけど、結局、俺と同じように、生きていることに疲れちゃったんだよな。
どうやって死のうかって、みんなで考えたさ。
確実に、痛くなく、苦しくなく、死ねる方法をね。
リストカットを提案した奴もいたけど、一人では死ねても、全員が同時に死ねるとは思えなかったからボツになったよ。
ガス自殺も、一歩間違えば大惨事になってしまうだろう。死んでからも、親に迷惑をかける訳にはいかないからな。
自殺名所の断崖から飛び込む案も出たが、泳ぎの上手(うま)い奴は、死なないかも知れないしな。
今、流行(はや)りの練炭自殺も考えたが、まねしている、と思われるのが嫌で、誰も賛成しなかったよ。
それで、こんな方法を考えたんだ。
面白いだろう。
長々と書いちまったが、お願いがある。
お袋に会って、言って欲しいことがあるんだ、
「お袋よりも先に死んじゃった。
どこかで、何かを間違えてしまった。お袋が、いつも『ワイシャツのボタンが一つ違ってい

るよ』と言われたよね。どうも、人生のボタンも掛け違ってしまったようだ。こめんな。親不孝な俺を、許して欲しい」って。
　本当は、自分が直接、お袋に謝りたい。
　『遺書屋』なんかに『遺書』を送るんじゃなく、『遺書』をお袋に手渡したい。
　でも、どうしても、おやじが許せないんだ。
　今ここに、おやじがいたら、俺は、おやじを殺してしまうかも知れない。
　『遺書屋』さんには、この気持ちは分からないだろうが、自分を見ているようで、おやじを許せないんだ。
　だから、『遺書』らしい『遺書』も書かずに、俺は自殺の道を選ぶことにしたんだ。
　なんだか、愚痴を聞いてもらったようで、すっきりしたよ。
　これだけで、『遺書屋』さんにお願いした価値はあるよな。
　変な仕事だが、頑張ってくれよ。
　ありがとう。
　俺の墓が出来たら、見に行って欲しいが、でも、いつ建つか分からないから、これは、いいや』
　　・・・・・・・・・・

何を、どうすれば良いか分からなかった。　死者からの手紙。　やっぱり、すっごく重い。　「どうする？」　「ど、どうするって、親御(おやご)さんのところに行って、話さなきゃ」　「そうね。貴方、ちゃんと話せる？」　「た、多分、大丈夫だと思う」　「でも、何か変じゃない？」　「そ、そうなんだ。何か小骨が喉(のど)に刺さっているような･･･、なんだか、ちゃんと飲み込めないような･･･。分かっているのに･･･。喉の、ここまで出掛かっているのに･･･」　「もう一度、読み直してみましょう」　･････････　「分かった！　この人は六人と言っているのに、死んだ人は五人。もう一人は、どうしたのかしら？」　「それは、最初に思ったんだが、その人は助かったんじゃないかな、と思って読んでいた」　「なんで、新聞に出ていないの？」　「助かってしまったから、プライバシーとか、なんとかで発表しなかったと思ったんだ」　「そうかも知れないし、でも、五人だったかも知れない･･･。　ねぇ、『遺書』に書いてあった六人をまとめてみてくれる？」　「あぁ。　『遺書』に書いてあった六人は、　・会社の金を使い込んだ者　・結婚生活に疲れきってしまった者　・整形手術に失敗した者　・借金地獄から抜け出せない者　・会社の上司に虐められている者　・『遺書』を送ってくれた人　新聞に載っている性別と年齢は、　・男＝二十五歳　・女＝二十歳　・女＝三十五歳　・男＝三十歳　・『遺書』の人＝二十四歳」　「貴方だったら、どう組み合わせる？」　･････････　「使い込み・・・男も女も、年齢も関係ないから･･･、ちょっと、後回し。結婚生活に疲れた・・・既婚者か。これも使い込みと同じで、男と女が結婚するんだし、孫くらいに年が離れていることもありえるし、･･･パス。　整形失敗・・・女だ！　年齢は･･･二十歳だよ！　きっと」　借金地獄・・・昔は男しか考えられなかったけど、今じゃ、簡単にお金を借りて、簡単に自己破産する時代だからな･･･パスするか。　あれ、三回パスしたら、いけないんだっけ？　まぁ、トランプの七並べじゃないから良いか。　上司の虐め･･･使い込みと一緒だよな。だから、後回し。　あっ、あれ、け、結局、良く分からない」　「分からないわよね。もうちょっと、ヒントがなければ、調べようがないよね」　「な、なんですか、そ、その目は？　ひ、ひょっとして･･･」　「分からなくて、大正解よ。　ちょっと、刑事さんに電話して、確認してもらってくれない？」　「お、俺が？」　「そう、貴方が！」　「で、でも、教えてくれるかな？」　「電話もしていないのに分かるの？」　「分からない。　わ、分かりましたよ、電話します」　･････････　「なんなんだ、忙し･･･くはないか。今度の頼みは、なんだ？　･･･えぇ、この前の集団自殺で生き残ったのは、いなかったかって？　あぁ、あの事件は、ワシも捜査に加わったから知ってるが、全員死亡だ。生き残った奴なんていないよ。　･･･読み上げるから、年齢と性別を教えて欲しいって？　お前達、名前を知っているのか？　･･･なんだ、名前は知らないのか。　･･･でも、自殺の理由を知っているだって！　分かった。詳しい理由は後で聞くとして、年齢と性別ぐらいは教えてやるよ。言ってみな。　･･･会社の金を使い込んだ者？　こいつは男・三十歳だ。調べたら、微々たる金額の使い込みだったよ。やり直しが出来る年齢なのに、馬鹿な奴だよ、まったく。　･･･結婚生活に疲れきってしまった者？　これは女・二十歳。十六歳で結婚したようだ。そんなに早く結婚して、そんなに早く死んじまって、親達は悲しんだろうな。ワシの、三分の一の年齢だぞ！　三分の一、とお前に言っても仕方がな

いか。　･･･整形手術に失敗した者？　驚きの男・二十五歳。女になりたかったようだが、大失敗したそうだ。もぐりの医者が整形したそうだ。ワシには分からんが、そいつの心は女だったそうだ。可愛そうに、と思ったよ。心と身体が一致していないんだからな。お前も、女に生まれた方が良かったかもな。嬢ちゃんは、男の方が良かったかも。でも、今は、その二人が一緒に住んでいるんだから、良いか。　悪りい、悪りい、次は、　･･･借金地獄から抜け出せなかった者？　女・三十五歳だ。パチンコに狂ってしまっていたようだ。パチンコは面白いからな。はまっちまう気持ちは、良く分かるよ。旦那さんも言ってくれれば、怒ったかも知れないが、なんとでもなったのに、と言っていたよ。でも、奥さんからすれば、旦那さんから怒られたくなくて、自殺を選んだのかもな。　･･･会社の上司に虐められている者？　そんな奴はいなかったな。なんで、そんな奴のことを聞くんだ？　お前達、何か知って･･･　えぇ、電話を切っちまいやがった。　まぁ良いか。きっと、もう一度、電話があるだろう。その時は、嬢ちゃんからだな」

･････････　「なんで、あわてて電話を切っちゃうの？」　「や、ややこしくなりそうだったもので･･･」　「やっぱり、一人足りないのね。調べてみない？」　「『遺書屋』ですから、ちゃんと調べなきゃいけないですよね、やっぱり」　「なによ、その『やっぱり』って」　「わ、分かりました。もう一度、『遺書』を読んで考えてみましょう　①自殺志願者は六人だった　②死んでしまった人は五人だった　③いない人は、会社の上司に虐められている人だった。　･･･これじゃぁ、調べようがありませんね」　「そうね。　その前に、あの状況で生き残れる方法はあるのかしら？」　「い、行ってみますか？」　「行ってみましょう」

◇　「あ、あの高さから落ちたんですか。の、上るだけでも、お、俺は･･･、パス！」　「私は、三度、経験したわよ」　「う、嘘でしょう。信じられません。あ、あんな高いバンジージャンプ台から、飛び降りるなんて。か、考えただけで寿命が三年、縮まってしまう。の、上ったら、じゅ、十年は縮む。　今度の集団自殺では、皆が手と足を結んで落ちたんですよね。どうやって、一人だけ助かるんですか。考えられません」　「安心して。あんなことがあったから、今は休業よ」　「ふ～ぅ、良かった」　「あっ、あそこの係りの人に聞いてみましょう」

･････････　「すみません。あのバンジージャンプ台で集団自殺があったのですよね？」　「えっ、あんた達、マスコミの人？」　「いえ、亡くなった人の友達です」　なんだ、こいつは。俺より嘘が上手(うま)い。　「そうですか･･･。ここが休みの日に、皆で飛び降りたんですよ」　「そうですってね。あの高さから落ちたら、生きているってことは無理でしょうね？」　「装備を着けないで落ちれば、無理ですよ。その紙一重(かみひとえ)の恐怖がバンジージャンプの醍醐味(だいごみ)ですからね」　「もし、装備をつけて、集団で飛び降りたら、どうなりますか？」　「五、六人の体重なら問題ないですよ。相撲(すもう)取りが落ちても大丈夫なように作ってあります。でも、まだ、お相撲さんがやったことは、ありませんけどね」　「今度の自殺では、皆が手足を縛(しば)っていたけらしいですけど、装備を誰かが着けていたら生きられたんですね」　「手足を縛っていたところは傷つくとは思いますが、長さ的には、ぎりぎりになっているので、縛り方を工夫(くふう)しなければ、全員が生きているのは難しいと思いますよ。さっきも言いましたけど、人間一人だけを想定して作っていますので、お相撲さん一人なら平気ですが、何人もで落ちることは想定していないもので」　「そうですか。結構、安全なんですね」　「

肝試(きもだめ)しの乗り物ですから、安全だけは確保していますよ。でも、休みの時に、勝手に入って来られては･･･」　「ありがとうございました。友達がご迷惑をお掛けして、申し訳ありませんでした」　「いいえ。でも、まだ、再開のめどが立たないんですよ。今月のバイト代が心配で･･･」　「ちょっとだけ、一緒に行上まで行ってくださる？」　「それは、ちょっとできませんよ」　「友達の供養(くよう)のために、ちょっとだけ、お願い」　「分かりました。ただし、落下するための先までは駄目ですよ」　「えぇ、上るだけで結構です」　「ところで、あそこで、しゃがんで震えている人も一緒にですか？」　「いいえ、どう見ても無理なようですね」　「それでは、二人で行きましょうか」　･････････　「風もなく、バンジージャンプ日和(びより)ですね」　「そうですね。でも実は、私も貴女の彼氏と同じように、高いところが苦手なんですよ。バイトの仕事だと思って無理していますが、自殺があったお陰で、ここに上らないから、ホッとしているんですよ」　「そうだったのですか。てっきり、高いところが好きなのだと思っていました」　「今も膝(ひざ)が、ガクガクしてますよ」　「すみません。バンジージャンプの器具を見たら、すぐに下(お)りますから」　「えぇ、そうしてください。･･･これを身体に着けるのです」　「どこの遊園地にあるものと同じですね」　「規格が決まっていますからね」　「ありがとうございました」　「もう良いのですか？　失礼ですが、本当に友達がここで亡くなられたのですか？」　「さぁ、下りましょう。ありがとうございました」　「･･･そうですね。下で彼氏が待っていますからね」　･････････　「ど、どうでしたか？　う、上を見るのも、こ、恐くて･･･」　「どこの遊園地にもある器具だったわ。　それはそうと、集団自殺した、あの人達は手足を結んでいた。それなのに一人だけ助かっている。　ねぇ、助かる方法は？」　「その場にいなかった」　「その場にいたとしたら？」　「う～ん。分からない」　「実験してみましょうか？」　「い。いやですよ、あ、あんな高いところ」　「安心して。家の中で実験するだけよ」　「家の･･･に、二階の窓から？」　「安心して、ちゃんと、家の中でよ」　･････････　「どうするんですか？」　「じっとしてて、これが、こうで、･･･あれが、こうで、･･･こんな感じで良いかな」　「なんなんですか？　これは？」　「バンジージャンプの装備じゃない。ビニール紐(ひも)しかなかったので、仕方がないでしょう」　「これが装備ですか？」　「そう思うのよ。想像、想像」　「これから、どうするんですか？」　「これだけの装備を、自殺した人達に分からないようにするには、どうしたかを考えるのよ」　「それは無理です。こんなに色々とはめていたら気づかれてしまいますよ」　「そうだよね。無理だよね。じゃぁ、どうしたんだろう？　そうか！　これは、最大限の安全策なんだ！　最小限の安全策にすれば良いんじゃない！　こうして、ああして、こうやれば･･･、　完成！　でも、成功したとしても、ちょっと痛そうね」　「こ、これだけじゃぁ･･･」　「そうよね。これ以上、私達が考えてもらちが明かないわね。　あの刑事さんが、この事件に関わっていたようだから、調べてもらいましょう。　･･･安心して、今度は私が電話するわ」　･････････

●五通目・・・集団自殺ー３

「あぁ、嬢ちゃんか。集団自殺はどうなったんだ？
・・・何、来て欲しい？
おい、おい、おい、おい、ワシは、国民の税金で働いている公務員だよ。それを呼びつけるのか？
・・・分かった、分かりましたよ。行けば良いんでしょう。行きます、行きますよ。ここからだったら、三十分くらいで行けるから待ってろ。まったく、嬢ちゃんにはかなわないなぁ」
・・・・・
「あ、貴女は強い！　驚いた。刑事さんを相手に、良く、あそこまで、言えちゃいますねぇ」
「ただ、はっきりと言っただけです。あなたが刑事を続けられるのは、私達が手伝って事件を解決したからでしょうって」
「なかなか、それが言えないんだな、普通は」
「私は、普通の女の子です」
「はい、はい」
と言っている間に、刑事さんが来た。
「嬢さんには、まいるな。
それで、ワシに何を聞きたいんだ。まだ、仕事中だから、手短に頼むよ」
「はい、はい。
では、手短に。あの自殺者の一人から、『遺書』が届いたんです。自殺志願者は『六人』と書いてありました。でも、亡くなった人は『五人』。
一人、足りないんです」
「怖くなって逃げたんじゃないのか。良くある話だよ、そんなことは」
「そうかも知れません。でも、どうしても気になるのです、『遺書屋』として」
「分かったよ。お前達のことだから、まとめてあるんだろう？」
そして、今までの経緯を話した。でも、脱出の方法までは話さなかった。
「その一人を見つけ出して、お前達は、どうしようと言うんだ？」
「分かりません。でも、ちゃんと調べてあげたいのです。安心させてあげたいのです。それが・・・『遺書屋』の仕事だと思うからです」
「そんなことまでやってたら、身が持たなくなるぞ！」
「まだ、二人で始めて一通目ですから。刑事さんの言うように、身が持たなくなったら、考えてみます」
「それもそうだな、ワシと違って、まだ、二分の一の人生のようだからな」
「もう一度、洗い直していただけますか？
どうしても知りたいんです、私」
「分かったから、そんな目で俺を見るな！
事件とは思えないが、嬢ちゃんがそこまで言うなら調べてやろう。ただし、今抱えている事件が終わってからだぞ。ワシだって、公僕(こうぼく)と呼ばれているんだからな。

じゃぁな」
と言って帰って行った。
　「どう思う？」
　「何が？」
　「会社の上司に虐められた人よ」
　「男でしょうね。でも、事件性はないような気がしますが？」
　「どうして、男なの？」
　「それは･･･、それは、決められませんが･･･。なんとなく。
　か、勘です、勘」
　「へぇ～。貴方の勘ね。
　でも、なんで、その人は自殺しなかんたんでしょうね？」
　「そ、それは、刑事さんも言ってたように、恐くなったからじゃないですか？」
　「私も、そう思うわ。でも、なんで･･･」
　　◆
　刑事さんがやって来た。
　「もう一人いたよ。自殺志願者が。それも･･･」
　「だ、誰なんですか、その人は？」
　「うるさい！　ワシの話しをちゃんと聞け！」
　「す、すみません。ど、どうぞ」
　「『集団自殺の募集』のサイトを、サイバーテロ班に頼んで調べてもらったら、見つかったよ。
　小声で言うな！　ワシだって、サイバーテロ・チームの一人くらい知っていたって、良いだろうが！
　そんなことは、どうでも良い！
　それがなぁ、可愛そうな女でな。何度も自殺をしようとして、リストカットをしたが、死に切れなかったんだなぁ。
　一分遅れていたら死んでいたかも知れないのに、たまたま、隣の家で小火(ぼや)があり、消防署員に助けられたそうだ。また、自殺の名所の山の中でリストカットをした時にも、同じように自殺をしに来た人に発見されて助かった。
　手首には、何本も横線が入っていたよ。
　完全に死神に嫌われている女だったようだ。
　でも、今回だけは、死ぬ前に怖くなってしまったと話していたよ。おかしなもんだ。
　家族は、おやじさんは大学の教授、お袋さんは高校の先生、兄貴は大学院生、妹は外国の大学生に留学。自分は落ちこぼれ。ちょっと、辛(つら)かったかもな。
　先に話そうとしたが、彼女が今回の『集団自殺』の首謀者だったんだ」
　「そ、そうだったんですか。
　何度も自殺をしようとしていたのに。今回は、きっと死神が見えたんじゃないでしょうか。だ

、だから怖くなって逃げ出してしまったんですよね？」
「ねぇ、刑事さん。ところで、どうやってあの場から逃げられたのですか？」
「聞けば、簡単なトリックさ。彼女が、みんなの手足を縛った。首謀者だからね。誰も疑わなかった。最後に、自分と二十歳の女の子と縛る時に、『リストカットばかりしていたので、手首が痛くてゆるく結ぶわね』と言ったそうだ。あの手首を見たら、誰だって文句は言えなかっただろう。足首は、女の子が見えないようにしゃがんで、相手の足だけに結び、自分はバンジージャンプの器具に結んだそうだ。もちろん、足首を痛めないように、足を保護していたようだが、相当の衝撃があったんだろうな。まだ、足を引きずっていたよ。こればかっかりは、事前に実験できないからな。
五人が死に、自分はロープをよじ登って逃げてしまった」
「やっぱりね。
でも、彼女が、そこまでして生きたいと、何故、思ったのかしら？」
「一週間前に自殺が行われいれば、彼女も一緒に死んでいただろう。皮肉なことに、二日前に彼氏が出来たそうだ。生まれて初めてだと言っていたよ。それまでは、上司の虐めに苦しんでいた、と言っていた。その上司って、女だそうだ。セクハラだと思ったら、パワハラだったよ。
ワシには、ついていけない時代になって来た。早く、定年する日が来て欲しいよ」
「やっぱり貴方の勘は、はずれたみたい。
ところで。彼女の罪はどうなるんですか？」
「やっぱりとか、勘がはずれたとか、なんなんだ？
まぁ、良いか。
彼女の罪は、
『殺人！』
かどうか、ワシには分からん。死んでしまった五人は、皆、親や兄妹に『遺書』を残しているからな。それを読んだ人達は、泣いたり、怒ったりしていたよ。一言、「ゴメン」と書かれた『遺書』もあったらしい。
裁判官が、『首謀者』と言う言葉に、どれだけの重みを持たせるかだと思う。
いや、今は、君達、裁判員が決めることだな。
でも、死体が目の前にあるのに逃げてしまったから、死体遺棄罪には、問(と)われるだろうな。
･･･その後の彼女と彼氏か？
分かれてしまったようだよ。彼氏に告白したそうだ、すべてを。
男は、彼女の前から消えてしまったそうだ。
今の男どもは、優しく、強く受け止められる奴はいないようだ。
それで、やっと彼女も分かったようだな。この世の中がね。
自首しようと思ってたところへ、ワシが行っちまった、
泣きながら、告白してくれたよ。
彼女は、自首したんで、少しは刑が軽くなるかもな。
それに、ワシはもう、お前達とは関わりたくない！
『遺書屋』なんて、やめちまえ！

なんだか最近、良く分からなくなってくるんだ！　ワシ自身が。
それじゃな」
と言って、刑事さんは帰って行った。
その背中は、悲しみの重みに耐(た)えかねているように見えた。
・・・・・・・・・・
「何、しんみりしているの？
貴方らしくないわよ。
さぁ、『遺書屋』でしょう！　まだ、仕事は終わっていないのよ。
親御さんに会いに行かなきゃ！
ところで、いつ休みが取れる？」
「そ、そうですね。終わっていませんよね。大事な仕事が残っていました」
◆

　彼女との、初めての旅行(？)である。
　二泊三日。
　料金が安い夜行バスで行くことに決めた。お互いに仕事を終え、停留所で待ち合わせをした。
　酔っ払った老若男女(ろうにゃくなんにょ)がひしめく駅前の裏通りに、停留所はあった。
　停留所に着いたら、彼女はすでに来ていた。大きな、ピクニックバックを抱え、黄色いハンカチが、ピクニックバックの握り手に結(むす)ばれていた。そして、俺を見つけ、大きく手を振ってくれた。彼女が自殺をすると言っていた、あの時を思い出してしまった。でも、あの時との違いは、俺の右手も、高く、大きく振っていた。
　夜行バスに二人で乗り込む前に、お互いに高く手をあげ、
　パチン
と、互いの掌(てのひら)を鳴らした。うれしい、ハイタッチ。
　これから、『遺書』を送ってくれた人の親御さんに会いに行くとは思えない軽(かろ)やかな気分だった。
　もし、彼女がいなかったら、また逃げ出そうとしていた自分がいただろう。いや、その前に、『遺書屋』なんて、辞めていただろう。
　バスが定刻に走り出した。都会の騒音を残し。
　「お腹、すいてない？」
　「腹減った。忙しかったんで、ロスを持って来るのを忘れてた」
なんて言ったが、彼女が持っているピクニックバックを見て、あわててロスをゴミ箱に投げ入れてしまった自分を忘れてたように。
　「早めに仕事が終わったんで、家に帰って作ったんだけど、食べる？」
　「食べる、食べる。ところで、何を作ってくれたの？」
　「お出掛けと言えば、鮭のお握りと、梅干のお握りと、昆布のお握り、それに定番の鳥の唐揚げ！」
　「す、凄い！」
　「･･･は、やめて」
　「え、えぇ？」
　「貴方の大好きなステーキ弁当を作ってみたわ。
　お腹、すいたでしょう？」
　「す、す、凄ぇえええぇぇえええぇぇえええぇぇ！
　め、滅茶ゃんこ、お腹すいた！」
　滅茶苦茶に美味(おい)しかった。
　これから、何をしに行くかを忘れてしまうくらいに、楽しい時間が過ぎ、消灯の時間になってしまった。
　　◇
　終点に着いたのは、朝の八時だった。ここから、またバスに乗って一時間である。お袋の入院

先へ行った時には一人だったが、今は二人だ。
　親御さん達に、何を話そうかとは考えなかった。
　いくら考えても、相手がいる。その時に考えれば良いと思った。親御さんに会ったら、また、嘘をつくことになるだろうが･･･。
◇
　「彼とは、少しの間だったんですが、一緒にコンビニでバイトをしていたんですよ。俺と違って、年寄りに優しくって、すっごく好かれていましたよ。俺は、そのコンビニも長続きしなかったんで、その後、彼とは会ったことがないんですが、彼から、この家の場所を聞いていたもんで、彼女と旅行がてら寄っちゃいました」
　「そうですか、そうですか。それは、遠いところを、ありがとうございます」
　疲れきったおじいさんの顔だった。お袋さんは、じっと話しを聞いているだけだった。
　「ここに来る時に、近所で彼が亡くなったと聞いたんですが、本当ですか？　あんなに元気だったのに･･･」
　「自殺しちゃったのですよ。なんで自殺なんか、と思うのですが、あいつなりに苦しんでいたのでしょうね」
　「そうですか。亡くなったんですか･･･。
　そうだ、一緒に働いている時に、彼が俺に言ったんですよ
　『なかなか実家に行けないんで、旅行か何かで近くまで行ったら、寄ってくれますか』って。
　そして、ちょっと恥ずかしそうに
　『おやじもお袋も好きなんだけど、なかなか帰ってやれないでゴメン』
と伝えて欲しいと言っていました。
　あいつ、シャイ、いや、内気だから、そんなことも電話できなかったみたいですね」
　「そうですか、そうですか、あいつが、そんなことを言っていたんですか。わざわざそれを言いに来てくださったんですか」
　「いえ、いえ、近くに遊びに来たついでで寄っただけですから」
　「ありがとうございます」
と、お母さんが初めてしゃべった。嬉しそうに、涙を浮かべて･･･。
　来て良かった、と思った。隣の彼女を見たら、同じように涙を浮かべていた。
　これが、初めての『遺書屋』の仕事だと思った。
　二人の涙を見ていたら、あらためて続けようと思った。
　お袋さんが、玄関の外まで送ってくれた。
　俺は、お袋さんに、
　「そうだ、もう一つあいつから、お母さんに伝えて欲しいって言われてたことがありました。
　『もし俺が、お袋よりも先に死んじゃったら、お袋に言って欲しいんだ。
　どこかで、何かを間違えてしまった。お袋が、いつも「ワイシャツのボタンが一つ違っているよ」と言われたよね。どうも、人生のボタンも掛け違っちゃったよ。こめんね。親不孝な俺を、許して欲しい』って」

お袋さんが急に立ち止まり、両手で顔を覆(おお)った。
小さな嗚咽(おえつ)が聞えて来た。
俺と彼女は、頭を深々(ふかぶか)と下げ、その場を離れた。
冗談のように始めてしまった『遺書屋』だが、ちょっぴり使命みたいなものを感じていた。
　　・・・・・・・・・・
「何、神妙な顔をしているの？　似合わないわよ、貴方にそんな顔は。
・・・初めての旅行じゃない。さぁ、行きましょう」
「ま、待ってくれ～っ。どこへ行くんだよ～っ」
「このまま、真っ直ぐ行けば、どこかへ行けるでしょ～～～っ」
そうか。真っ直ぐに生きれば、道が開けるか。
一泊目はバスの中。もう一泊は、どこだろう？
浮き浮きするな。
生きているって、本当に良いよな。
『遺書屋』をやらなかったら、この時間は持てなかった。
「お、お～いっ。ま、待ってくれ～っ」

●六通目・・・虐め(いじめ)－１

「た、大変だ～っ！
だ、誰かに、お、俺が作ったホームページを、改ざんされた～っ！
でも、綺麗になっちゃった？？？」
「ごめん、ちょっとだけ、直しちゃった」
「え、えぇ、君だったの？
す、すっごく良いよ。
でも、ちょっと、女の子っぽいけど。
それに、『良くある質問』が、分かりやすいよ。これで、『遺書』を送ってくれる人が増えるかも知れないね」
「でも、『遺書』が増え過ぎて、対応できなくなるかもよ」
「『遺書』を書いたからって、すぐに死ぬ訳じゃなから、大丈夫だよ」
「それもそうね」
・・・・・・・・・・
自分では気に入っていたが、少し暗かったホームページが生まれ変わった。
昔、アメリカのホームコメディーに、奥さんが魔女だって言うのがあったな。
『ごく普通の二人は、ごく普通の恋をし、ごく普通の結婚をしました。でも、ただ一つ違っていたのは、奥様は魔女だったのです』で始まるんだよな。奥さんの名前は･･･、忘れた。でも、鼻をピクピク動かして魔法を掛けてたよな。
魔法使いの奥さんと彼女が、ダブって見えた。
彼女が書いてくれた『良くある質問』は、
Ｑ．『遺書屋』ってなんですか？
Ａ．もし、今、あなたが突然に死んでしまったら、何が残っていますか？
　その気持ちを、受け取りたいだけです。
Ｑ．インターネットで送った場合に、パスワードは、どうすれば良いですか？
Ａ．パスワードを送っていただかなければ、『遺書』を開くことができません。あなたが亡くなった時に、なんらかの方法でお知らせください。その方法は、友人に依頼したり、親や兄弟に頼んでください。方法は、私には決められません。
Ｑ．支払いは？
Ａ．あなたが、払える範囲で良いのです。もちろん、あなたの『遺書』を開く時に、手元に届いていれば良いので、『遺書』を送っただけでは払う必要は、ありません。
でも、いただいたお金で、どこまで出来るか分かりませんが、一生懸命に、あなたの願いを叶(かな)えます。
ただし、法律に触(ふ)れる行為は、お受け出来ません。
このことだけは、ご理解してくださるようお願いします。
Ｑ．願いを叶えてくれたと言う証(あかし)は？
Ａ．ありません。

残念ながら、あなたは、もうこの世には存在しないのです。だから、お知らせする方法がないのです。
Ｑ．メールの場合には、パスワードと言う鍵が必要なので、見られていない、と思えるのですが、手紙の場合が心配です。
Ａ．その通りです。メールの場合には、添付した『遺書』にパスワードを付ければ、私達は読めません。
でも、手紙の場合には、心配ですよね。心配でしたら、『返却』の手紙を送ってください。お返しします。その時に読んでいないことが分かると思います。
Ｑ．何度、書き直しても良いのですか？
Ａ．もちろんです。
毎日、直していただいても良いです。私達は、最後に届いた『遺書』を『遺書』とします。それ以前の『遺書』は廃棄します。
ただし、インターネットの場合には、同じメールアドレスで。手紙の場合には、同じ名前にしてください。それ以外に、同一人と判断出来ないためです。
Ｑ．実績は、あるのですか？
Ａ．私達の親からの『遺書』から始めました。そして、私達も『遺書』を書きました。それが実績です。
あなたが、最初の仕事になるかも知れませんね。
Ｑ．私達とは、何人でやっているのですか？
Ａ．それは答えられません。あなたに調査のお願いをするかも知れませんよ。
Ｑ．メールや手紙で、質問しても良いでしょうか？
Ａ．一度だけ、一つのことだけは良いです。
ここは、あなたの人生相談の場所ではありません。それに、あなたの悩みに答えられるほど、私達は人生経験を持っていません。
二度目以降は、『遺書』だけを受け取り、メールの内容や『遺書』にそえられた手紙は『返却／廃棄』以外は読みませんので、ご理解くださるようお願いします。
Ｑ．信じて良いのでしょうか？
Ａ．それは、私達ではなく、あなた自身が判断してください。
メールアドレスもフリーメールでかまいません。私達は、新興宗教でも詐欺(さぎ)を働こうと思って始めた訳でもありません。苦しんでいるあなたが、少しでも楽になれれば、と思って始めました。
もし、自殺を考えているのであれば、その気持ちを書いて送ってください。書くことによって、気持ちが変わるかも知れません。
自分の人生。まだまだ先があります。
それに、生まれた以上、いつかは死んでしまうのです。自分から死ぬことはないと思いますよ。
そのためにも、一度、自分の気持ち、そう、今、死んでしまったら、と思って書いて送ってみ

てはどうですか？
　私達が信じられると思えたら。
　それに、
　『書きたくなったら、この気持ちを送れるところがある』
と思えていただいただけで、私達も『遺書屋』を始めて良かった、と思えるからです。
　　・・・・・・・・・・
　そうだよな。これくらい書いてなかったら、誰も信じて送ってこないよな。
　　◆
　ホームページが新しくなったら、アッと言う間に、二十三通も届いてしまった。
　四通の手紙と、十九通のメール。
　分かっていることだが、届いたからと言って、お金がすぐに入る訳じゃない。
　やっぱり、『遺書屋』じゃ、食っていけないな。
　アルバイトじゃなく正社員を目指さないと、結婚は出来そうもないよな。彼女も仕事をしているので、なんとかオフィス兼寝床が確保できているが、彼女に「もう、仕事しなくて良いぞ！俺が食わせてやる！」って、早く言いたいな。
　先のことを考えても仕方がないか。でも、一人で生活していた、あの頃と比べると、天国と地獄の差だ。
　でも、両方とも、行ったことないけど･･･。
　　・・・・・・・・・・
　そう言えば、この前、初めての二泊三日の旅行は、二泊とも夜行バスの中だった。
　まだ、彼女とは手を繋(つな)いだだけだ。でも、握手から、手を繋いだだけ進歩したかな。
　まさか、真っ直ぐ行った先に茶碗を作る場所があるなんて、事前にインターネットで調べたけど書いていなかったのにな。
　でも、親切な人だったよな。初対面なのに･･･。
　　・・・・・・・・・・
　「そうか、そうか、あの夫婦のところに行って来たのか。あの夫婦には、風邪を引いた時に、助けてもらったんだよ。
　あの夫婦がいなかったら、俺は今頃、死んでいただろう。
　風邪くらいで、死ぬとは思わなかったが、起き上がる気力もなかったよ。
　そんな話しは別として、俺は一人身だから、もてなしは出来ないが、急ぐ旅ではないのなら上がってってくれ」
と言われて、上がり込んでしまった。
　お茶を出され、
　「お前達は、轆轤(ろくろ)を廻したことはあるか？」と聞かれ、彼女と目を合わせ、首を振った。
　「ないか。そうか、そうか、そうだろうな」と言って、嬉(うれ)しそうに、
　「やってみるか？」と言われた。
　すぐに彼女は、

「やっても良いんですか？　お忙しいんじゃないですか？」
と、目を輝かせて言うと、
「あんたみたいな美人に廻してもらえれば、轆轤も喜ぶだろう。
旦那さんも一緒にどうだね」
と言われ、二人で顔を見合わせ、首を振ると、
「えぇっ、夫婦じゃないのか。
まぁ良いか。
古い轆轤が、もう一つあるから、あんたは、それを使って作ってみな」
と言われ、生まれて始めての轆轤を廻した。
力の加減が分からず、何度も潰(つぶ)れるばかりだった。
「あんたには、才能がある。でも、彼氏は無理だな。
ねぇ、ちゃんと勉強してみないか？
あんただったら、二、三年もすれば、それなりになると思う。
･･･あんた、まだ、時間がかかるから、そこの土で遊んでて良いよ」
と言われてしまった。
俺は粘土遊びをすることにした。
好きな犬を作ってみようとしたが、出来たのは、犬でも猫でも猪でもない不思議な生き物だった。
見られる前に、あわてて潰した。
時間を持てあまし、蛇のように、長々と延ばしていた。
彼女は、着々と湯飲みの形に近づいていった。
それを見て、長く延びたソバのようになっていた粘土を、湯飲みの形に似せて蛇のトグロのように巻いてみた。
太いところと細いところが、微妙にかみ合い、なんだか、湯飲みの形になっていった。巻き終わり、底も、あまった蛇の粘土で作ってみた。
少しだけ残っていた粘土で、ハートを作り、トグロの湯飲みに貼り付け、今日の日付、時間を書き、ここの場所も書いた。もちろん、二人のイニシャルも。
同時に、彼女の作品も出来上がった。お互いに顔を見合わせ、同時に、
「凄いじゃん」
と言ってしまった。つられて、その人も
「凄いじゃん、二人とも」
と言った。その人は、これから、窯(かま)に火を入れるので、二人の作品も焼いて送ってくれると言ってくれた。
それが、机の上に飾(かざ)ってある。
彼女の初作品だ。
届いた日に、
「これは貴方の。これは私の」
と言って渡された湯飲みだ。

俺が、湯飲みに書いたのと同じことが、この湯飲みの底に書かれていた。
日付、時間、場所と二人のイニシャルが同じ順番に。

◆

●六通目・・・虐め(いじめ)－２

　そんなある日、新たなメールが届いた。
　『母さんが、姉さんの遺品を整理していたら、「変なメモがあるんだけど」と言って俺に持って来た。
　メモには、
　「これを読んでいるってことは、私は死んだのですね。お母さんよりも早く死ぬなんて、ごめんなさい。今の世の中、なんで死んじゃうか分からないので、『遺書』を書きました。
　私の携帯電話の未送信ボックスに残っているメールを送ってください。きっと、返信があるはずです」
と書いてあった。姉さんの頼みだからこれから送るが、お前は誰なんだ！　姉さんの『遺書』ってなんだ！』
　読み終わった直後に、その姉さんからのメールが届いた。
　そこには、「gomen」と書かれているだけだった。
　『遺書』として預かったワープロ文書のパスワードだ。
　彼女が、仕事から帰ってきたら、一緒に読もう。
　　◇
　「ただいま～っ。
　･･･あぁ、その顔は、メールが届いたのね。誰が亡くなったの？
　えぇ、あの娘さんが･･･
　なんで？･･･
　そうよね、まだ分からないわよね。
　お待ちどう様。一緒に読んでみましょう」
　　･･････････
　娘さんから送られていた『遺書』には、お母さんと弟と、そして私達への三通のワープロ文書が添付されていた。
　何度も、何度も、
　「前の『遺書』は破棄してください」
と書かれたメールが届いていた。
　これが最後の『遺書』になってしまった。
　そして、私達への『遺書』を二人で読み始めた。
　『これを読んでいるってことは、私は死んだのですね。
　そして、パスワードが届いてしまった。
　死んでしまった私の話しを、ちゃんと聞いてくれますか？』
　「それは、私達の仕事ですから、安心してください」
　『弟への「遺書」のパスワードは、時々、私が弟を呼ぶ時の言葉です。
　母のパスワードは、優しい母が誰もいない時に、いつも私に言ってくれた言葉です。平仮名にすると八文字です。母は、きっと思い出してくれると思います。

これが一つ目のお願いです』
「思い出さなかったら、どうすんだ。親父さんには『遺書』はないのか！」
「何を興奮しているの？　次を読んでみましょうか」
『ここからが、「遺書屋」さんへの、本当のお願いです。
私は中学時代、すごく悪い人間でした。悪魔たったのかも知れません。
母に対しても、亡くなってしまった父に対しても。
でも、それ以上に、同級生だった二人には、悪いことをしてしまったと思っています。
なんで、そんな酷(ひど)いことをしてしまったのかと。
二人を傷つけ、いえ、心に深い、深い傷をつけてしまったことは、たしかなのです。
そこで、お願いですが、母から渡されるお金の半分は、『遺書屋』さんに、残りの半分は二人に渡して欲しいのです。
そんなに多くはないですが、私が、今、二人に出来るのは、それくらいしかないからです。
そして、
「ごめんなさい」
と言っていたと伝えてください。
こんなことは、母や弟には頼めません。貴方しか頼れないないのです。
何度も、自分でやろうと思いました。
でも、この手紙が読まれているってことは、もう、自分では出来なくなってしまいました。
ひょっとすると、私が死んだのは、そんな悪いことをした報(むく)いなのかも知れません。私が死んだからと言って、自分のやってしまったことが帳消しになるとは思っていません。私は死んでから、地獄に落ちても仕方がないと思っています。
何度も、何度も、『遺書』を書き直してすみませんでした。
最初は、きれいごとしか書けませんでした。
何度も、何度も書き直すうちに、やっと自分の心が書けるようになりました。
これが最後の『遺書』になってしまいましたが、もう、書き直さなくても良いかな、と思っていました。
これでやっと、ホッとしました。
ありがとうございました。
でも、この手紙が一生読まれなければ･･･
もう一度、この「遺書」と同じように、自分の人生を書き直せれば良いな、と思いました。
もう一度･･･
母は、きっと弟に頼んだのではないかと思います。弟が、返信メールを首を長くして待っていると思います。
よろしくお願いいたします。
最後に、二人の同級生の名前と住所を書きました。』
　　･････････
「か、完全に、俺達のことを信用しきっている」

「そうね。でも、苦しんでいたのね。二人を虐めたことを」
「どんな虐めをしたんだろう？」
「私達には、関係ないでしょう。早く、弟さんにメールしてあげないと」
「どうやって書けば、良いかな？」
「貴方が感じたままを書けば良いのよ」
◇
『お姉さんが亡くなり、お悔(おく)やみ申し上げます。
お姉さんから、お母さんと貴方への『遺書』を預かっていますので、添付しました。
パスワードは、
「弟のパスワードは、時々、私が弟を呼ぶ時の言葉です。
母のパスワードは、優しい母が誰もいない時に、いつも私に言ってくれた言葉です。平仮名にすると八文字です」
と書かれていましたので、お送りします。
でも、ワープロ文書が遅れないので、パソコンのメールアドレスを教えていただけますか？』と、携帯電話にメールを送った。
弟さんは、ずっと待っていたのだろう。すぐに返信が来た。
『こんな、訳の分からないメールをよこしやがって、すぐに来い！　きっと、俺達の住所も知らないのだろうから書いておく！　俺の携帯電話の番号も書いたから、今すぐに電話をよこせ！
分かったか！　それに、パソコンのメールアドレスは、これだ！』
「そ、相当に怒っているみたいだけど」
「まずは、パソコンにワープロ文書を送ってあげて」
「分かった。送るよ」
‥‥‥‥‥‥
「彼も、突然にお姉さんが亡くなり、急に変なメールを送らなきゃいけないのだから、相当に混乱していると思うわ。
さて、パソコンのメールを受け取って、『遺書』を開いている頃だから、電話してみましょうか。
貴方が電話したら、こじれそうだから、私が電話するわ。貴方の携帯電話を貸してね。私の携帯電話の番号を知らせる訳にはいかないでしょ」
「ど、どうぞ、使ってください。お願いします」
‥‥‥‥‥‥
「弟さんですね。私、『遺書屋』の仕事をしている者です」
「『遺書屋』！　なんだ、それは！」
「死ぬ前に、『遺書』を預かり、死んだ後に、その人がしたかったことを叶えてあげる仕事です」
「そんな仕事なんか、聞いたたことがない！」
「でも、貴方と貴方のお母さんの『遺書』をお姉さんから預かり、お送りしました」
「ふざけるな！　何度、パスワードを打ち込んでも開けないじゃないか！　嘘ばっかり言い

やがって、お前達は新手(あらて)の詐欺集団か！」
「お姉さんは、『時々、私が弟を呼ぶ時の言葉です』と言っているのですよ、『時々』と」
「･･･そうか！　ちょっと待ってろ！」
･･････････
「開けたよ。なんで、お前達が知っているんだ」
「貴方がお姉さんになんて呼ばれていたかなんて、私は知りません。貴方しか知らない言葉じゃないのですか？」
「そうだが･･･」
「それでは、お母さんへの『遺書』も開いてあげていただけますか？　そして、私達のことが理解できたら、電話していただけますか？」
「分かった。少し待っててくれないか･･･お願いします」
「お待ちしています」
◇
『電話ですよ～っ！　無視しますか～っ！　それともダーしますか～っ！』
けたたましい着信音が鳴った。
彼女は、躊躇(ちゅうちょ)することなく、俺の携帯電話をつかんで話し出した。
「はい、『遺書屋』です」
「遅くなって済みません。母さんがやっとパスワードを思い出してくれました。
そして泣いていました。
何故、姉さんは貴女に『遺書』を送ったのか、私には分かりません。
でも、姉さんが俺に残した『遺書』の中に、貴女へ送るお金の隠し場所が書いてありました。こればかりは、死んでしまった姉には出来ないですから･･･。
明日、貴女の口座に振り込んでおきます。姉さんが貴女に何を頼んだかは知りたいとは思いません。姉さんは、姉さんで苦しんでいたことがあったのだと思います。
親父が死んで、母さんが俺達を育ててくれて･･･
そして今は、姉さんが生活を支えてくれていました。
姉さんが亡くなり、今度は俺が母さんをみます。
死んだ姉さんみたいにいかないかも知れませんが･･･」
「ところで、お姉さんは、どうして亡くなってしまったの？」
「それが、通り魔だったんです･･･
胸を刺されて死んでいました。
姉さんは、いつもテレビを見ながら『怖い世の中になっちゃったね。本当に、いつ死んじゃうか分からないわね』と言っていました。そんな姉さんが、本当に死んじゃうなんて･･･。
ストーカーに狙(ねら)われている、と言う話しは聞いたこともありません。姉さんは明るい性格なので、人に恨(うら)まれることはなかったと思います。
･･･まだ、彼氏もいなかったと思います。俺達家族のために、そんな暇(ひま)もなかったのかも知れません･･･
･･･姉さんの中学時代ですか？

俺、まだ小さくて覚えていません。
すみません、答えられなくて･･･
母さんが落ち着いたら、聞いてみます」

◇

「さて、お金が振り込まれたら、半分を同級生の女の子二人に届けなきゃね」
「そうですね。それが終われば、終わりですね」
「そうだと良いのだけど･･･」

◆

●六通目・・・虐め(いじめ)－３

　彼女と二人で、同級生の一人を訪ねた。
　そこは、小さな町工場だった。両親と娘さんが働いていた。娘さんの顔には、インキがついていた。
　娘さんに声を掛けた。
　「同級生だった、あの人を覚えていますか？
　先日、通り魔に遭(あ)って亡くなってしまったんです。
　『遺書』が見つかって、貴女に渡して欲しいって、これを預かって来たのです」
と言って、お金だけが入っている封筒を渡した。
　「そうだ、『遺書』には『ごめんなさい』と伝えて欲しい、と書きそえてありました」
　急に、
　「あんたら、誰ね。娘に何言いに来たんね。何、あん娘(こ)が死んだって。天罰だね、こんなの受けとれん。これ持って、さっさと帰(けえ)れ！」
　「母さん。この人達は、届けに来てくれただけの人なのよ。そんな言い方やめて！」
　「あんな奴のお金、お前は受け取るんか！」
　「えぇ、受け取ります。彼女の心ですから。それに、今は少しでもお金があった方が･･･」
　「何言ってんだ、この子は！　あんだけ、い･･･
　分かったから、帰ってくれ、お願げえだから、帰ってくれ」
　「分かりました。帰ります。帰りますから、そんなに邪険にしないでください。
　失礼します」
　　◇
　「相当に、虐められていたんですね。お母さんの態度から分かりましたよ」
　「そうかしら？　それに、お父さんは、結局、出て来ませんでしたね」
　「えぇ、男なんて弱い動物ですから･･･。
　何か変ですか？」
　「さぁ？
　もう一人の娘さんに会いに行きましょう。そうすれば、はっきりするのじゃないかしら」
　　◇
　手紙に書かれていた住所の家は取り壊され、広い空き地になっていた。
　隣の家で聞いてみることにした。でも、なんて古い家なんだ。
　　･････････
　「裕福な家庭だったのにね。お母さんも娘さんも、いつも綺麗な服を着ていたね。私は、あんな服を着たくもないけどね。それが、毎日のように取立屋って言うのかね、恐(お)っかないお兄ちゃん達が来ていたよね。そしたら、いつの間にか引っ越ししちゃってね。
　どこに行ったかは、わたしゃ知らないね」
と奥さんが答えた。
　奥にいた旦那さんは、キョロキョロして落ち着のないそぶりをしていた。

それにしても、どこへ行っちゃったんだろう。
　　・・・・・・・・・・
「旦那さんが来るから、ちょっと待っていましょう」
「えぇっ、奥にいた旦那さんですか？」
「ほら、来た」
　　・・・・・・・・・・
「女房に聞かれたら、えらいこっちゃになっちまうんでよ。
娘さんは、隣町のキャバレーに勤めてたよ。町内会の寄り合いで、たま～に、その店に行ってたもんで知ってんだよ。
女房には言わんでくださいよ。
それじゃ、わしは、タバコを買って帰りますんで」
　　・・・・・・・・・・
「ほ、本当だ。来ちゃった」
「顔に、『話したい』って書いてあったの見えなかった？」
「か、書いてあったんですか？」
「それはそうと、どうする？」
「行ってみましょう」
「仕事だから？」
「そうですね。ちゃんと、最後までやらなきゃ！」
　　◇
「結局、辞めちゃっていましたね」
「それも、急に。給料も取りに来なかった。
変じゃない？　何か臭(にお)わない？」
「き、昨日、ちゃんと風呂に入りましたよ！」
「そうじゃなくって、おかしいと思わない？」
「何が？」
「三人の同級生がいて、一人は通り魔、一人は失踪（しっそう）」
「それが？
そんな世の中なんじゃないですか、今は？」
「ねぇ、同級生を探して、話しを聞いて見たいのだけど」
「何を聞くんですか？」
「もちろん、中学時代の話しじゃない」
「聞いてどうするんですか？」
「聞いてから考えましょう」
「どうやって探すんですか？」
「まずは、中学校に行ってみましょう。
弟さんが住所を送ってくれたから、すぐに探せそうね」

「まずは行動だね。行ってみましょう」
◇
「まさか、同級生のお父さんが、校長先生とは思わなかった」
「そうね、偶然ってあるのね。
それはそうと、校長先生から、面白い話しを聞いたわね」
「そうかな？」
‥‥‥‥‥‥
「綺麗な中学校ね」
「そうですね。最近は、荒れた中学校が多いですからね」
「まずは、校長先生に話してみましょう」
「えぇっ、校長先生に最初に会うんですか？」
「もちろんじゃない。校長先生だったら話しが早いと思うのよ」
「それは、そうですけど･･･。
会ってもらえますかね？」
「聞いてみなきゃ、私にも分からないわ。
あっ、あの人に聞いてみよう。
すみません。校長先生、おられますか？」
「私が校長ですが、あなた達は？」
「失礼しました。
先日、通り魔に遭って亡くなった娘さんのお母さんに、中学生だった頃の話しを聞いて来て欲しい、と頼まれたのです」
「お身内の方？」
「はい」
「ここで立ち話しもなんですから、校長室までご足労願えますか？」
「お忙しいところ、申し訳ありません」
と、なんだかトントン拍子で、校長先生と話しが出来ることになってしまった。
彼女は堂々と、校長先生の後から着いて行った。
‥‥‥‥‥‥
「まぁ、お掛けください。
その頃のことは、はっきりと覚えてますよ。
私の娘は、この学校の卒業生なんですよ。
その時、私は、別の中学校で教鞭(きょうべん)をとっていました。虐めが低年齢化していましてね。私の中学校でも、虐めが蔓延(まんえん)していたので、娘に学校でのことを聞いてみたのですよ。でも、娘にしてみれば、問い詰められてるように聞えたのでしょう。私は、普通に優しく聞いたつもりだったのですがね。
娘が、泣く泣く話してくれました。
お身内の人に話して良いか分かりませんが、その時のことを、そのままお話ししますので、彼女のお母さんには、良しなにお話ししてください。お願いします。

娘も通り魔に遭った子に虐められていたそうです。相当に、酷(ひど)い子だったようです。学校、今では、この学校ですが、先生に言いに行く、と言ったら、急に娘が、『それだけは、やめて。明日から学校に行けなくなる』って言うのです。私も若かったのですね、それでも言いに行くと言ったら、娘が『もし、学校に行って話したら、私は学校に行かない』って言い出したのですよ。

それには、まいってしまいました。

学校に話さなければ、今と同じように虐められる。

でも、話したら娘は学校に行かないと言う。

ジレンマに陥(おちい)りました。

結局、学校には言いに行かない。ただし、自分がどうしようもなくなったら私に話す、と言うことにしました。

それからも、元気に学校へ行き、無事に卒業しました。

その時は、娘に負けたような気がしましたが、今から思えば、最良の選択だったのかも知れません。

･･･通り魔に遭った子供以外でですか？

･･･そうだ。話しが決まり、娘も納得したので、落ち着いて話してくれました。

『私以上に虐められている子がいるの』って。たしか･･･、町工場の娘さんだったと思いますが、違うかも知れません。娘のことで頭が一杯でしたから、話しを半分しか聞いていなかったような気がします。

それに、もう一人、名前を聞いたような気もするのですが、忘れてしまいました」

･･････････

「私達が出来るのは、ここまでね」

「ま、さか、また頼むんですか･･･、刑事さんに」

「民間人が出来るのは、ここまで。そのために警察があるのよ」

「で、でも、個人的に使っているような気がして･･･」

「貴方の思い過ごしよ、思い過ごし」

◆

「また、俺を呼び出しやがって、ワシはお前達の『忠犬ハチ公』じゃないんだからな。
それで、今度は、なんだ？」
「実は、同級生三人のうちの二人が、通り魔と行方不明なの。変でしょう？」
「今は、そんな世の中なんだよ」
「それに虐めを加えても？」
「･･･ちゃんと話してみな」
そして、刑事さんに、今までの経緯を話した。
「私には、通り魔と行方不明が関係しているとしか思えないのです。
私の推理、聞いてくださる？」
･･････････
「分かった。調べりゃ良いんだろう、調べりゃ。
しかし、嬢ちゃんも良くそんなことを考えつくな。
警察じゃ、通り魔は調査しても、行方不明は多過ぎて、ちゃんと調べていないだろうからな。
でも、本当に良くワシを、こき使いやがる。こんなのが上司でなくて良かったよ。
じゃあな」
と言って、出て行った。
「でも、私の推理が当たっていたら、悲しいわね」
「そうですね。貴女には悪いが、外れて欲しい気がする」
「そうね。私も外れて欲しいわ」
◆
数日して、刑事さんがやってきた。
「嬢ちゃんの推理通り、町工場の娘さんが犯人だったよ」
「そうでしたか」
「か、悲しいけど、当たっちゃいましたね」
「でも、嬢ちゃんの推理と、ちょっと違ってた」
「違ったのですか？　私の推理。
詳しく教えていただけますか？」
「あぁ、分かったよ。
それじゃあ、ひと眠りするか。
ここからは、得意の寝言だからな。グーグーグー。
嬢ちゃんが言った通り、町工場の娘さんを本当に虐めていたのは、通り魔に遭った彼女が主犯じゃなく、失踪した金持ちの娘だった。
流石(さすが)、嬢ちゃんだな。
町工場の娘さんを虐め抜いていたのは、表面上は通り魔に遭った女の子だったが、裏では金持ちの女の子が、陰険な虐めをしていた。
その金持ちの娘も、一生、金持ちでいると思っていたんだろうな。

それが、取立屋に追われ、場末のキャバレーに勤めるとは、思ってもいなかったんだろう。
その姿を見られちまったんだよ、通り魔に遭った女の子にな。
勝手に惨(みじ)めな思いになってしまったんだろう。
貧乏人には、金持ちの考えは分からねぇよ。見栄(みえ)ってやつなんだろうが、ワシなんか、何年か前に、どっかに落としちまったがな。いや、最初から持っていなかったかも？
悪りい、悪りい、脱線しちまった。
それで、通り魔に見せかけて殺しちまった。
単なる、見栄だけで殺しちまうなんて･･･。
でも、どんな姿を見られちまったんだろうな。今となっちゃ、想像するしかないがな。
それを、町工場の娘さんが調べて、事実を探り当てちまった。
町工場の娘さんは、通り魔に遭った女の子を恨んでいなかった、と言ってるんだ。
虐められてはいたが、逆に感謝していると言っていたよ。
あの人のお陰で、私は他の虐めから守られていた、と。
相当な悪餓鬼(わるがき)だったみたいだな、通り魔に遭った女の子は。
でも、そんな奴に虐められているから、他の人からは虐められなかったそうだ。
だが、一人をのぞいてね。
金持ちの女の子の虐めは、陰険だったそうだ。
誰にも知られず、町工場の娘さんを虐め抜いていたようだ。
それも、おやじさんに頼んで、町工場を資金難に追い込んだり、やっと親が工面(くめん)した給食費を盗んだり、ひどいもんだよ。中学生だぞ、中学生。普通、そこまでやるか？！
だから、自分の恨みと、自分を守ってくれた人の敵(かたき)を打つために殺してしまった。
死体は、そばにあった今は使っていない古井戸に投げ込んだそうだ。供述通り、遺体は出てきたよ。
町工場のお袋さんも、薄々は感じてたようだ。
娘が人を殺してしまったんじゃないか、ってことをね。
ワシは、虐めっ子の方だったから、虐められっ子の気持ちを考えたこともなかったが、初めて分かったよ。虐められっ子の気持ちが、少しだけだがな。
あ～ぁ、良く眠った。
じゃあな」
刑事さんは、事件と自分の気持ちを話したいだけ話して、帰って行った。
･･････････
俺も、虐められっ子だったな。でも、あいつのお陰で、あれくらいで済んでいたのかも知れない。
あのデブっちょがいてくれたお陰で･･･。
･･････････
「何、瞑想(めいそう)に耽(ふけ)っているの？！
まだ、私達の仕事は終わっていないのよ」

「お、終わっていないって、終わったじゃないですか」
「ここに、彼女に渡すお金が残っているじゃない」
「でも、彼女は死んじゃったじゃないですか」
「そうすると、このお金は私達のものなの？」
「ち、違うけど、どうするんですか？」
「決まっているじゃない。親御さんに渡すのよ。
『ごねんなさい』
の言葉と一緒にね。
さぁ行くわよ」
「ま、待ってくださいよ。行きますよ、行きますよ、俺も～っ」
◇
あのお父さんは、すべてを知っていたような気がする。
でも、何もできなかった自分に、腹立たしかったんじゃないだろうか。
きっと、娘の代わりに、娘を虐めていた者を殺したかった、と思っていたんじゃないだろうか。
『遺書屋』ってなんだろう。
こんな事件が起き、それを解決するために始めた訳じゃない。
ただ俺は、あのお婆さんの話しを、もう少し聞いてあげたかっただけで始めたのに･･･。

●七通目・・・「死」の条件ー１

　刑事さんに教えてもらったお袋さんを訪ねた。
　すでに離婚し、場末の飲み屋の下働きをしていた。
　まだ、それほどの年ではないはずなのに、老け込んでいた。
　娘さんの死は、警察から知らせがあったそうだ。満足に葬式もあげられず、納骨もできずに、まだお骨(こつ)は家に置かれている、と言っていた。
　預かっていたお金を手渡したすと、お袋さんは、押し頂くように受け取った。
　それ以上、言葉を掛けることが出来なかった。
　帰宅して、彼女が
　「終わったね。でも、悲しいね」
と言った。
　「これで良かったのかな？」
　「『遺書屋』としては、ここまでが限界だと思うけど」
　「そうだよね。『遺書』を送ってくれた娘さんからの依頼は、叶えてあげられたよね。
　ちょっと悲しいけど、弟さんからも、お礼のメールが来たし。それに、弟さんも『遺書』を書いてみる、って言ってたよな」
　　◆
　コンビニのアルバイトから帰ってくると、またまた新たなメールが届いていた。メールには、
　「息子は死んでいないんですが、息子から
　『まだ、死なないと思うんだが、俺、『遺書』を預けてあるんだ。もちろん、財産なんかないけど、俺が死んだら、ここにメールして欲しいんだ』
と、言ったんですよ。
　息子には、何があっても、ちゃんとメールしてあげるから安心しろ、と答えました。
　実は、息子は『若年性認知症』なのです。もうすぐ、自分の記憶が消えてしまうのを知っているのです。医者にも聞きました。何度も、何度も。でも、今の医学では治(なお)せないそうです。後、数ヶ月で息子の記憶は完全に消えてしまうだろう、と先生が言いました。
　今では、『遺書』を書いたことも、時々忘れているようです。
　パスワードを、息子から聞きました。たから、息子の遺書を読んでください。肉体的には死んではいませんが、でも、生きている証(あかし)の記憶がなくなって来ているのです。
　もう息子は、死んだも同然なんです。
　息子から聞いたパスワードを、お送りします」
　　・・・・・・・・・・
　「ね、ねぇ、僕達にとって･･･、いや、『遺書屋』にとっての『死』ってなんだろう？」
　「何を言っているの。
　『死』は、『死』じゃない。皆に見守られ、火葬場で灰になり、お墓に入ること、それが『死』じゃないの。
　いけない、誤解しないでね、貴方は単純だから、火葬場で骨にならなきゃいけないなんて思わ

ないでね。一般的な『死』について言ったのだからね。
　貴方は違うけど、どうも最近の世の中って、あげ足を取る人が多くて。それに、それが流行みたいに思っている人も多くて、会話するのも大変なのよ。特に、私の仕事先なんだけどね」
　「君の仕事先？
　まぁ、それは今度、聞くとして、それじゃ、今回の場合は、『死』じゃないよね」
　「当たり前でしょう。だって、本人は生きているのだから、『遺書』を読むことは出来ないわ」
　「そうだね。お父さんにメールしておくよ、息子さんは『生きている』って」
　「息子さんのためにも、そうしてあげて」
　　◆
　お父さんに、『遺書屋』としての仕事についてメールした。
　そして、返信があった。
　「そうですね、息子は生きているんですよね。死んでもいないのに、息子の『遺書』を読んでもらおうなんて、変なことを言ってしまいました。申し訳ありません。
　でも、貴方を信用出来るような気がしました。それに、息子が信じたものを、私が信じられなくなったら終わりですよね。
　そこで、私も『遺書』を書きましたので、お送りします。
　実は、私は末期ガンに侵(おか)され、後、一ヶ月も生きられない、と医者から宣告を受けました。
　これから入院の手続きに行くことになっています。妻は、息子が生まれた時に亡くなり、身寄りもいないので、私が死んだら、貴方に知らせるように、病院の人に頼んでおきました。
　ご迷惑とは思いますが、よろしくお願いいたします。

　私が死んだら、息子がどうなってしまうのか心配ですが、その頃には息子の記憶も消えているでしょうから、悲しみもわかないと思います。
　でも、息子の『遺書』を読んでみたかった。
　あの子が、何を書き残したのか、記憶が消えていく中で･･･」
　　･････････
　「そ、そうか、だから息子さんが、まだ生きているのにパスワードを送って来たんだ。
　つらいだろうな。
　悲しいだろうな。
　それに、自分自身もガンに侵されてしまうなんて」
　「息子さんに会いに、病院に行ってみましょうか？
　会ったからと言って、何を話して良いか分からないのだけど･･･」
　「そ、そうだよ。記憶がある内に、会っておきましょう」
　　◆
　「初めまして、『遺書屋』です」

「『遺書屋』？」
「貴方が送ってくれた『遺書』は、大切に保管してあります」
「『遺書』？
私が書いて、貴方達に送ったのでしょうか？」
「えぇ、そうですよ」
「そうですか、私が送ったのですか。
どうも、記憶が消えてしまうもので･･･。
私が今まで、どうやって生きてきたのかも忘れてしまいました。
親は、ちゃんといるのに、誰が親なのかも分からなくなってしまいました。
すべての人が、初めて会う人のようで･･･。
親は、きっと悲しんでいるでしょうね」
「でも、貴方の笑顔を見れば、きっと元気になりますよ」
「そうだと思います。たから、誰に会っても、笑顔だけは絶(た)やさないようにしています。それが、私が出来る、ただ一つの親孝行ですから･･･。
それにしても、私は『遺書』に、何を書いたのでしょう？
もう、読んでみましたか？」
「いえ、『遺書屋』ですから、送って来てくれた人が亡くなるまで、読むことはしません」
「そうですか。記憶が消えても、生き続けている間は読まれないのですね。
ところで、私が返して欲しい、と言ったら、返して頂けるのですか？」
「もちろんです。
貴方の『遺書』ですから。
どうします。お返ししましょうか？」
「いいえ、預かっていてください。
私が死んだら、貴方にお知らせするように病院の人に頼んでおきます。
いや、ちょっと待ってください。
貴方達が帰ったら、忘れているかも知れないので、今、病院の人に頼んでみます」
と言って、看護婦さんを呼び、俺は携帯の電話番号とパソコンのメールアドレスを教えた。
「変ですね、自分でも忘れてしまった『遺書』なんて。
それを読んだ貴方達は、どうするのですか？」
「失礼ですが、それは、貴方が亡くなって、貴方の『遺書』を読んでみなければ答えようがありません」
「そうでしたね。
ところで、後ろにいる方は、貴方の恋人ですか？」
「い、いえ、パートナーです」
小声で、
「恋人だと嬉しいんですがね」
と言ったら、同じように小声で、
「私は、恋人を作ることは出来ませんが、女の人は皆、私の恋人だと思うようにしています。

その方が楽しいですからね」
と答え、普通の声で、
「もっと話しをしていたいのですが、これから診察が待っているので。
診察しても、良くならないのは分かっているのですがね」
「それでは、私達は帰ります。
突然に来て、申し訳ありませんでした。
ただ、貴方の『遺書』を、どうすれば良いか聞いておきたかったもので」
「わざわざ、ありがとうございます。
『遺書』は、保管しておいてください。私が死ぬまで」
「分かりました。大切に保管しておきます。
お大事に」
◇
「ねぇ、さっき小声で何を話していたの？」
「こ、小声で･･･。わ、忘れました」
「貴方も認知症？」
「う、うつったのかも、し、知れません」
「まぁ良いわ。『遺書』は大切に保管しておきましょう」
「はい！」
◆

●七通目・・・「死」の条件－２

　息子さんを訪ねて一週間後、突然、病院から電話が掛かってきた。
　一瞬、認知症の息子さんの病状が急変したのかと思ったが、ガンで入院していたお父さんの病院からだった。
　今朝、亡くなったそうだ。そして、「息子(musuko)」と伝えて欲しい、と言われたそうだ。きっと、パスワードだろう。
　彼女と一緒に、お父さんからの『遺書』を開いた。
　「息子の今後が心配で、心配で、死に切れません。生命保険を高額なものに変更しようとしましたが、ガンが見つかった後だったので、変更することが出来ませんでした。会社から出るお金も、たいしたことはないでしょう。
　そこで、経理を担当していた私は、会社の使途不明金を探すことにしました。そして、見つけ出しました。会社を強請(ゆす)ろうと思いましたが、もう、私にはその体力が残っていません。
　『遺書屋』さんは、不正な依頼を受けないことも、先日、聞きました。だから、貴方に強請りを頼むつもりはありません。でも、ここに書き残しておくことにしました。
　どうするかは分かりませんが、きっとなんとかしてくれるのではないかと思って。
　息子に、何かを残したいのです。お願いします」
と書かれ、帳簿のような表が添付(てんぷ)されていた。
　　・・・・・・・・・・
　「ど、どうしよう？」
　「どうするって、私達で、会社を強請る？」
　「ば、馬鹿なことは、言わないでください！」
　「こんな時は、どうするか！」
　「ま、また、刑事さんですか？　で、でも、今回は、強請りですよ。いくら定年前だからって、強請りはしないでしょう」
　「誰が、刑事さんに強請りを頼むと言いました？　刑事さんに会社まで手紙を届けてもらうだけですよ。私達が行ったら、警察に通報されるかも知れないけど、刑事さんが届ける分には、警察に通報することはないと思うわ。
　その前に、この会社を、ちょっと調べなきゃいけないわね」
と言って、パソコンの前に座り、インターネットで何かを調べ始めた。
　　◆
　「刑事さん、お願いがあるのですが、聞いていただけますか？」
　「また、呼び出しやがって！
　お前達のお陰で、立て続けに事件を解決することは出来たが、お前達に雇(やと)われている訳じゃないんだからな」
　「えぇ、えぇ分かっています。税金で養(やしな)われているのですよね、刑事さんは」
　「また、ひどい言い方をするもんだな。アルバイトで、税金も満足に払っていない奴らに言われたくないもんだ。

ところで、今度は何を調べりゃ良いんだ」
「今度は、調べるのじゃなくて、この手紙を、ある会社に持って行ってもらいたのです」
「・・・・・強請りか？」
「ピンポーン。大当たりです」
「何、考えているんだ、お前らは！　現職刑事のワシに、強請りの片棒を担(かつ)げってか？」
「現職刑事だからお願いするのです。強請りにならないために」
「・・・話してみろ！」
そして、息子さんが若年性認知症にかかっていること。ガンでなくなった人から『遺書』を預かり、その中に使途不明のお金の行方が書かれていることを。
「ところで、嬢ちゃんが書いた、この手紙には、なんて書いてあるんだ！」
「読みますか？　読まないで、ただ届ける方が、良いかも知れませんわよ」
「ふざけるな！　一歩間違えれば、強請りの現行犯で逮捕されちまうんだぞ！」
「そこで、彼を使うのよ」
「嬢ちゃん、何を言ってるんだ！　奴を使うんだって？」
そして、彼女は計画を話し出した。
でも、そんなに上手(うま)く行くだろうか？　俺に、そんなことが出来るだろうか？
「・・・分かった。良く、そんなことを考え出すもんだな！
でも、こいつに、そんなことが出来るのか？」
「お、俺、そ、そんなこと、出来ません！」
「貴方は、いつも通りで良いのよ。貴方は何も考えず、何もしゃべらなければ成功するのよ」
「で、でも・・・」
彼女と刑事が同時に
「やるの！」
◇
「大丈夫か？」
「え、えぇ、な、なんとか・・・」
「顔が、青いぞ！」
「ひ、貧血を起こして、倒れそうで・・・」
「お前は、ただ、突っ立っていれば良いんだ。下手(へた)にしゃべるなよ。お前がしゃべったら、この計画はオジャンになっちまうんだから、絶対にしゃべんなよ。分かったな！」
「わ、分かりました。で、出来るだけ下を向いています」
「ずっと、下を向いてろ！」
と言っている間に、お父さんが勤めていた会社の近くに着いた。
「それじゃ、お前が先に行って、会社の前でウロウロしていろ。すぐに、俺がお前のところに行くからな。その前に、警備員に捕まるなよ」
「じ、じゃぁ、さ、先に行ってます」
会社の前でウロウロしていると、玄関の内側にいた警備員が、俺の様子(ようす)をうかがって

いた。そして、表に出て来ようとする寸前に刑事さんが来てくれ、腕をつかんで会社の受付まで引きずるように連れて行かれた。
　警備員も、後ろから着いて来た。
　刑事さんは、受付嬢に、
　「こいつが会社の前でウロウロしているので、職務質問したら、ここの総務課長に手紙を届けるだけだ、って言うんですよ。それだけじゃ、捕まえる訳にはいかないもんで。
　私が立ち会います。もし、そこに書かれていることが、強請りみないなもんだったら、即刻、逮捕しますから、安心してください」
　受付嬢は、すぐさま総務課長に連絡してくれた。
　警備員も、持ち場に戻って行った。
　俺は、ニッコリ笑って、刑事さんを見た。
　刑事さんに、恐ろしい顔でにらまれた。
　　・・・・・・・・・・
　会議室に案内され、総務課長と会った。
　「私に、渡したいものがあるとのことですが、なんでしょうか？」
　「いやぁ、こいつが貴方に手紙を渡したい、と言うもんで、強請りではないかと思ったんです。これが、その手紙です。読んでみていただけますか」
　総務課長が読み始めると、みるみる顔色が変わり、
　「ちょっとお待ちください。すぐに戻りますので･･･」
と、あわてて会議室を飛び出して行った。
　　◇
　「それから、一時間も待たされたよ。
　その間、こいつは、出されたお茶を飲んでいただけ」
　「ご苦労様でした。ところで、総務課長さんはなんて言っていましたか？」
　「総務課長は、
　『強請りではありません。社員の息子さんがご病気で、その相談の手紙でした。
　本人が直接、会社に届けられれば良かったのですが、ガンで入院し、亡くなる直前に、この人に届けるように頼んだそうです。
　刑事さんには、ご面倒をお掛けし、申し訳ありませんでした。
　息子さんは、会社が経営している病院に移し、一生、会社で面倒をみますので、ご安心ください』
って言ってたよ」
　「良かった。その会社を調べてみたら、入院設備を持った病院も経営していることが分かったので、ひょっとして面倒をみてくれるかな、と思ったの。でもその通りになって良かったわ」
　「なんて書いたんだ。こんなに上手くいくなんて」
　「聞かない方が良いと思いますわよ。もうすぐ、定年なんでしょう？」
　「分かったよ。ちゃんと定年を迎えさせてくれよな！」
　「一杯、手柄を立ててからね」

「でも今回は、手柄にはならなかったがな」
「手柄は立てられなかったけど、人を助けたじゃない」
「それで満足するか。
それじゃな」
……
「俺にも教えられないですよね？　手紙の内容」
「貴方は別よ。
刑事さんと会社まで行ってくれて、ありがとう。
話しは簡単よ。会社の不正をそのまま書いただけ。ただ、反社長派が不正を働いていたので、社長派の総務課長さんを呼んでもらったのよ。一時間も待たされたのは、社長さん達が本当かどうか調べていたからでしょうね。
刑事さんが一緒だったから、貴方には何も聞けなかったのだと思うわ。
さぁ、『遺書屋』の仕事は終わったみたいね。認知症の息子さんに知らせてあげたいけど、もっと貴方にうつったら困るから、やめときましょうね。
たまには、ファミレスで食事でもしましょうか」
「ま、待って。お、俺を置いてかないでくれ～っ」
◇
認知症の息子さんの『遺書』は、保管したままになっている。
お父さんとしては、息子さんの『遺書』を読んでみたかったろうな。そして、俺達じゃなく、自分で息子の望みを叶えてあげたかったろう。
息子さんの『遺書』は、このまま、ずっと読まずにすめば良いと思った。
でも、記憶が薄れていく中で、何を書いたんだろうか？
亡くなったお父さんのことも書いてあるんだろうな。
病院の人は、お父さんが亡くなったことを話したのだろうか？　話したとしても、すぐに忘れてしまうのだろう。
それの方が、仕合せなのかも知れない。

●八通目・・・拳銃ー１

　「お前のところに、『遺書』を届けに来たぞ！」
と、玄関のドアを開けるなり、刑事さんが大声で怒鳴った。
　俺は、アルバイトを終え、玄関のところに座って、靴を脱ごうとしていたところだった。
　刑事さんの声は、俺の頭の上を飛び越えていった。
　「なんだ。お前、そこにいたのか」
　「ビ、ビックリした。
　ま、まさか、刑事さんが『遺書』を書いて、持って来たんですか？？？」
　「なんで、ワシが『遺書』を書かなきゃいけねえんだ！
　ワシは、死なん！
　死んだとしても、残す『遺書』なんか、ありゃせん！」
　「じ、じゃぁ、誰の『遺書』ですかぁ？」
　「ちょっと、あがらせろ」
と言いながら靴を脱ぎ、ウサギのテーブルクロスの前に腰掛けた。
　「早く来い！」
　「は、はい」
俺はあわてて靴を脱ぎ、子犬のテーブルクロスの前に座った。
　「それがなぁ。俺の受け持ち区域で、自殺があったんだ。それも、拳銃での自殺だ。
ここ、ここ」
と言って、手で拳銃の形を作り、それをコメカミに当てた。
　「たまたま、刑事部屋に残っていたら、自殺した男の両親来て、部屋を片付けていたら、『遺書屋さんへ』と書かれた『遺書』があったと言うんだ。どうしたら良いでしょうか、ってワシに聞くから、『遺書屋』を探して、渡してやるって約束をしちまった。
　それが、これだ」
　「そ、そう言えば、拳銃自殺があったってテレビでやっていましたね」
　「刑事さん、ご苦労様。
　ところで、ご両親に書き残された『遺書』は、あるのですか？」
　「おぉ、嬢ちゃんか。どこにいたんだ」
　「部屋いたら、二人の大きな声が聞えたので、何事かと思って」
　「いや、両親宛の『遺書』はなく、これだけだ」
　「そうですか･･･？」
　「そんじゃ、ワシは、ちゃんと届けたからな」
　「帰るんですか？
　一緒に読んでいきませんか？」
　「それは読みたいが、ワシは『遺書屋』じゃない！
　刑事だ！」
　「そうですよね。

　でも、刑事さんも年だし、仕事が大変なのでしょう。
　そこに座って、目をつぶって休んでいったらどうですか？
　コーヒーでも飲みながら･･･。
　やだぁ、コーヒーを飲んだら、寝られないわね」
　「実は、ワシも読みたかったんだが、刑事が勝手に人の『遺書』開ける訳にはいかんからな。
　本来なら、担当刑事に渡さなきゃいけないんだろうが、たまたま、『遺書屋』を知ってたもんでな。
　正当な受取人に渡すのが筋(すじ)ってもんだからから、持って来てやった。
　言われてみれば、それを持って来るのも大変だった。
　ここで、ちょっと休ませてもらうとすっか。
　お前達の言葉が耳に入って来ても、しかたがないことだからな」
　「それじゃ、私達は、正当な受取人の『遺書屋』として、『遺書』を読んでみましょうか。
　貴方、お願いね」
　「わ、分かった。読むよ」
と言って、『遺書屋さんへ』と書かれた封書を、白い紙の手提げ袋から取り出し、封を切って開いた。
　　･･････････
　「なんだ、その字は！」
　「ど、どうしたんですか、き、急に。ビックリするじゃないですか」
　「だって、その筆跡、ワシが書いたのかと思って、ビックリした。
　悪かったな。でも、似たような字を書く人間もいるもんだなぁ。
　何せ、『遺書屋さんへ』と言われ、紙袋の中も見ずに持って来ちまったもんで、宛名も確認しちゃいなかった」
　「そ、そんなに似てるんですか？」
　「でも、世の中には、自分と似たような人が三人いる、って言うじゃないですか。刑事さんと同じ筆跡の人が、五人や十人、いても良いのじゃないですか？」
　「それもそうだが。でも、安心したよ。ワシよか、漢字を知らない奴のようだ」
　「け、刑事さん。
　目をつぶっているじゃなかったでしたっけ？」
　「おぉ、そうだった、そうだった。悪かった」
　　･･････････
　この人は俺と同じで、コンビニでアルバイトをしていたようだ。
　一人で夜勤をしている時に、裏で物音がするので見に行くと、血を流して倒れている男がいた。あわてて、携帯で１１０番しようとしたら、男がコンビニのゴミ箱の横を指差した。恐々(こわごわ)、ゴミ箱の横をのぞくと、黒い袋があったそうだ。その中には、油紙に包まれた物が入っていた。手に取ると、ずっしりと重いので、すぐに拳銃だと思った、と書かれていた。
　このまま拳銃を渡してしまったら、自分が撃(う)たれてしまうのではないかと思い、包みを持っ

たまま、立ちすくんでしまった。
　俺だったら、どうしただろうか？
　と考えながら続きを読んだ。
　「ドサッ」と言う音が聞え、血を流していた男を見ると、ぐったりとしていた。拳銃を、どうするか考えてしまった。警察が来て、なんだかんだと言われるのがいやで隠してしまったそうだ。
　それから、救急車を呼び、救急車とパトカーが来る前に、ゴミ箱の横をもう一度見てみると、小さな箱があった。ふた開けてみると、拳銃の弾(たま)が入っていた。恐くなって、拳銃と一緒にコンビニのゴミ袋に隠してしまった。
　警察は、ゴミ箱の中や、そのまわりは見たが、いくつも固く結ばれたコンビニのゴミと分かる袋までは、開けなかったようだ。
　それは、そうだろう。ロスの弁当や生菓子が入っているのが見えている袋の中まで見る気はしないだろう。せめて見たとしても、しばられた口のあたりだけで、硬くしばられた口をほどいてまで、中までは調べる気にはならないだろう。ましてや、真面目そうな店員だったら、悪さをするとは、思ってもみないだろう。
　殺人が、コンビニではなく、一般の家庭内で起きていれば、状況は違っていたんだろうな。
　　・・・・・・・・・・
　「そうか、やっぱり、あん時の。
　悪りぃ、悪りぃが、ちょっと寝言を話させてくれ。
　もう半年くらい前になるかな。コンビニの裏で人が殺された事件。
　今回の拳銃自殺よりも大きく報道されたから知っているよな。
　殺された男は、暴力団を流れ歩くヒットマン、そう殺し屋だ。担当の刑事が、コンビニの男の子に話しを聞いたそうだが、すでに刺されており、刺した人間は見ていないと言うことだった。男の子の勤務実態や生活習慣を、徹底的に調べ上げたが何も出なかった、と言うことで、その子の存在は忘れ去られていた。矢先の自殺ってことだ。
　担当刑事が、銃の出所を調べているが、分からないらしい。ヒットマンの持っていた拳銃ではないか、とまでは推測できるのだが、確証が持てないので、困っているって話してた。
　・・・何？　その時に、ワシは何をやっていたかって？
　別件だよ、別件！
　・・・なんの事件かって？
　うるさいな、思い出させるのか！
　苦情処理だよ、苦情処理！
　昔は、日本の警察の検挙率は高かったが、落ちた原因の一つが、住民の苦情処理だ、と言う話しもある。タクシー代わりに救急車を呼ぶのと同じなんだよ！
　基本的には、警察は民事に関（かか)わらないのだがな・・・。
　悪かった。寝言は終わったので、寝物語の続きを頼む。
　グーグーグー」
　　・・・・・・・・・・

一ヶ月くらいは、刑事らしい人に見張られていたような気がしていたが、二ヶ月も過ぎると、そんな影はなかったようだ。
その男の子は、拳銃が手に入ってしまい、苦悶(くもん)の日々を送り続けていた。弾倉を空(から)にして、持ち歩いていたらしい。
『使ってみたい、撃ってみたい、何かを撃ってみたい。
弾倉が空のまま、何度も、何度も引き金を引いた。
カチッ、カチッ、カチッ
空(むな)しい音。
撃ってみたい。猫でも、鳥でも、生き物を撃ってみない。
夜中にコンビニの仕事が終わり、帰りがけに、何度も、猫や犬に向かって引き金を引いた。
カチッ、カチッ、カチッ
このままでは、俺は気が狂ってしまうのではないかと思った。
カチッ、カチッ、カチッ
くさるほど弾はある。この弾を弾倉に詰め、そして引き金を引けば良いだけだ。猫に向け、
バン、バン、バン
虚(むな)しく擬音を口ずさむ』
「グーグー。その気持ちは良く分かる。
警察官だ、なんて偉(えら)そうに言っているが、ワシだって拳銃を携帯すると、『撃ってみたい』と言う衝動にかられる時がある。
その男の子も、苦しかったのかも知れないが、警察に来て
『拾いました』
と言えば、自殺なんかしなくてすんだのに。グーグー」
最後の便箋(びんせん)用紙に、両親に宛てた『遺書』が書かれていた。
でも、少しだけしか書かれていなかった。
・・・・・・・・・・
「もう、起きて良いですよ～っ、刑事さん」
「あぁ、お陰で良く寝られたよ。ありがとうな。
これで、一件落着～っ、だな」
「そうでしょうか？」
「何が言いたいんだ？」
「拳銃の弾は、あったのですか？」
「自殺した一発を除いて、弾倉一杯に入っていたよ。『遺書』には書かれていなかったが、使っちまったんじゃねえのかな。
警察じゃ、五十発も弾があったなんて、知りっこない事実だからな」
「この男の子は、使っていないと思います。
それに、自殺じゃないと思います」
「おいおい、それは、あんたのお母さんは、殺されていたよ。でも、これは自殺だろう。お前さん達への『遺書』も残っているし」

「だから、おかしいと言っているのです」
「？」
「そうでしょう。
受け取った『遺書』の中に、一緒にご両親への『遺書』も書かれているのですよ。
何故、自殺しようとする人が、私達の『遺書』の中に、ご両親への『遺書』を残したのですか？
それも、あんな、短い文で。普通は、別々の封筒に入れておくはずですよね？
それに、何故、私達に送ってこなかったのでしょうか？
まだ、両親に書いている途中だったんじゃないかしら？
それはそうと、五十発もの弾はどこに消えてしまったのでしょううね？」
「‥‥分かったよ。老骨に鞭打って、もうひと働きするか」
「その前に、お願いがあるのですが‥‥」

「分かったよ。やけくそだ、言ってみな」
「実は･･･」
と言って、話し出した。
「ワシが？　うぅーん。やっぱり、ワシだよな」
と言って、彼女の言われるままに、やり始めた。
「そんなことまで･･･。分かったよ、分かった。そんな目で見るな！」
と刑事さんは言いながら、微笑(ほほえ)んでいた。そして、作業が終わると、
「じゃぁな」
と言って帰って行った。
「上手(うま)くいきますか？」
「さぁ。なんとかなるのじゃない」
「無責任な」
◆
「お袋さん、お前達に『ありがとう』だとよ。
まさか、ワシに、あの『遺書』の改ざん、じゃないよな。あいつの書いた部分は、ちゃんと残してあるんだかたな。
それにしても、あんな名文、良く考えられるな。書きながら、ワシも目が潤(うる)んでしまったよ。
でも、お袋さんは分かっていたよ。
いくらワシの字が似ていると言っても、すぐに気がついたよ。
『あの子は、漢字の書き順が覚えられない子でね。だから、はねたりするところが、人と微妙に違うんですよ。最後に、つけ足しのように、別の便箋に書かれた字は、あの子のものでしたけど。
どなたかは知りませんが。いぇ、きっと『遺書屋』さんだと思います。よろしく伝えてください。
ありがとうございました』
だってよ。ワシが書いたとも知らないでな」
「やっぱり、お母さんは分かったのね」
「なんだ、嬢ちゃんも、ばれると分かっていたのか」
「まぁね」
「ひでぇな。
まぁ良いか。事件が解決したんで、感謝されたしな」
「テレビでは、暴力団に殺されてしまった、と言ってたけど、詳しい報道は、何もされていなかったわ」
「おぉ、それを話してやろうと思って来たんだ。
ワシだって、殺しとは思ってもいなかったよ。拳銃をそのままにして、弾だけを盗む奴がいる

なんてな。
　ひょっとして、これも分かっていたのか？」
　「だって、変でしょう？　流しの殺し屋が、殺しの依頼を受けて拳銃を渡されたのであれば、弾倉一杯の弾だけで十分じゃないかしら。
　残りの弾は、なんだったのか？
　残念ながら私には、そこまでしか分からなかったけれど」
　「流石(さすが)だな。
　箱に入っていた弾は、イミテーション、模造品だったよ。それに金メッキがされていた。
　殺し屋は、今までの仕事をマイクロフィルムにして、イミテーションの弾の中に入れ、お守り代わりに、持ち歩いていたらしい。
　殺しの依頼をしたヤクザの下っ端が、お茶を出す時に、それを見ちまったんだ。
　純金で出来た弾だと思ったそうだ。
　それで、殺し屋を、殺して奪(うば)おうとした。
　まったく、馬鹿げた話しさ。
　その下っ端は、殺し屋が出て行った後をつけて行った。そして、コンビニに入ろうとした殺し屋に、
　『すみません。親分から、これを渡すように言われたもんで。
人が来るとまずいんで、裏まで来てくれますか』
と、声を掛けた。殺し屋も、その下っ端がいたのを覚えていたんだろうな。何も疑(うたが)わずに着いて来たそうだ。そして、振り向きざまに刺したそうだ。奪い取ろうとしていたところに、店員が出てきた。あわてて、木陰に隠れた、と言っていたよ。
　店員の行動は、完全にばれていた、ってことだ。
　その時点で、警察に言っていれば、なんでもなかったものを･･･。
　下っ端は、店員を見張ったそうだ。それはそうだよな。店員は、最初のうちは、警察に見張られてたんだからな。
　･･･イミテーションの弾は見つかったかって？
　もちろん、見つかったさ。ただ、マイクロフィルムは、見ることが出来なかった。
　･･･何故だって？
　馬鹿な下っ端は、純金で出来たイミテーションの弾だと思ったらしい。それで、溶(と)かそうと、みんな火に掛けちまった。
　･･･火薬が入っていたらどうするんだって？
　この殺し屋は、流石にプロだと思ったよ･･･。
　･･･早く話せってか？
　分かったよ。
　それじゃぁ聞くが、ここに五十発の弾があるとするよ。その中で、二つか三つだけ、ちょっと色あせている弾があったら、実験的に溶かすとしたら、どれを選ぶ？
　そうだよ、俺だって、色あせた弾を選ぶ。溶かすのに失敗したら、綺麗なものを残したいか

らな。
　･･･金を溶かす道具を持っていたのかって？
　それは、持っていなかったさ。わざわざ買いに行ったらしい。小さい道具だったら、途中で気がついたんだろうが、一度に溶かして、金の延べ棒みたいのを作ろうとしたそうだ。すべてが溶け合っちまって、金なんて代物(しろもの)じゃなかったよ。
　･･･どうやって、警察が一杯いる中で、ゴミ袋の中から拳銃を取り出したかって？
　下っ端のヤクザも、そこまでは見ていなかったようだ。
　現実に、その拳銃を持っていたんだから、細かいところは良いじゃないか。
　･･･えぇ、警察の担当者に、『遺書』のことを話したかって？
　安心しな、話していないよ。ワシが独自で調べたことにした。賞状をもらえると思ったら、上司から、単独行動したので、皆の前では怒られた。でも、上司に警察署の屋上に呼ばれて褒(ほめ)められたよ。テレビドラマでは良く見るが、自分が経験すると、変なもんだな。
　そんな面倒な警察組織とも、もうすぐお別れだと思うと、寂しいがな。
　他に聞くことは、まだあるか？　なきゃ、
それじゃな」
　　◇
　「やっぱり拳銃なんて持っちゃったら、使いたくなるのかな？」
　「貴方も。コンビニの店員じゃない。貴方だったら、拳銃を見つけた時点で警察に言えた？」
　「どうかな？　俺、当事者じゃないし、その場になってみないと･･･」
　「でも、良く言われる危機管理って、実際に起こっていないことを想定して行うのよ」
　「わ、分かった。自分だったら、と思って想定してみるよ。
　目をつぶっていいか？」
　「目でも、鼻でも、口でも、耳でも、なんでもつぶって頂戴」
　「そ、そこまでは･････」
　　･････････
　もし、自分の手に拳銃があったら･･･。
　『遺書屋』を始める前の自分だったら･･･。
　彼女と出会えていなかったら･･･。
　俺も、拳銃を隠すかも知れない。そして、撃ってみたい気になったかも知れない。
　･･･何を撃っただろうか？
　逢ったこともない、『父』。それが出来なかったら･････････
　「わっ、わぁー」
　「どうしたの？」
　「む、無理です。あ、頭が、パ、パニックを、起こした」
　「ご、こめんなさい。そ、そこまで、考えてしまうとは、思わなかったわ」
　「い、いぇ、良いんです。お、俺の頭が、どうかしちゃったみたいで･･･」
　「一般的に考えてみましょう。
、世の中で起きている事件なんて、結構、そう言うパターンが多いのじゃないかしら」

「そ、そうかも･･･ネ」
「それに、戦争だってそうじゃない」
「戦争って、領土の取りっこじゃないんですか？
独裁者が、世界征服をしたいだけじゃないんですか？」
「昔は知らないけど、今の戦争って、作ってしまった武器を使うためにやっているのじゃないかなって思うのよ。
肉や野菜は生鮮食料品。新聞や週刊誌も似たようなものね。数日で価値がなくなってしまうもの。
冷凍食品は別としてね。
テレビや洗濯機は、壊れたら買い換える。
それじゃ、武器は？」
「･･･。つ、使ってもらわなければ、次が作れない！」
「使ってもらうためには？」
「せ、戦争が一番、使ってくれる！」
「でしょう。
でも、私、分からないことがあるの？
あの状況から、どうやってゴミ袋から拳銃を持ち去ったのかしら？
考えたら、眠れなくなっちゃうかも知れないけど、さぁ、寝ましょうか！
明日は、早いのでしょう。ちゃんと起きられる？
私、もう起こさないからね。
それに、あんたの部屋、もう少し綺麗にしてよ。ゴキブリが湧(わ)いたら、私のところにも来るのだから。
それじゃ、お休みなさい～っ」
「お休み」
･････････
そうだよな。武器を作ったら、使ってもらわなければ、次が作れないよな。そんな当たり前な話しを考えたこともなかった。
それに、新しい物を作るには資金が必要だから、古い物は安くても売ってしまう。
でも、武器を作っている会社に勤めている人だっているんだよな。その人にも妻も子供もいるかも知れない。
あぁ、分かんなくなっちゃった。
そうだ、彼女は、あんな状態で拳銃を持ち帰ったことが分からないっていっていたよな。
俺が働いているコンビニも、同じようなもんだよな。
ゴミ箱のそばに、ゴミ袋が置いてある。そのそばで殺人があったのだから、警官がいただろう。
そこから、どうやって持ち出せたのかな？
もし、殺人事件なんて起きていなかったら･･･
俺だったら、仕事が終わった後で、ゴミの集積所まで持って行くよな。そんなの、当たり

前じゃ･･･ないか。
　そして、集積所まで持って行ってから、拳銃を取り出した。
　でも、警官の目が届くところだったら･･･
　そうか、一度、拳銃の入ったゴミ袋を集積所まで持って行く。そして、バイトが終わって帰る時に、小さなゴミをコンビニから手に持って行けば良いんだ。
　そして、警官が見えるように、拳銃の入ったゴミ袋を開けて、その小さなゴミの袋を入れ、代わりに拳銃を取り出した。
　すでに、拳銃などを持っていないか、調べられているだろうから、二度と調べられなかった。
　「何、ブツブツ言っているのよ！　寝られないじゃない！」
　「ゴ、ゴメン。わ、分かってしまった」
　「何が？」
　「け、拳銃がコンビニのゴミ袋から消えたこと」
　「えっ、貴方に分かったの？」
　「そ、そう。た、多分、俺だから分かったのかも」
と言って、俺の考えたことを話してみた。
　　･････････
　「それが正解かもね。
　ありがとう。
　これで、ゆっくり寝られるわ。
　お休みなさい」

●九通目・・・ホームレス－１

「すみません。貴方、『遺書屋』さんですよね。これ、預かっていただけますか？」
「待ってくださいよ。急に言われても･･･。僕、後、一時間で交代するので、それからでも良いですか？」
「分かりました。一時間後に、駅前で待っていますから。取り合えず、渡しておきます」
◇
「何よ。貴方、それから駅で二時間も待ってたの？
うっそぉ～、信じらんな～いっ」
「な、なんで急にギャル言葉を使うんだよ。
違うよ。一時間待って来なかったんで、駅の周辺を探しまくってたんだ。駅の近くの川辺も。でも会えなかった」
「ご苦労様。それで、その『遺書』どうするの？」
「預かった以上は、保管しておくよ」
「それで終わり？」
「えっ、それでって、それで終わり」
「そうじゃなくって、何か覚えていないの？　その人のこと？」
「あ、あぁ、
男の人で･･･、
四十代位の人で･･･、
後は、後は･････」
「分かったわ。それじゃ、質問するね。
まずは、その人、何か買った？」
「えぇと、何を買ったんだったっけなぁ･･･」
「ゆっくりで良いのだから、考えてみて。
･･･何か思い出せない？
それじゃぁ、質問を変えるね。
その時、他に人はいなかったの？」
「そうだ。子供を連れた奥さんが、本を読んでた。
他には･･･、ナプキンを買った女性と･･･。
そ、そうだ！　今日は、一部の商品が安売りだった。
そうだ！　じ、女性用の、ナ、ナプキンを買った！」
「えぇ、男性でしょう？　ナプキンなんか買ったの？」
「そう。今日は安売りで･･･」
「安売りだからって･･･。
分かったわ。他には？」
「おにぎり。これもキャンペーン商品。
そうだ、焼酎も買った。ワンカップの。これも安売り商品なんだ。

　他に･･･、他に･･･、セロハンテープ。安売りじゃぁなかったけど。これで全部。い、いや、ペットボトルのお茶も買ってった」
　「ナプキン、おにぎり、ワンカップの焼酎、セロハンテープ、ペットボトルのお茶。
　「これで全部？」
　「う～ん、う～ん、う～ん。ない！」
　「他に思い出せることはない？」
　「･･･どうも、なり立てのホームレスみたいな、そんな感じがした」
　「なり立てのホームレスで、四十代の男の人･･･」
　「何か分かった？」
　「これで分かれば、『遺書屋』を辞めて、超能力者になっちゃえるわよ」
　「そうだよね。でも、超能力者の方が、かっこ良いかも」
　「馬～鹿」
　「ゴメン。
　そうすると、その人が亡くなるまで、待つしかないですよね？」
　「いいえ、おかしい。何かがおかしいと思わない？」
　「何が？」
　「おにぎりやお茶は普通でしょう。
　焼酎は、寝酒かな？
　セロハンテープ？　家の補修かな？
　でも、ホームレスの男がナプキンを買うかしら？
　何か変だよね。
　ところで、ナプキンて、昼用、夜用？」
　「えっ。よ、夜用の『どんなに多い日でも大丈夫』って書いてあった」
　「ところで、公園を探してみたの？」
　「公園？」
　「だって、ホームレスの人なんでしょう。それだったら、公園じゃない」
　「えぇっ？　ホームレスの人達は、駅のそばの川辺にいるんじゃないんですか？」
　「あれっ、テレビ見なかったの？　この前の大雨で川の水かさが増して、1人のホームレスの人が亡くなったじゃない。それで、多くのホームレスの人が公園に移ったって言ってたじゃない」
　「し、知りませんんでした」
　「テレビでは、もともと公園に住んでいた人達と、川から移動して来た人達が言い争ってる、とも言っていたわよ」
　「と、ところで、どこでテレビを見てるんですか？　ここには、テレビがないんだけど･･･」
　「それはそうと、その公園に行ってみない？」
　「こ、恐くないんですか？」
　「えっ、恐いの？」
　「い、いえ、行きましょう！」

◇
その公園は、木々に囲まれた静かなところだった。
こんなに近かったのに、今まで横目で見ていただけで、一度も足を踏み入れていなかった。
公園に来ても、することがなかったからだ。
中央の広場には、子供達の声が聞えるが、木立の中に入って行くと、いたるところに青いテントが張られていた。
「も、もう、帰りませんか？」
「来たばかりじゃない。
コンビニに来た人を探さなきゃ」
と言って、そばにいたホームレスの人に話し掛けていた。
・・・・・・・・・・
「結局、分かりませんでしたね」
「あんなに口が堅いとは思わなかったわ。
みんな、知っているのに、話してくれなかった。
みんな、言葉にせず、右てのひらを差し出して来るだけだった。
きっと、お金を渡しても、嘘の話しか聞けなかったと思うわ。
ここまでね。私達ができるのは･･･。
ま、待って、急がないと。
ねぇ、コンビニだったら、防犯用のビデオを撮っているわよね。その人の顔写真を印刷できる？」
「この前、万引きがあった時に、警察に渡すので、プリンタも買ったから出来るよ」
「じゃあ、すぐにプリントアウトして！」
「分かった。今から行って来る。
でも、なんで、そんなに急ぐの？」
「いいから、その人の写真を頼むわ。私は、刑事さんに電話する！」
「ま、また、あの刑事に？」
「そんなことは良いから、急いで。お願いだから」
「わ、分かった！　行ってくる！」
◇
「急いでいたようだが、もう、これが最後だからな。うだつのあがらない刑事が、定年間近に事件を解決してりゃぁ、他の刑事が白い目で見るわな。最近、その視線にたえられなくなってな。
今度は、なんだ？」
「い、急いで、こ、この人を探してください！」
と、彼女は、俺がコンビニでプリントした写真を見せた。
「この人が勤めているコンビニに、直接、『遺書』を持って来た人がいたんですって。なり立てのホームレスが･･･」
と言って、要点だけを彼女は話した。そして、自分の感じたことも。

「け、刑事さん、お願い！　急いで！」
「分かった。
嬢ちゃんの『勘』を信じるよ！
すぐに行ってくる！
警察の特権を使っても、捜すから安心しろ！」
と言って、飛び出して行った。
俺の出番は、まったくなかったが、彼女の『勘』が当たってくれることを祈った。
◇

「嬢ちゃん、間に合ったよ。安心しな」
「良かった。本当に良かった」
「でも、良く、
『ナプキン、おにぎり、ワンカップの焼酎、セロハンテープ、ペットボトルのお茶』から分かったな」
「だって、ホームレスの男の人が『夜用のナプキン』なんて買うのがおかしいと思ったの。そして、そこから買ったものを考えたの。
そうしたら、おにぎりとお茶は、普通でしょう。だから外したの。
残ったのは、焼酎とセロハンテープ。
ナプキンには、シールが着いているから落ちないようになっているの。タイツもはいているし。
でも、セロハンテープも買っているでしょう。そうすると、使い方が違うのじゃないかと思ったのよ。
それに、焼酎は？
ウエスタン映画を見ていると、必ず拳銃に撃たれると、お酒を吹きかけて弾を取り出すのよね。
そうすると、傷ついたところに焼酎で消毒し、ナプキンを当て、セロテープで止める。
そう思ったの」
「流石だな。嬢ちゃんの思っていた通り、店に来た奴の友人が、ケガをしていたよ。腹を刺されていた。嬢ちゃんが俺に知らせなかったら、死んでただろう」
「良かった。
でも、なんで、刺されたのに、病院に行かなかったのかしら？」
「嬢ちゃん。
職務違反になっちまうから、ソファーで寝かさせてくれ」
「あっ、すみません。
ご苦労様でした。
そこのソファーでお休みください」
「ありがとうよ。
それじゃ寝ちまうか。
悪いが、寝言を言っちまうかも知れんが、聞かんでくれよな。
グーグーグー。
借金取りから逃げていたんだ」
「警察に行けば良かったじゃない」
「警察からも追われていたんだよ。会社の不正を知っている男として、事情聴取をしようとしたとたん、恐くなって逃げちまった。
自分が不正していた訳じゃなく、会社のためなのにな。

会社じゃ、無断欠勤して困ってる、なんて言いやがった」
「ホームレスの人は、なんで、そんな人をかくまったのですか？」
「一ヶ月前までは同僚だったんだよ。会社の醜(みにく)い部分を見ちまって、仕事を続けるのが嫌(いや)んなり、辞めてホームレスになった。
でも、自分だけが辞めたからって、終わりゃしないさ。
刺された男は、その醜い仕事をやっていた直接の担当者だ。それに、ホームレス男とは同期入社だったんだよ。
そしたら、そいつが、公園で腹を刺されて倒れていた。
話しを聞いたら、気持ちが分かったので警察に通報することが出来なかった、と言っていたよ。
嬢ちゃんが言ったように、止血をするための医療薬品だ。薬局で購入すれば、バレると思ったらしい。
でも、誰かに知らせたかった。
それが、お前達だったようだな。
会社にいる時に、お前達のことを知って調べたらしい。そして、コンビニで働いていることも調べたそうなんだ。
変わった男だよ、そいつも。
ワシのことも知っていたよ。
だから、取調べをした刑事に、ワシに話すと言ったらしい。加害者でも被害者でもねえ人間だから、その刑事も、拒否できなかったんだな。その刑事が、嫌味ったらしく、ワシを呼びつけて言ったよ、『定年間近な刑事殿をご指名だぜ。早く取調室へ行って、事情聴取して来い』ってな。
歳は、ワシの方が上だが、階級は、そいつの方が上だから仕方ねえ。
そして、今の話しを聞いたんだ。
そうだ、『遺書』は、白紙だって言っていたぞ」
「ところで、なんで刺されたのですか？
犯人は分かったのですか？」
「おいおい、寝言なんだぜ。
質問が多過ぎる、と言っても、それを寝言に入れるのを忘れてた。
男を刺した奴は、まだ分かってない。分かっちゃいないが、あの男は、会社関係以外に刺されちまうようなことは、何もなかった。
女房と可愛い女の子の三人で、つつましく生活してた。あんな仕事を担当してなきゃ、こんなことにはならなかったのに･･･と、ワシは思っている。その線で、これから調査だ！
･･･あ～あぁ、良く寝た。寝言で、何か言ったかな？」
「と、ところで、あのホームレスの人は、何かの罪になるんですか？」
「安心しろ、事情聴取をして帰したよ。単なる、善意の通行人としてな」
「あ、ありがとうございます」

「お前に礼を言われる筋合いはない！
そうだ、ワシゃ･･･もう･･･ここには･･･来ないからな！」
「なんですか、急に？」
「お前達とつき合っていると･･････」
「どうしたのですか？」
「ワシゃ、もうすぐ定年だ！　だから･･･、だから･･･」
「ど、どうしちゃったんですか？」
「ゆっくりと･･･、定年を迎えたかった。
それが夢だった。
それが、お前達と、お前達と出逢っちまったために･･･、い、虐めにあっている気分なんだ！
今回も、上司に嫌味を言われたよ『今まで、窓際でうたた寝していたのに、心境の変化でもあったのですか？　そんなに無理しなくても良いですよ。仕事は、若い者に任(まか)せて、年金の計算でもした方が良いのじゃないですか？』だとよ。
だから、もう、お前達とお別れだ！」
「ほ、本当に、も、もう来ないんですか？」
「いささか、疲れたよ。
『遺書屋』の相手をするのもな。
少し、休養を取ることにした。
そして、じっくりと定年後を考えることにしたよ。
まぁ、今度、お前達に会う時は、お前達の結婚式かな。
それまでは、おとなしく、窓際でうたた寝しようと思っている。
それじゃな」
･････････
刑事さんは、そう言って出て行ってしまった。
「ほ、本当に、もう来てくれないのかな？」
「刑事さん、私達の結婚式に出席してくれる、って言ってたじゃない。刑事さんが必要になったら、結婚しちゃいましょうか？」
「え、えぇ、ほ、本気ですか？」
「冗談よ、冗談」
「な、なぁんだ」
「何、がっかりしているのよ」
「そ、それはそうと、ありがとう」
「何で、貴方が私にお礼を言うの？　さっきも、刑事さんにお礼を言っていたけど？」
「あっ、あぁ。あの人、お客さんだから･･･。ただ、それだけ」
「ふーん。ただのお客さんね･･･」
と言った後に、
「今までよりも、好きになったかも･･･」
と呟(つぶや)いてしまったみたい。

「えぇっ、そんな小さな声じゃ、聞えないよ」
「独り言よ、独り言。聞えたら、独り言にならないじゃない」
「それは、そうですけど。
ところで、この白紙の『遺書』は、どうしよう」
「本当に、白紙だと思う？」
「ち、違うんですか？」
「私にも分からないわ。でも、あのホームレスが亡くなるまでは、保管しておくのが私達の仕事よね」
「そ、そうですね」
「あのホームレスの人、独身だったのかな？　これから、どうするのかな？」
「ま、ま、まさか、あの写真を見て、す、好きになったんじゃないでしょうね？」
「そうかもね。
でも、私達、このまま『遺書屋』を続けられるのかしら？」
「そうですね。でも、『遺書』が届く限り、続けたいと思うんですが･･･」
「そうね。そうしましょう」
･･････････
「おい、ワシの老眼鏡、忘れていかなかったか？
ここに来る前までは、あったんだが？」
「ビ、ビックリした。
そ、その『おでこ』にあるのは･･･」
「こんなところにあったか。悪りぃ、悪りぃ。年は取りたくないもんだ。邪魔したな」
「ゆっくり、静養して、そして、英気を取り戻してくださいね」
「あぁ、ありがとうよ。お前達も頑張って『遺書屋』を続けな。
それじゃな」
◇
コンビニに、毎朝来ていたお婆ちゃんの自殺から『遺書屋』なんて始めてしまった。でも、『遺書屋』を始めたお陰で、お袋と会うことが出来た。それに、彼女とも、刑事さんとも。
しかし、お袋も、あばさんも、何人も死んでしまった。
俺が『遺書屋』を始めなかったとしても、死んでしまったのかも知れないが、なんだかやり切れない気持ちになってしまった。
･･････････
「何、神妙な顔をしているのよ。貴方には似合わないわよ、そんな顔。
今、刑事さんが、私の携帯にメールして来たの。
なんて、メールして来たと思う。
それが、笑っちゃうのよ。あんなに深刻そうな顔をして出て行ったのに、横断歩道を渡ろうとして、車にひかれそうになったんだって。そしたら、迷いが吹き飛んじゃったらしいわ。
さぁ、刑事さんのおごりで『回転寿司』を食べに行きましょう。早くしないと、気が変わっちゃうわよ～っ」

「ま、待ってくれ〜っ。おいてかないでくれ〜〜〜」

……

良かった。刑事さんが、戻ってくる〜！

でも、彼女、いつの間に刑事さんとメル友になったんだろう？？？

●エピローグ？

　申し訳ありませんが、まだ話しが完成していないので、この章は書けません。
　まだ、まだ、続くからです。
　その内、刑事さんが定年し、二人が結婚し(別々かも知れませんが)、それでも続いていると思っています。
　あなたが生きている間は、「エピローグ」なんて、ないのかも・・・。

●後書き（必ず読んでくださいね。筆者）

主人公は、

・俺：二十九才。コンビニでアルバイト中。孤児院で育つ

・彼女：年齢不詳。仕事不詳。お袋の友達の娘

・刑事：定年間近な、うだつの上がらない刑事

どこにでもいる人達を頭に描いて書いてみました。

この本は、

・名前は使わない（ＡさんもＢ子さんも）

・場所も明記しない

・性描写、暴力描写は書かない

を意識して書いてみました。

書いていて、名前を書かないって、結構、大変なことが分かりました。

でも、自由に名前を考えられる本も、また面白いかな、なんて思ってしまった訳です。好きな芸能人を頭に描きながら読むのも一興(いっきょう)かも。

・・・・・・・・・・

最後に、九頁(ページ)ちょっとの『空白の頁』があります。

そこには、この本を読んでいるあなた、今のあなたの『遺書』を書いてもらうためです。

そして、最後の『名前』には、本名でもペンネームでも、自分の好きな名前を書いてください。

『年齢』には、数年後、数十年後のことを考えると、本当の年齢を書いた方が、読み直した時に楽しいかも知れませんよ。

それを書き終わった時に

初めて、この『本』の完成です。

◇　または　◆

お疲れ様でした。

今やっと、この『本』が完成しました。

・・・・・・・・・・

次回作のために、あなたの『遺書』を私に送って頂けますか？

きっと、あなたと同じ悩(なや)みや苦しみを持った人が何人もいます。

あなたのためにも、そして同じ悩みを持っている人のためにも、次回作へ繋(つな)いでみませんか･･･。

送り先は、この本の出版社宛でお願いします。

●空白の頁

名前（　　）年齢（　　）

☆『遺書屋』（一通目～九通目）第２版

　２０１１年１月１１日に初版を掲載してから、何名かの方からご指摘を受けましたので、第２版として改めて掲載しました。
　以下の点を修正しました。
　①「どもる」のが多過ぎて読みづらい、との指摘が多かったので、出来る限り少なくしてみました。
　②誤字脱字の修正。まだ、多々あると思いますので、お知らせいただければ幸いです。何せ、直すそばから、誤字脱字を生み出している場合もあるもので・・・。
　そして、
　③『番外編・・・とてつもない依頼』を削除しました。ＳＦは馴染(なじ)まない、と言う意見が多かったからです。自分としては好きなので、『ＳＦ・遺書屋』（二通目）として収容しました。

　「完成」までには、まだ、程遠いようです。

（湊　覚）